安宅關阯

粟津溫泉

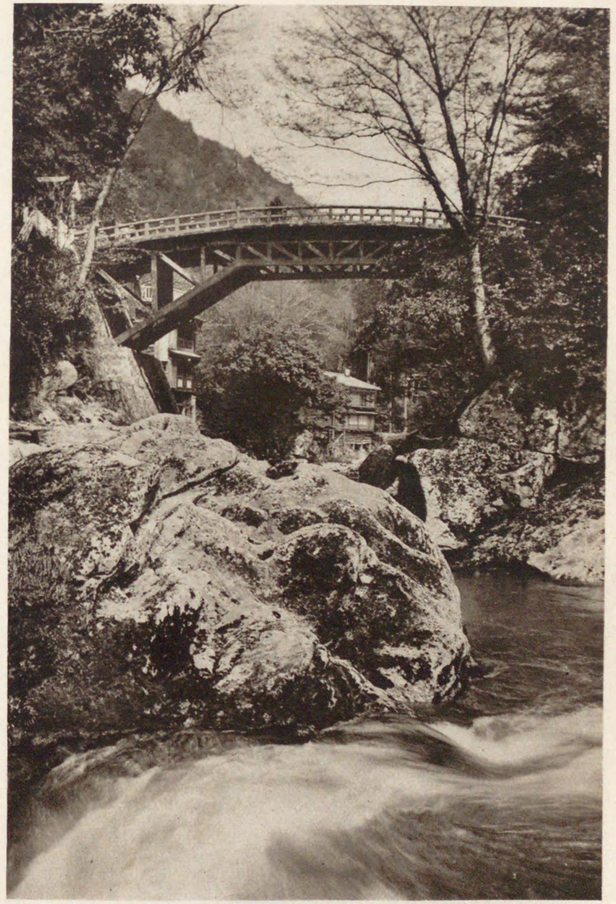
山代温泉

那谷寺

天然記念物金明竹

山中温泉全景

國寶金剛童子像（山代醫王寺）



山中温泉蟋蟀橋

國幣小社菅生石部神社(大聖寺町)

片山津温泉

柴　山　湯

國寶長流亭（大聖寺町）

嫁威の面

が二代の吉兵衛である。當時卷煙草の需要がやうやく盛になるを見て、直ちにこれが製造を初め、村井煙草の名は全國に知られ、巨萬の富を累ね、後、東京に移り銀行業を營み、各地に廣大な土地を有し、一時天下の富豪として活躍したものであつた。

白山比咩神社

金澤電氣軌道加賀一ノ宮驛から東約半粁、別に金澤市から乘合自動車もある

延喜式内の古社で加賀國一ノ宮、白山の御前岳に鎭座する奥宮に對して、昔は下白山といはれた。始めは白山の頂上にあつたのを、道路が嶮しく參拜に不便なので、山麓の現在の地に遷されたものである。

中世神佛混淆時代には白山五院、中宮八院、三箇寺など皆白山の所轄に屬し、白山衆徒の勢頗る盛んなものであつた。

鎌倉時代には木曾義仲、源頼朝等の武將の崇敬厚く、室町時代に至つては應仁の亂後、社運一時は衰へたが、江戸時代に前田氏が入國して社殿の造營から祭事修繕に至るまで總て行はれて明治維新に至つた。明治四年六月國幣小社に、大正三年國幣中社に昇格せられた。なほ現在日本國中に存在する白山神社は二千七百十六社の多數に上り、當社はその總根元社である。

社殿は本殿、幣殿、拜殿の順序に連なり、本殿は明和七年の建造で、堂社造である。幣殿拜殿は大正九年の建造で共に流造、この他神饌所、社務所、齋館、寶庫等が建ち並び、これらは昭和七年の竣功である。

境内に入る參道は櫻と杉との並木で、陽春四月の頃は美しい。參道中程には琵琶瀧がかゝり、右手には遙かに手取川の奔流を見下すことが出來る。境内は廣く欅、榎、杉などの老樹が鬱蒼として茂つてゐる。

富田景周の三州志によれば、當社の神倉には古書記錄など多數あつたが、長享二年に富樫介政親が本願寺派の僧徒のため、社稷を失つて以來、約一百餘年の間、僧徒の押領に任され、當社も數年廢社となり、古來の秘寶舊記類も大分散逸したとある。現在殘つてゐるものは何れも貴重なもので、白山記一冊、三宮古記一冊、神皇正統記四冊、白山宮莊嚴講中記錄一冊、その他刀劍二口、黑漆の螺鈿鞍一脊、狛犬一對、沈金彫手筥一合等は國寶に指定されてゐる。白山記は平安朝に於ける白山の事情を知る好箇の資料で、竪九寸二分、横六寸一分、紙數約十

七葉、全文中古體の漢文で一種の訓點が附けてある。内容は妄誕附會の說が少くないが、古い傳說を如實に記載してある點に大に價値があるといはれてゐる。

五月六日の例祭當日の神饌の中に、菅原道眞が加賀國守であつたとき、當社に梅枝糕を献供したといふ、口碑により梅ヶ枝の形に擬した餅を作り、油で揚げたものを神前に供へる。又口形餅、舌形餅を供へることになつてゐる。六月十八日の古遷座祭は靈龜二年に安久濤への御遷座を記念する祭である。八月十五、六兩日は初秋祭といひ、手取川沿岸の農民等の盆休みを利用して神恩報謝のため參拜するものが多い。

舊社地安久濤の森は加賀一ノ宮驛の附近にある七箇用水取入口の上に當り、最近架けられた和佐谷橋からの眺望は特に勝れてゐる。

船岡山は神社の西北にある丘陵で、八幡城、白山城、又は劍城ともいつた。背後に高山を繞し、西には手取川が流れて自然の要害地である。壽永年間林六郎光明が始めてこゝに據り、天正年間には丹羽長秀がこれを領し、拜鄕五左衞門を置いた。前田氏入國後は高畠織部を居らせしめた。頂上の眺望は優れて加賀平野の大半が一眸の中に收められる。

この地は上古の社地と傳へ、山腹に妙法窟があつて泰澄行法の跡と傳へてゐる。また神社の下方、白山小學校の前にあるカタグリ地藏は泰澄自作といひ、齒を病む者が箸を獻じれば靈驗があるといはれてゐる。

手取峽谷は鶴來から白山に至る間の手取川の溪谷の稱で、夏季の翠綠、晩秋の紅葉など淸洌な河水と相俟つて獨特の景觀を成してゐる。

中宮溫泉

金名鐵道白山下驛から東南約一七粁
途中尾添まで約八粁の間自動車がある

白山の山麓には加賀方面に中宮、岩間、市ノ瀨、飛驛方面に平瀨(大白川)などの聚落があり、登山者の足溜りとなつてゐる。この方面に入るには金澤からは鶴來町まで金澤電軌、寺井驛からも鶴來町まで能美鐵道があり、鶴來町からは更に金名鐵道が手取川の溪谷を溯つて白山下驛まで行つてゐる。

中宮溫泉は昔白山比咩神社の中宮があつたので此の名がある。

周圍山を繞らした別境で、白山溫泉と同じくやはり泰澄大師が開き、白山衆徒が勢威を振つた頃は大いに賑つたものであつた。

溫泉のある所は中宮の聚落より東八粁、尾添の聚落よりも約八粁の山中で東八谷といふので、八谷の湯ともいふ。白山火山脈の山間、尾添川の上流蛇谷川の一支流に臨み、三方山で圍まれ、唯西方のみ蛇谷川に沿ふ山脚によつて交通してゐる。土地は高く、盛夏の頃でも夜間は冷氣を覺え、冬季は積雪九米に達することもある。旅館は毎年六月初旬中宮聚落から移り、九月末には再び元の住所へ歸るのであるといふ。

浴場は白山登山口尾添口を左に入ると深い山の間にある。涌出口は山腹にあり、且つ崖下が極めて狹いので浴場を設けることができず、約九〇米の筧を架けてこれを浴槽に導いてゐる。

食鹽含有炭酸鐵泉で泉溫六十度、胃腸病、疝氣、白帶下に效く。

旅館 木房、西山、山田(二圓程度)

岩間溫泉

金名鐵道白山下驛から東南約二一粁、途中約一三粁の尾添まで自動車がある、金澤から別に直通の自動車もある

能美石川二郡の境にある尾添川の上流中の川を溯り、その南方から入る湯谷川の右岸、海拔九五〇米の地にある。もと尾添の湯ともいつたらしい。この附近は溫泉が非常に多く、泉源は四十餘箇所に及び、或は岩石の間から或は河床から濛々たる湯煙をあげて噴出し、頗る壯觀を呈してゐる。

文政年間に出來た白山遊覽圖記はこの狀態を「壁下有二大石一高七八丈、廣袤稱レ之北面有レ罅、大可二三四寸一、溫泉噴躍而出、當二天氣陰翳釀レ雨、泉勢猛烈、越二溪流一、直射二對岸石壁一、其光明瑩潔、一條水晶橫レ溪、觀者駭愕莫レ知二其端一、又頂上及西南皆有レ罅、噴二發溫泉一、其勢不レ如二北罅一、天下溫泉素多、而未レ聞二若レ此其奇且異者一也」と述べまた此の溫泉で飯を炊いたり、茶を煮ることもでき、骨節の疼痛や疝氣に特效がある。このやうな美質の溫泉が窮山に棄てられて野人樵夫のみを對手にしてゐるのは溫泉の爲めに誠に不幸であると結んでゐる。

交通不便の爲め久しく世に知られなかつたが、大正九

年頃から此の湯を木管で引き、浴舍を建てゝ登山者の便を圖るやうになつた。こゝから白山頂上まで約八粁、登路は餘り悪くない。

泉質は弱食鹽泉で泉溫八十五度、胃腸病、腦病、皮膚病に效く。

旅館は昭和九年の洪水にあひ今の所復興してゐない。

市ノ瀨

金名鐵道白山下驛から南約二九粁、自動車がある、別途金澤驛から自動車の便もある

白山登山はこゝが表口に當り、新舊の二路がある。新道は頂上まで一二粁、舊道は九粁で新道は舊道より樂であるが、變化に乏しい。こゝを根據地として大雪溪や幾多の火山湖や御花畠などを探るによい。

附近の川からは名物の鮎がとれて食膳を賑はす。

この地には昭和九年まで白山溫泉があつたが、その年の手取川の大洪水に根柢から流失し死者四十七名を出した稀事があつた。現在は市ノ瀨の聚落と柳谷川の吊橋を渡つた處とに旅館が二軒あるが溫泉はない。

白山溫泉は白山の登路に當るからその發見も可なり古いものであつたらうが、詳しいことは不明である。寶永年間の文獻には「白山麓御公領知風嵐村湯の儀、立始り相知不レ申候、由緒等も無二御座一候、先年越前黃門樣(福井侯松平秀康)御入湯被成候、其後但馬殿(勝山侯松平直長)も御入湯被成候由申候」とあり、また文化年間の越前國名蹟考には「一ノ瀨は常の居村にあらず、牛首、風嵐の者山畑をまもる小屋を立て、白山參詣の人又は湯治人をやどすなり」とある。近時最も世に知られたのは明治七年獨逸人のライン氏の紹介によるものであつた。

この地方に行はれる諫鼓踊は縣下に於ける山村の代表的舞踊である。

旅館　白山館、山田屋(二、三圓程度)

名物　山葵、枝柿、黑百合

かんこ踊

昔風嵐に源吾といふものが居り、白山の上に噴く煙は何に因るかをきはめやうと、山中に分け入つたところ、六萬部山の頂上で一異人に遇つた。これが泰澄で、源吾の爲に法を說いたので、源吾はその高德を慕ひ、踊をを

どつてこれを歡待したのに初まり、そこで神迎踊といふと傳はつてゐるが、その眞僞のほどはわからぬ。また一說には樂器に羯鼓を用ゐるから羯鼓踊といつたものが訛つたともいはれる。踊るときは男女とも皆扇を手にし、囃し手は羯鼓、三味線を以て囃す、服裝は白衣、水色の袴、白鉢卷などを用ゐる。

開山祭の夜などノンサ(爺さん)もトツサ(父)も、ンナボ(赤ン坊)はイネ(母)に預けて、足腰の立つほどの多勢の村人は誰でも湯宿の廣場に集まつて踊り廻る。或は輪になり、或は方陣に、更に數隊の縱列を作り、次第に歡喜の情が踊子の胸に高まつて、はては露骨な情歌が出てくる。しかし押し迫る山の靈氣の中に、千年の歷史と傳說とを包むこの原始的な踊を見るものには何の卑しい反應も起らないといふ。踊り疲れて湯宿で休めば男も女も酒を汲み合ひ、遂にごろ寢で夜を明かすのである。

その歌詞は、

河内の奥に煙が見える。いね(母)や出て見や、かすみか霧か、御前の山が燒けるのか。お山の燒の烟であらば、のん(父)の手を引け、んなぼ(幼兒)はおぶせ(背負へ)。そしておん地の裏山へ。

これは白山噴火の際避難の心得を歌ひこんだらしく最も地方色が出てゐる。なほ次のやうなのがある。

河内の谷は、朝寒い所ぢや。御前の風が吹きおろす。

加賀の白山白妙なれど、雪は降るまい六月は。

かんこを持てば蚊のめがはしる。みんな一時に團扇持て。

平瀨(大白川)溫泉

市ノ瀨の東約一六粁

白山の主峯御前岳から飛驒方面に下る地獄谷の溪谷大白川の上流左岸の岩壁から涌いてゐる。

泉質は硫黃泉で胃腸病、婦人病などによい。附近に直下六五米の白水瀧の勝がある。

こゝから白川鄕を經て飛驒の高山へ約六七粁ある。

旅館　三軒

白山

（一）金澤電氣軌道で鶴來驛に行き金名鐵道に乘換へ白山下驛下車、こゝから白峯を經て市ノ瀨まで自動車二九粁。市ノ瀨から頂上まで新舊二道あり、新道は一二粁三、舊道は九粁であるが、新道の方が登りは容易で時間がかゝらない。舊道は近いが嶮岨で時間がかゝる。しかしこの登路は途中景色の變化に富み登るにつれて、植物の變化があり、御花畠はよく發達し往返途をかへるが面白い。

（二）尾添方面からの登路は鶴來から白峰に至る縣道の瀨戸野で左折して岩間溫泉から登る。金澤から一日行程である。

（三）平瀨溫泉方面からの登路は飛驒の大白川を溯るもので、植物の分布を明瞭に觀られるばかりでなく、白水瀧の絕景がある。平瀨へ行くには越中の加越鐵道の青島驛から徒歩で庄川を溯り二日かゝる、平瀨から約二〇粁で頂上に着く。

（四）石徹白方面の登路は福井縣大野方面からの路と岐阜縣岐阜、八幡、白鳥から來る路と合する所で、大野からは九頭龍川を溯り、石徹白川を溯つて白山室堂まで三六粁一日行程としては强行である。また岐阜からは美濃町を經て白鳥に至り、徒歩二〇粁、越、濃の國境檜峠を越えて行く。

白山は加賀、飛驒、越前の三國境上に跨り、古來富士、立山と共に日本三名山として信仰登山者の多い山で、頂上は大汝、劔ケ峯、別山、三ノ峯などの數峯に分れ、最高峰を御前といひ、海拔二、七〇二米、この頂上に國幣中社白山比咩神社の奧社と三角測量標がある。白山の名は北陸の豪雪地に聳え、夏でも多くの萬年雪を戴き、四時白雪の絕えることがないので、此の名がある。

凡河內躬恒の歌に「消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」とあるは降雪量の多い白山の名の由來を語るもので、また淸原兼輔が「君が行くこしの白山しらねどもゆきのまに〳〵跡はたづねむ」と詠じたのも白山と雪と不可分の感じを表したものであらう。橘南谿の名山論には「白山は只一峰にて、根張も大に、

殊に四時雪ありて白玉を削れるが如く、見るなり目さむる心地す」とあり、平地から白山の展望の廣いことを證するものであらう。

山頂からは東は飛驒高原を經て木曾御嶽や乘鞍岳の雄峯を望み、東から北へかけて一列に連る北アルプスの諸峯が銀雪のやうに見える。西は北陸の平野を經て廣漠とした日本海を望み、南は重疊たる山波低く連り、遠く江州の伊吹山方面が望まれ、展望實に雄大である。

白山火山帶の盟主である白山は單式の成層火山で、多くの火口湖があり、これを繞つて數峯殆ど環狀をなして相連り、內壁は急な縣崖を以て火口壁をなし、舊噴火口の外側である大汝岳の東に小火口湖綠ケ池がある。また彌陀ケ原といふ約二粁平方の高原があり、夏季は高山植物が咲き亂れて美觀を呈する。

全山とも概ね角閃安山岩からなり、八合目以上は殆ど火山岩に覆はれ、缺頂圓錐の完全形ではないが、コニーデ式火山の形態をなしてゐる。

有史以來の爆發中その主なものは延應元年に千蛇ケ池、天文十三年の鍛冶屋地獄などで是等の爆裂口跡や硫氣跡は紺ケ池、油ケ池、血ノ池などで色々な傳說を持つてゐる。

白山は約一千二百年前から聖地として聞かれた山で、佛敎隆盛時代には立山と共に白山禪定で賑はつたところであるから、山中には佛敎に因んだものが多い。また登山者も明治中頃までは白衣の道者に限られたものである。近年は登山路が修められたことゝ交通の便利がよくなつたため婦人子供でも容易に登れるやうになつた。登山者は前日中に室堂に着き、こゝで翌朝の二時過ぎまで睡眠をとり、用意を整へて頂上へ登るのである。室堂から頂上まで一粁ばかりであるが、途中嶮しい岩石の上を登つて行くので、どうしても五十分位は見て置かねばならぬ。

傳へる所によると白山は養老元年越前の僧泰澄とその弟子淨定が共力して登山路を開いたといふ。それはどの方面から行はれたか明かでないが、加、越、濃から登る三登山路を開いたらしい。その後淳和天皇の天長九年に加賀、越前、美濃の三馬場が開け、各々神宮寺を建てられた。加賀馬場は白山寺（本宮）といひ、越前馬場は平泉寺、美濃の馬場は長瀧寺と稱へた。美濃のは明治初年までは白山中宮と稱へた神社で、一時は六谷六院を置き、

神殿佛閣三十六宇、宗徒三百六十坊に滿ち歷代天皇の崇敬厚く、屢々神領の寄進などがあり、聖域に牛馬の入ることを禁じた爲に、越前街道から飛驒街道に至る道は白鳥の南一粁餘の地點から阿多岐を經て大鷲に迂回したほどで、これが牛首街道と呼ばれるやうになつた。斯く勢威近隣に振つた白山中宮も戰國時代には神領は奪はれ、堂塔伽藍は兵火に罹り、宗徒は離散し、荒廢しはてたが、德川家康の時奮觀の百分の一を得るに至つたが、明治三十三年火災にかゝり全く昔時の偉觀を失つてしまつた。一方白山寺と平泉寺は加賀、越前間に屢々爭が起つたが、明治初年山上の神祠其他加賀の能美郡所管となり、また神佛の混淆禁止により、佛像を白峯村林西寺に移す事により落着した。

泰澄は越前國麻生津の人で十四歲の時越知山に登り、岩洞中に起居してつぶさに辛酸を嘗め、自ら薙髮して比丘となり、常に藤衣を纏ひ、松葉を食ひ、遂に悟を開いた。當時の人は彼を崇んで越の大德と呼んだ。大寶年中近畿の諸高山に登り、大和を經て山城に入り、役小角と共に愛宕山を開き後、北陸を行脚し、終に白山の絕頂を極め數年間こゝで修業した。時に行基も白山に登り來り、泰澄を見て微笑し舊知に遭つたやうにし、行基は懇に白山の靈應を問ひ、泰澄はこれに詳しく答へたといふ。

泰澄は諸方に巡錫して靈場を開いたばかりでなく、加越、濃の殖產工業を奬勵し、また神社佛閣の靈山に造林するなど德を後世に垂れ、神護景雲元年三月十八日八十六歲で入定した。

白山には高山植物が多く、山頂附近の室堂から千蛇ヶ池、彌陀ヶ原にかけていぶきとらのをの大群落を始め、はくさんよもぎ、はくさんあざみ、はくさんいはぎく、はくさんをみなへし、はくさんへうたんぼく、はくさんおほばこ、はくさんこざくら、白色のはくさんしやくなげ、紅熟の實を結ぶごぜんたちばな、はくさんばうぶう、黃綠色の小花をつけるはくさんさいこ、はくさんもみぢ、はくさんもち、はくさんだいげき、はくさんふうろ、からいとさう、はくさんはたざほ、はくさんいちげ、せんじゆがんび、はくさんたで、はくさんちどり、はくさんすげ、はくさんいちごつなぎ、はくさんみづごけ等があり夏になつて殘雪の消えるを待つて一齊に姸を競ふ御花畠が現出される。これらは白山の名を有する植物及び特殊の植物である。

白山の千蛇ヶ池に咲いた黑百合を北政所に獻じた佐々成政は遂にそれが殃をなして亡び行く因をなしたと傳へられてゐる。

黑百合の傳說

成政の事は太閤記にも記されて餘りにも有名であるが、彼が越中の領主であつたときは五十萬石であつたが秀吉に降つて肥後六十萬石に立身したのは全く政所の推擧にあるものとし、何をがな恩に報いようと思つてゐたが、何事にも足らないこととてないので、獻上に備へるものをと、白山大汝山の北千蛇ヶ池の嶮難の地に咲く黑百合を取つて大竹に寒水を湛へ、その中にこの百合を生け、早走りの飛脚を以て取寄せ、北政所へ獻じたところ政所は大いに喜び、この珍花このまゝに枯らしてしまふは口惜しいことゝし、當時美人で秀才の聞え高い淀殿でもこの花の出所は知るまいと、一種の心あてに朝込の茶會を催し、御客は淀殿としてその用意を進めた。そのとき千利休の娘綾といふものを召して道具の取合せなどを相談した。この利休の娘は百舌屋某といふ町人の妻となり、屢々淀殿へ召されて茶の湯の指南をした、政所も常にこの綾女に心を置いたが、今度の茶會は他に指導を受くべき者もなかつたので、密かに召したもので、明日の朝の茶會は淀殿を客に請ずるのであるから、萬事に落ちのないやうに、別して後入の花が黑百合であるから花器は取合せが肝心である。また古今に勝れた淀殿のことであるから黑百合のいわれも知つてゐるかもしらぬ、それを聞きたいと思ふばかりの趣向であるから茶會の終るまでは此所に留つて決して淀殿方へ噂しないやうにと綾女に申渡した。綾女もさてしも珍しい花である父利休はあらゆる數寄者に會つてゐたが黑百合のことは口にしなかつた。いづ方から獻じたものにやと尋ねられるまゝに政所も白山の北千蛇ヶ池に生える花であることを話した。

その翌日の茶會へ淀殿、正榮尼等待合に入り、政所はこれに對して挨拶萬事和かにして角あり、心付かざるに似て皆情を含み、双方少しも拔目なく中立も過ぎ、後入の花は、かの白山の黑百合を銀の花入に生けた。淀殿は殊にこの珍花を賞し、北國の珍花都の人の見ること難き品にて妾が一生の見始めで見納めにも候べしといひ、茶事悉く首尾よく相濟み、淀殿が歸つた後、政所は綾女や女中に

淀殿が珍花のことを種々賞めたのはよいが、どうしてあのやうに詳しく知つてゐるのか、誰かこの中に洩したものがあらうと問はれたが綾女は淀殿の恩、政所の情を思ひ所詮は事情を話して自害すべきであると覺悟して何ともいはなかつたので、結局これは佐々成政の方から洩したものであらうといふことになつた。

淀殿はこれより先綾女より黒百合のことを探り聞き、腹臣の者に命じて白山の黒百合を取寄せて置き、この茶會後三日目に殿中の局々の廻廊に夏花筒をかけ、花摘みの供養といつて秀吉に花を見せる催しが行はれた。秀吉は政所を連れて見て歩くと松の丸の局の花筒に、政所が珍重した黒百合が主もない竹筒にさし捨てられてゐたので、秀吉も政所も打驚き、茶會後三日もたゝないのに百里も遠い北國からこの花を取り寄せたとは思ひつかなかつたから、政所はさては佐々成政世に多くある花を珍花だといつて我を欺いたか、但しはほかの局へもこの贈り物をしたのか、何れにせよ限りなき恥辱を與へられたと激怒したが、色には出さなかつた。しかし政所方の人々三條、及び加賀の局などを初めとし多くの女中等は綾女を疑ひ、淀殿を恨み、成政を悪み、何とかしてこの恨を晴さんものと考へるやうになつた。一方成政はかゝる悪みを受けてゐるとは露も知らなかつたところへ、肥後國には一揆が蜂起し、國中大騒動となり、上方では三條加賀の局などが、言葉巧みに佐々成政は久しき怨敵であつたのを他に功臣もあるものを俄かに肥後を賜り大名に取立てるなどはいかゞはしいことであると訴へ、淺野彈正も肥後の動靜を視察し、佐々の政道が悪く、一揆に歸服の色見えず、一旦鎮まるといへども再び國中騒動に及ぶべしと報告したので、秀吉も終に尼ヶ崎で切腹を仰付けた。一方の英傑であつたが女子の舌頭に命を落したのは誠に惜しむべきことである。これは成政が越中を領してゐたころ、愛妾の早合百が小姓の竹澤熊四郎と通じたといふ讒言により二人を殺し、なほあきたらず早合百の一族十八人をも殺した。そのとき早合百は「立山に黒百合が咲くと佐々家は亡びる」といつて死んだ。後年天正十六年成政が白山千蛇ヶ池の黒百合を献したが、それが祟つて佐々家は亡びたと傳へるのである。谷間の白百合はその氣高い姿をこそ歌へ、高嶺に頸だれて咲く可憐な黒百合には何となく深い因縁のありさうな花である。

黒百合は本邦の高山特に白山に自生する多年生草木

で、莖は高さ一尺に達し、長卵形の葉を輪生し、花は暗紫色で六辨、地下に鱗莖がある。近來は觀賞用として庭園にも培養せられる。

松任町　松任縣下車

俳人千代女の出生地として知られ、加賀第一の平野で石川郡の中心にあり、四通八達の要衝をなしてゐる。人口約六千。

古へ林加賀介貞光の二子、松任十郎範光の館を置いた所といひ、天文以降一向一揆の巨魁鏑木尙專父子が居り始めて城郭の體をなした。天正年中若林長門がこゝに居り、同八年佐久間盛政に陷れられた。その後德山則秀、前田利長、丹羽長重等が居城した。

こゝは加賀平野の中央にあるため農作に適し、毎年十數萬石の米が集散し、縣下移出米の約三割を占めてゐる。

その他縮緬、酒、漆器などの產がある。

當町附近の村落で行はれる盆踊は七月十四、五、六、七日頃に老若男女が染編笠に身をかくし、前掛のやうな錦帶をして、青年達はこの地方獨特のぢよんから節を唄ひ、笛、三味線、太鼓などに合せて踊る。殊に松任町の八ッ矢踊　一木村の扇子踊、柏野村の盆踊が有名である。

旅館　笠屋本店、同支店（二圓程度）

名物　圓八あんころ餅

この名物は石川郡出城村の村山圓八といふものが、今から百八十餘年前、靈夢によつてその製法を知つたもので、風味よく年產額數萬圓に上るといはれてゐる。

千代尼塚　松任縣附近

松任町聖興寺境内にある。千代女は女俳人として知られ、「月も見て我はこの世をかしくかな」の辭世を遺して安永四年九月八日年七十四で歿した。境内にあるこの辭世の句碑は寛政三年千代女十七回忌に建てられたものである。千代女がどこに葬られたかは屢々問題になり、金澤專光寺か聖興寺か未だに明かでない。一向宗門徒は古くから茶毘を用ゐる習慣があるが、町人百姓は多く先祖代々の共同墓地に埋葬するからであるといふ。聖興寺の墓石は千代女の生家松任の西三昧にあつたのを移したものであるから、この下に永眠してゐるのではないかとい

はれてゐる。千代女が金澤專光寺に葬られたといふのは文化元年山東京傳著の近世奇跡考に、松任驛村井屋小十郎の物語があり、それによれば千代女の生家福增屋が同寺の門徒であつたからであらうといふのである。

美川町

美川驛下車

美川は縣下有數の港町で、石川郡の西南隅にあり、南は石川縣第一の大河である手取川が、鶴來方面から流れて來て日本海に注いでゐる。東は蝶屋、比樂島に連り、遠く白山連峯を望むことができる。町の東南北は水田、畑地の沃野に包まれてゐるが、西方の海岸は夏は海水浴が行はれる。

地質は第四紀層の沖積土で砂質壤土に屬してゐるから町内は年中乾燥してゐる。

昔は手取川を比樂河といひ、その河口港である美川を比樂港といつた。この手取川は加越能三國中第一の大河で、壽永二年木曾義仲が大軍を率ゐて上洛するとき、比樂の洪水が激しくて渡れず、河水の減ずるのを待つて、數萬の軍勢が手に手を取つて渡つたことから手取川と改稱したといはれる。

美川は古へは稻田野藤塚と呼び、久安二年に元吉寺をこの地に置いた。降つて明應八年藤塚、羽佐場の二村を合せて一村となし、寺號を取つて元吉と改めた。明治二年能美郡湊村を合し、石川、能美の兩郡から一字を取つて美川町とした。石川縣を金澤縣と稱した頃の縣廳の所在地であつた。人口七千。

港は東西七〇〇米、南北一五〇米、少しく狹隘で大船を容れ難いのが缺點である。享和三年頃には家屋櫛比して一箇年間出入の船舶千五百艘に及び、堀切、安宅、宮腰の各港を凌駕したといはれるほどであつたが、鐵道開通以來海運業は衰へ今は漁船の魚揚場として榮えてゐる。

美川橋の上流は鮎で名高く、春季河口を賑はすべく、漁は手取川の特色で、その透明纖美の姿と獨特の味覺は食通に喜ばれてゐる。その他鮭、鱒などの溯上が多い。

小舞子海水浴場

小舞子驛下車

驛前の海濱一帶をいひ、播州舞子の濱に似て、砂丘、合歡の花、月見草、松原などがあり、波靜かな遠淺の海

である。鯛網や手繰網の漁も盛んである。

松原の中にある砂路は昔木曾義仲が平氏を追擊した時の路であるといふので木曾街道の名がある。

旅館 小川屋、中島軒、鹿島屋（二圓程度）

加賀舞子海水浴場

寺井驛から西約半粁自動車がある

水清い遠淺の海で、白沙青松が播州舞子の濱に似てゐるのでこの名があり、濱茶屋、運動場などの設備も整つてゐる。

附近一帶では四月頃から初秋に亘つて鯛網が行はれる

旅館 望海樓、北野、山本（二圓程度）

寺井野町

寺井驛から四粁、能美電氣鐵道本寺井驛下車

寺井野は北陸道の宿驛として發達したところで、街形は全く道路の丁字形に準じてゐる。

この地は手取川及び梯川の沖積層中にある平原聚落で肥沃な平野が多く農業に適し、農園その他を拓いて園藝をなす者も多い。人口五千八百。

產業の主なものは九谷燒の陶磁器で佐野及び寺井野町から產出され、古來九谷燒の名によつて知られてゐる。安永年中寺井に九谷庄三、佐野に齋田伊三郎が出て着畫に各一家の風をなし新機軸を出した。爾來年と共に改善進歩の域に進み、町内到る處にその業を見現在は電力を利用する工場ができ、これらの業務に從事する町内の職工は約五百名に達してゐる。近來は各地の模造粗製品に對抗すべく、時代の流行と大衆好みを加味した新しいものを製出してゐる。

旅館 北野屋（二圓程度）

名物 九谷燒

齋田伊三郎と九谷庄三

齋田伊三郎は寺井野町字佐野の人で安永年中肥前島原の人本多貞吉が能美郡若杉村に來て青九谷を創めたとき、伊三郎は九谷庄三等とこれにつき門弟となり着畫を學んだ。その後肥前の人勇次郎が來て赤繪を始めたので伊三郎はこれに就いて六年の間研究をつゞけた。次いで

文化十三年から五年間は江沼郡山代村の豆腐屋市兵衛に就いて南京寫し染付畫を學び、文政五年には丹波國龜山と京都に出で、清水の與三平の家にとゞまり、彩色著畫を學ぶこと四年、同十年には肥前の伊萬里に行きその畫風と燒窯法とを修め、後尾張美濃を遍歷し天保元年に歸鄉し、名を道開と號して多年の蘊蓄を傾けて陶畫界に革新を起した。しかしその燒上にあきたらず二度燒の法を發明した。また佐野村の白黑赤色の粘土をためして、その陶器原料として適當なのを知り佐野の中村源左衞門に勸めて素地製造業を起させた。

明治元年六十五歳で歿後村民等追懷して縣社狹野神社の境內辨天山に祖靈社を建てゝ祀つてある。

九谷庄三は寺井野の人で文政の初年京都の人木米が肥前の人勇次郎を招いて瓦器に畫かせてゐたとき、庄三は年十一であつたがこれに就いて學ぶこと九ヶ月、その法を會得して青花磁を造ること五六年で、江沼郡山代村の宮本利八郎について赤色繪を學び一年でまたその法を習得した。年十八の時能登國羽咋郡小山西照寺の僧に聘せられ、一年ばかり能登諸山の土質を調べ火打谷村に黑土を發見した。これが顏料に適し能登吳須といふものである。後越中丸山村の甚右衞門に就いて燒燒の法を習ひ、歸鄉後專ら磁器に畫くことを業としたが、販路が廣くないので生計の方は可なり窮境にあつた。しかし庄三の研究熟は益々高まり青、黃、紫、紅など古九谷の風を存し、細密艶麗の畫風は世の歡迎する處となり、佐野大野附近に陶畫工が群出し、庄三に業を受くるもの三百餘人に達した。その作品の特色は磁質は眞燒で、素地の茶褐なのよりも淡鼠色を好み、決して白磁を用ゐなかつた。その彩釉は青、綠、紫、赤黑を用ゐ、最も多く金銀を交へ、精緻纖細な筆で爛漫とした花卉の密集した所を描くのを普通とし、また支那風の山水を描くこともあつたが人物や禽獸は少ない。また模樣を利用することが巧みで、これで畫面の空間を裝飾した。世にこれを寺井九谷といふ。

明治十六年八月六十八歳で病歿した。

卽得寺

卽得寺は寺井野町にある眞言宗大谷派の寺で寬永九年祐乘法師の開創にかゝる。

寺寶の短劒は火防の效ありといはれ長さ七寸五分、無

銘であるが國綱と傳へ次のやうな傳說がある。

今から百年ばかり前、町の北方三道山附近に牝牡の白狐がゐて人を誑かしてゐた。時に卽得寺の門前に久藏といふ馬子があり、いつものやうに火釜村から馬に酒樽をつけて歸る途中當寺と三道山との間で一人の老婆に出合つた。久藏はてつきりこれは例の狐が化けたものと思ひ欺いて馬に乘せ手早く繩をかけてしまひ、遂に寺內に入れ火で燻したところ果して獸體を現した。寺僧の專惠はこれを見て憐み、久藏を諭し自ら繩を解いて逃してやつた。翌くる朝その老狐が寺へ來て恩を謝し、火防の效があるといふ短刀を贈つて去つた。後二狐とも寺邊に棲んでゐたが、日を同くして寺院の床下に死んだ。寺井野町は幾度か火災に罹つたが、この寺だけは不思議に類燒を免かれたといふ。それはみな狐が置いて行つた短刀のせゐであるといふのである。

辰ノ口鑛泉

寺井驛から能美電鐵により辰ノ口下車驛附近

四方に丘陵を負ふ溪間にある小盆地で、釜谷川がその南端を流れてゐる。

口碑によれば泰澄大師の發見と傳へてゐるが、文書に表れたのは元祿十年四の鄉村名義抄に「辰ノ口村領の內昔年溫泉有之處退轉仕に付、湯本の者二、三人此所へ罷出村立申に付、則湯屋村と唱申由申傳候」とあるのが始めである。これは辰ノ口の東にある湯屋村の由來であるが、これ以前から辰ノ口に溫泉のあつたことは明かである。其の後寶永三年正月十六日金澤の鶴屋武兵衞等三人が辰ノ口に掘鑿することを藩に願ひ出たことがあつたが不成功に終り、天保五年正月來丸の人源助等が着手し、一度は洪水に遇うて廢滅したこともあり、幾多の困難を經て成功したといふ。

鶴來の儒者金子鶴邨は當時の模樣を次のやうに記してゐる。

天保五甲午春正月半の頃より、村人集て溫泉を掘る。是が爲に見物せんと近鄉の人々日々群集糸を引くが如し。然るに三月七日の頃、予も愛に遊ばんが爲に來丸村を過ぎ山を巡りて溫泉に到り見れば、此日は休日として溫泉を掘る人もなく物靜なりけり。湯壺は廻り二三間許掘ぬき、半ば水にして底は見えず、村人に問へば三間許掘りけるに、地底岩石にして掘り難しと聞えし。岩を打摧きしもの所々に積上り、中々湯口は知り難か

るべしと思ひぬ。あたりにあまたなる茶屋懸連ね、酒肴など賣る賤の女ありけり。

自動車電車の往復が頻繁な今日は旅館の面目も一新し、遠近よりの來遊者が多く、情味豐かな挿話の花を咲かし著しく活氣を呈してゐる。

温泉背後の山上に藥師寺があり、延享二年の八月相撲の關取鬼來崎岩右衞門が奉納した丈六の地藏菩薩を安置し、それに因んで毎年七月二十四日には地藏相撲がこの境内で行はれ、地方行事として知られてゐる。

泉質食鹽泉で加熱して浴用に供してゐる。火傷、皮膚病、腫物、リウマチス、胃腸病などによい。

旅館　松崎、田川、松田、柏木（二、三圓程度）

湯ノ谷鑛泉

寺井驛から能美電鐵により湯谷石子驛下車、驛附近

三面丘陵を繞らし、北は能美平野を經て寺井野町に展いてゐる。

往時は附近一帶に湯が涌いたので地方では湯ノ谷と呼び、遂にそれが地名に轉じたらしい、浴舍の出來たのは明治三十三年頃で極めて新しいが、現在では大きな旅館が二軒ほどあり、九谷燒の好況時代には殊に賑はつた。今も情味豐かな所として榮えてゐる。

附近の加賀製陶所はもと九谷原石破碎株式會社といつた所であつたが、大正初年から硬質陶器の製造をやつてゐる。

泉質食鹽泉で浴用加熱、慢性胃腸加答兒、消化不良、乾癬、慢性氣管支加答兒などによい。

旅館　北清、今川（二、三圓程度）

小松町

小松驛所在地

絹織物と九谷燒の產地で縣下屈指の商業都市である、人口約二萬。

能美平野を越えて遥か南東に白山連峯の雄姿を望み、西に日本海を擁し、鈴ヶ嶽に源を發する梯川は町の北部を貫き、柴山、木場、今江の三湖の水を合せて安宅河口に注ぎ、水運の便がある。

小松の地名に就ては諸說あるが、最も信じられるのは寛和年間花山法皇が北陸御巡錫の際、居館を梯川の畔に構へ、後園に多くの雅松を植ゑられたので、但人は小

松原といひならはし、後年略して小松といふやうになつたといふ。

天正年間には加賀の住人若林長門が初めて城を築き、後に村上義明、丹羽長重等が城主となつた。寛永十六年金澤の前田利常が致仕し、この地に來て老を養ふやうになり、民を慈しみ、内治に意を注ぎ、殖產興業を盛んにした。現在名を知られた絹織物、陶器、疊表等の諸工業は實に公が治績の賜であるといはれてゐる。

小松驛頭に立つた第一印象からこゝは商業地らしい活氣を呈してゐるが、交通も北陸本線が國道と並行して南北に走り、小松電鐵は遊泉寺に至り、天然資源の開發に便し、尾小屋鐵道は尾小屋鑛山に通じ、主として鑛山用の鐵道であるが、附近の住民の乘降も多い。途中の金野は九谷燒原石の產地で年產額六十萬圓といはれる。尾小屋附近は銅山は多いが目下は廢坑となつてゐるものが少くない。然し尾小屋だけは猶多量の產額がある。この地方は「田作り地」といひ、雜畑を開き、稗、粟、鴨脚稗などを作り常食に充て木挽、炭燒を業としたもので、當時は「嫁にやつても尾小屋はいやぢや、朝の暗から炭かつぎ」と謠はれたが、明治十年に銅礦が發見されてからは「嫁にやるなら尾小屋へやらんせ、金は天から地から湧く」といふやうに變化したといつてゐる。市内を流れる梯川は安宅港と舟楫の便が開け、また今江、柴山の西湖を經て隣りの江沼郡と物資の取引が行はれてゐる。

この地方で產する小松石は氣孔があいて大谷石のやうに耐火性があるから建築用となり、また燈籠として雅致がある。

旅館　佐成屋（二、三圓）

名物　雲花糖、百壽草

雲花糖は胡桃へ三盆白を加へて作つたもので高雅な風味があり茶事用として珍重される。百壽草は糯米と玉蜀黍を原料とし、紅白の二種あり形態百日紅の花に似てゐるので此の名がある。進物用によい。

小松城阯

町の西北隅にあり、今殘つてゐるものは天守閣の基礎ばかりで、小松中學校の運動場の一部を占めてゐる。高さ二丈餘巨岩を以て疊み、こゝへ登れば展望廣く、加賀平野は一眸の裡にある。天正年間匪賊若林長門の築城と

傳へる。天正七年柴田勝家が織田信長の旨を受けて、北陸道一帶を征定してから信長は村上義明を封して守護とした。慶長二年義明が越後國へ轉封せられ後に、丹羽長重が松任城から小松城に移り、松任の舊領四萬石、小松八萬石を得て、十二萬石を領有した。慶長四年に前田利長が德川氏の爲に出師するとの流言があつたとき、豐臣秀頼は丹羽長重を大阪に呼び寄せて、もし利長が攻め來らば汝は北征の先鞭となるべしといつて名刀吉光の一口を與へた。長重は平生の恩を報いる秋であるとして勇躍大阪を發し夜を徹して小松城に歸つた。後年これがために前田氏と隙を生じたといはれる。關ヶ原の役後家康の爲に國を除かれ、その後へ利長が入城し、白鳥濠その他を造營し、防備を嚴にし名實兼ね備はる浮城として明治維新に至つた。

芦城公園

小松城趾の一角にあり、山を築き地を穿ち奇岩怪石を配してある。丘上からの展望がすぐれ、白雪を頂く白山や眞帆片帆が點々と棉川に浮ぶさまは繪のやうである。

多太神社

町の南端上本折町にあり、縣社で多太八幡宮ともいふ。大山咋命以下九柱の神を祀る延喜式内の古社である。

花山法皇が北陸へ入らせられたとき、當社に至りて宸翰を納め給うた。壽永二年には木曾義仲がこゝに參籠して一族の隆昌を祈願し、且つ社領を寄附し、その年の五月には齋藤實盛が遺した甲冑と弓矢を奉納した。

寶物の主なものは光明皇后宸筆細字金泥經、崇光天皇後鳥羽天皇及び後光嚴天皇の宸翰等がある。

實盛使用と傳へる兜、袖、鶴當は國寶となつてゐる。例祭の七月十八日は兜祭といひ、これが觀覽を許してゐる。社傳によれば兜は多田滿仲から源家に傳へたのを平治の亂に際し、義仲から實盛に與へたもの、錦の袖は壽永二年實盛が北國にあつた時、宗盛に授けた直垂の斷片とし、表指の矢には治承三年三月十一日の銘があり、義仲の用ゐたものである。是等は實盛戰死の後、義仲が幼時彼の庇護を受けたことを思ひ、本社に奉納したものといふ。この兜は古來甚だ著名なもので、寛永九年九月藩

主前田利常はこれを見て儒臣松永昌三にその銘を作らせたことがある。

この兜は甲冑研究家の說によると足利時代（應永—大永）の製作といはれてゐる。

芭蕉の奥の細道に

此所太田の社に詣づ。實盛が甲、錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公よりたまはらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹かへしまで、菊からくさのほりもの、金をちりばめ、龍頭に鍬形打ちたり。實盛討死の後木曾義仲願狀にそへて此の社にこめられ侍るよし。樋口次郎が使せしことどもまのあたり緣起に見えたりむざんやな甲の下のきりぎりす

とあり、それに從ふ俳人も次のやうな句を遺してゐる。

ひたたれのうら珍らしやあきのかせ　北枝
會稽のにしきのきれやさつきやみ　涼袋
見るうちに肌さむうなる甲かな　汀畫
いく秋の甲にきえぬ蟇のしも　曾良
上元にかさりあり南無かふとかな　子皐
いとたうしかふとに梅の匂ひあり　桃方

菟橋神社

町の西部濱田町にあり、延喜式内の古社で縣社である。祭神は建御名方命、神武天皇、櫛明玉命、木菟宿禰。加賀藩主前田利常が小松城に移つてから、本社を金澤、小松兩城の鎭守とした。八月二十七日の大祭は俗に西瓜祭といひ、近郊からの參詣者で賑ふ。

五月十五日はお旅祭りといひ、當社と日吉神社の春季例祭で前後三日間全町を擧げてお祭氣分が横溢し、十二日には神輿が區内を巡幸し、各町より傳統の各種各樣の神具がこれに供奉し、子供獅子も各町競ひの振袖繻絆の裝ひを凝した少年達が練り廻る。有名な曳山車は現在八箇町にあり、近年は二三箇町宛交替して曳出す慣例となつてゐる。車臺に据ゑた舞臺の上で少女歌舞伎を演ずるもの、十三日は少女達の衣裳附を行ひ、翌日から晝夜數回辻から辻へ移動して開幕される。この行事は明和三年頃から始まつたといふ。

瀬領鑛泉

小松驛から約八粁、自動車がある

大杉谷川の上流にあり、四圍翠巒に圍まれて幽境である。昔波佐谷城主宇都宮丹波の家臣藤枝記内といふものゝ開湯で、傷病兵の療養に充てられたといふ。足利末期から知られてゐるらしい。一時は隆盛を極めたが水難に遭つたりして廢れてゐたのを明治二十六年頃からやうやく湯治場の面目を表して來た。炭酸泉で加熱して浴用に供し、胃病、皮膚病、リウマチスなどに效き、毒蟲、蝮の毒には特效があるといふ。附近には那谷寺の奥殿といはれる赤瀬殿、蓮如上人の遺蹟大杉圓光寺などがある。

旅館は目下休業狀態である。

赤尾鑛泉

小松驛から八粁、小松電鐵により輕海驛に下車すれば徒歩約二十分、別に小松驛から自動車もある

明治四十五年の發見で、附近の村人が蒸氣の立ち昇るのを見て、縣當局の試驗を受け泉效が證明せられ、初めて浴場が設けられた。次いで大正十年頃から旅館ができて次第に繁昌して來た。

湯は浴用加熱で腺病、皮膚病に效くといふ。

旅館　小杉屋（二圓）

佛御前墓

小松電鐵輕海驛から約一粁

中海村字原にある、平家の榮華が盛んであつたころ原の里に白川兵太夫といふ郷士が居り、その一人娘に生れた眉目麗しい佛御前は平家が天下に美人を集めたとき召されて都へ上つて白拍子となつた。佛御前の盛名は忽ち評判となり西八條の邸に行つて歌舞を命ぜられた。その頃清盛には祇王といふ愛妾があつて縱ひ佛といひ神と稱すとも豈に祇王の艶麗に勝らんやといつてゐたが、勸められるまゝに佛の歌舞を見ることになつた。佛は「よしさらば心のまゝにつらかれよ、さなきは人の忘れ難きに」舞ひ終つたのを見た清盛は深く心を動かされ、佛御前を引き止めてそのまゝ邸に止めて寵愛した。一方哀れなのは祇王とその妹の祇女で、君の寵なくては誰一人訪ふものなく終に世を儚なみ「萠え出るも枯るゝも同じ野邊の草、何れか秋にあはでほつべき」と一首を詠んで嵯峨

野の奥に幽居した。佛もこの歌を見て己れが身の上を案じこれも世をはかなんで佛門に歸し、名を報恩尼と改め嵯峨の往生院に住んでゐたが、後故郷に歸り草庵を結んで誦經をことゝした。村人達はあまりの不憫さに時々彼女を訪ねて身邊の世話などをしてやつた。然るに里の女房達は吾が夫のふるまひを妬ましく思ひ遂に彼女を庵室で殺してしまつた。

それ以來村の女がお産をするときには必ず大風が吹いて、雷鳴がするので村人等はこれを原風といつてゐた。村の人達も後に佛の寃を知り、像を刻み祠を建てその菩提を弔つたと傳へてゐる。

君を始めて見る時は
千代も經ぬべし姫小松
御前の池なる龜岡に
鶴こそむれるて遊ぶめれ

平家物語

安宅町

小松驛から四粁
自動車がある

梯川右岸の河口港で對岸の一丘陵には安宅の關阯があり、東南は肥沃な平野が連り、海岸聚落たると同時に源平時代には北陸道に添ふ集中聚落で港町として發達し、河上を横ぎる交通を監視するため、軍事上重要の位置を占め、屢々戰鬪の巷となつたことがある。延喜式には安宅驛となり、八雲御抄には安宅の橋と見え、源平盛衰記には壽永二年倶利伽羅峠に破れた平維盛の率ゐる平軍は藤澤、今湊を經、橋を斷つて安宅城を保つたとある。謠曲宅安や歌舞伎の勸進帳も明かにその時代の安宅の榮えを物語るものであらう。曆應元年には新田義貞の子義宗、義治等家臣瀨良田、堀口、江田、桃井等を連れて山伏に扮して潛行せんとし、看破されて關門を打ち毀して越後へ通り、永祿五年には朝倉景行が安宅に陣し、天正七年

には柴田勝家が安宅を燒くなど諸書に記されてゐる。昔はこの地に異國船が來寇したので寇ヶ浦といひ、その後來寇の事が絶えたので安宅浦と改めたといふ。

德川時代には前田藩の獻米を藏める米倉が設けられ、爾來北陸街道の樞要地として空前の賑をなし、元祿五年二月の頃は戸數二百二十軒を數へたといふ。明治に入つてからは始めは海運業が盛んで巨富をなした人も多かつたが次第に衰へ現在は港としては衰退し、陸の安宅として工業地帶として絹織物の產があり、交通の便よく、人口約二千を數へる。

安宅の關阯は二堂山の南に依然として遺り、一時海上數粁の沖合に沈降したといふことは德川時代に出來た三州名跡志に「古の關跡二三里海中に在りて、百年前まで松の古木あり」とあるに基くもので、また同時代に編まれた「金砂子」などの隨筆が誤りを傳承したことに起因し、何れにしても現在では妄說であるとされ、二堂山に安宅關阯碑が建つてゐる。

勸進帳の事實も疑はしい點があるといはれてゐるが、傳說では文治の初年源頼朝と弟義經との間に仲違ひがあり、これを利用して兩者を離間せんとするものもあつたので同三年二月義經は奥州の藤原氏に頼る目的でその妻及び從士十幾人と共に山伏姿に身を俏し、一代の英雄も忽ちに落莫の落人として、荒浪吼ゆるこの岸を北上し、關守富樫泰親の尋問に遭つたけれど、辨慶の智と富樫の仁とにより、遂に泣かぬ辨慶をして一期の涙にくれしめたといふので、謠曲に歌舞伎に涙を誘ふものとなつてゐる。

勝樂寺には義經一行が無事に關を通り、この寺で一休みし、强飯の饗應に預りその禮に法螺貝を贈つたと傳へてゐる。

梯川左岸の二堂山なる住吉神社は關守富樫氏加賀藩主を始め、一般地方民の信仰が厚い、寺寶に關所の遺品突棒、刺股、槍、安間桃春筆安宅關の圖などがある。

〜〜〜

最も古い歴史を持つだけに、極めて落着いた氣分を漲らせてゐる。能美平野の南隅を占め、海拔七米に過ぎないが、東方一帶に養老山があり、丘上に道路を通じ眺望に便してゐる。聚落の中央にある總湯は一般の人が入浴する共同浴場で大正十年の改築で設備が行屆いてゐる。總湯を繞つて十幾つかの旅館が各内湯を持つてゐる。附近に名刹那谷寺があり常に遊覽客が多く、これは、この溫泉の持つ强味であらう。それに他の山中、山代、片山津のやうに遊樂的の所がなく幾分田舍びた風がないではないが、自然の懷に抱かれ世俗に煩はされない悠然とした湯治場である。

溫泉の發見は今から約一千二百餘年前越前の泰澄法師が、白山に詣でるとき、妙理權現の靈告によつて開かれたと、この地にある大王寺の緣越に記されてゐる。今も溫泉旅館の中に法師を氏とするものがあり、その由來は泰澄が雅亮法師をこゝに留めて浴舍を起した時に始まるといつてゐるのは事實の眞僞は兎に角、浴客の世話をした法師が遂に本業になつたなどとはありさうな事にも想はれて面白い。

溫泉場の東方にある養老公園は幾歲山を拓いた浴客の散策地で、大王寺、白山神社、泰澄の銅像などがある。この白山神社は源平盛衰記に安元三年二月白山衆徒神輿を供奉して粟津白山社に駐まるとあり、粟津總社である。その後方にある相撲場では每年八月二十八日の溫泉祭に盛大な相撲が催される。頂上からは遠く白山、日本海を眼下に木場、今江、柴山の三湖を山村水郭の間に隱見する。

また東南方の丘陵では一月上旬から二月下旬までスキーが行はれ、各旅館にはスキーの備付がある。

行事には菖蒲湯、丑の湯、大寄合、相撲、盆踊など行はれる。

泉質單純硫黃泉で溫度四七度、呼吸器病、リウマチス皮膚病、性病。飲用は每食二〇〇瓦を適量とする。

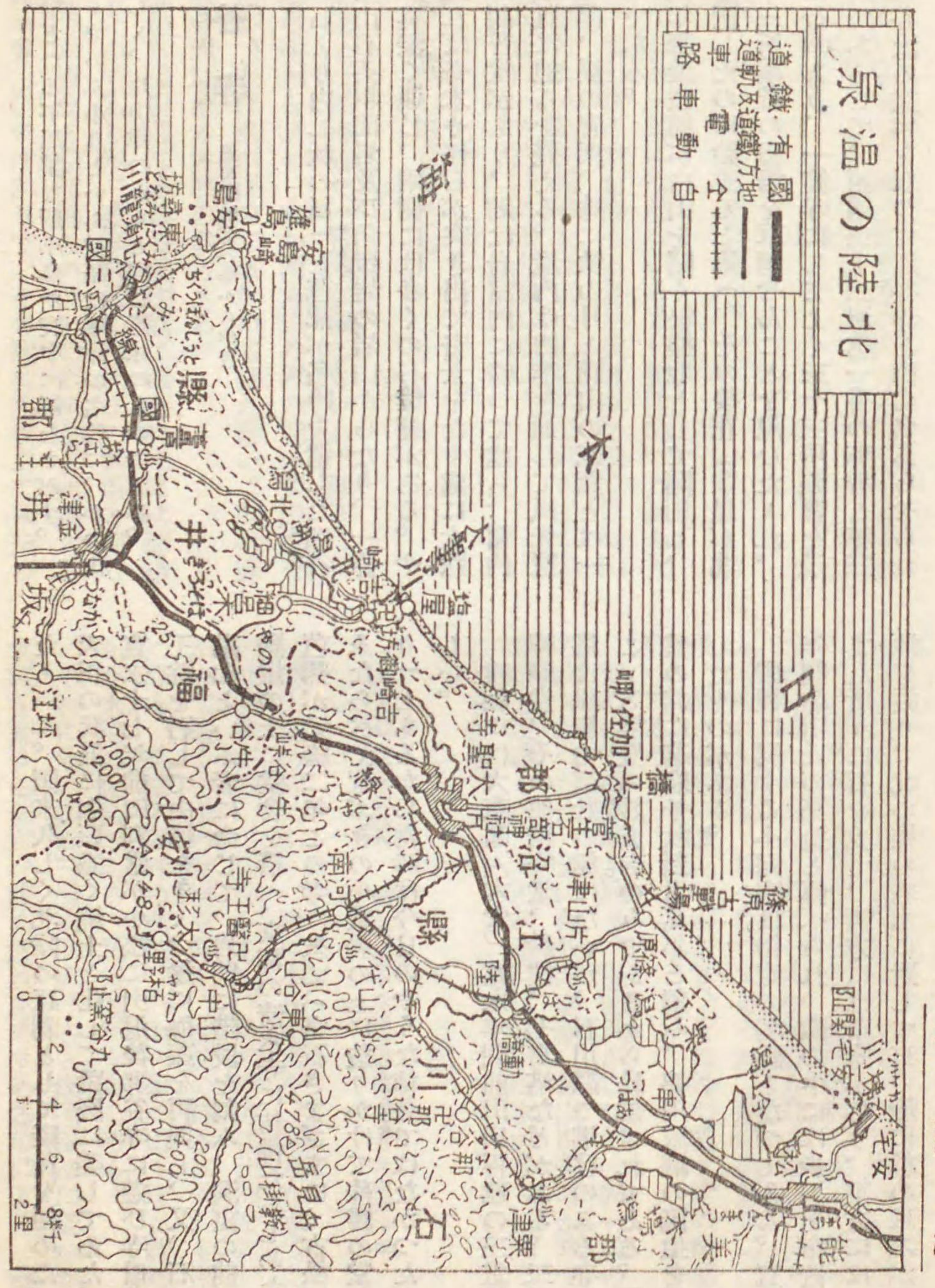
旅館 法師、坂田屋、山下、嘉宮、のとや、のみや、龜谷、森本屋、橋本屋、山本屋（三、四月）

名物 湯の花、湯の花煎餅、羊羹（總ての加熱は溫泉を利用して精製する）

俗　謠

粟津開けて千年たつが此處で契るも深い緣
鳥は鳥ぢやが粟津の鳥は男喜ぶきげん鳥
藥師山から三湖が見ゆる音に名高い安宅まで

北陸線



粟津湯どころ不思議な所小鳥や夜中に餌をさがす。

註　こゝでいふ小鳥といふ隠語は粟津の名物で、かの山中のしゝ、片山津のかもと同じ意味のものである。

那谷寺

温泉電軌那谷寺から半粁

「石山の石より白し秋の風」と芭蕉が名吟を遺した那谷寺は、全山石英粗面岩及び角閃岩の岩山からなり、一條の坦道が奥深く通じ、両側には多くの石燈籠がある。やうやく入れば奇木や怪石が突き出て奇景をなす處に大悲閣といふ觀音堂があり、閣は岩窟内に倚つて建ち、窟内暗く靈氣肌に迫るを覺える。境内は四季を通じて風光麗しく春の櫻、夏の青葉、殊に秋の月と滿山の紅葉とは一入の眺めである。

養老元年泰澄法師が白山を開く根據地として開創し、岩窟に安置したのに始まると傳へ、その後花山法皇が北陸に三十三所觀音の靈場を草創せんことを思ひたゝれ、この地に行幸あり、一箇寺にしてよく三十三所觀音を示現する所であるとて、西國三十三所第一番の那智と第三十三番の谷汲の文字を取つて那谷寺と御命名あらせられたといふ。爾來久しく北陸の巨刹として隆昌を極めたが天正の兵亂に伽藍悉く燒土と化して荒廢に委してゐた。寛永十七年前田利常が小松に引退後那谷寺に遊び寺僧花王院を召して由緒をきゝ、遂に伽藍を再興し、又、石切勘七といふ者に命じて、岩壁に階段を刻み、洞窟の前、懸崖の上に堂舍を構へ、京都の清水寺に彷彿たらしめた。芭蕉が元禄二年この寺に來て「奇石さまざまに、古松植ゑならべて萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて殊勝の堂なり」とあるから當時は今日のやうな柿葺ではなかつたらしい。

建物には大悲閣（本堂）寛永年間前田氏再建の三重塔護摩堂、その他鎮守堂、鐘樓、七重塔などがある。三重塔は纖細で豪壯の趣はないが、石川縣で塔婆のある寺はこゝと能登の妙成寺のみであるから珍重されてゐる。露盤の銘に幕府千秋新君萬年と刻み、德川家綱の誕生を祝したものがある。

庫裡に屬する小庭園は指定の名勝となつてゐる。寛永年間前田氏の築造と傳へられ、園の中には歩石を布置しまた所々に石を立て、西方には茶室があり、東方には小池を掘り、北の椎の老木に對して東の境に杉の巨木が聳え庭石は多く瑪瑙を用ゐ、蘚苔がこれを蔽つて趣致幽寂を極めてゐる。

帶仕山

粟津温泉から三〇〇米

俳人千代女が「霞にも肌はゆるさじ帶仕山」と詠んだところで、昔山麓に城を築くとき、飲料水を引く爲に山の中腹に設けた水路が帶狀をなしてゐるので此の名がある。名所八景の一で花時には人出が多い。

三湖臺

粟津驛から二粁

古來戰史上の要害地で一名御幸塚ともいふ。脚下に今江、木場の兩湖を眺め、遙か西方松の木の間に柴山潟を仄見したが、今は松が茂つて來たので見え難い。御幸塚は御幸塚城内にある古墳の名である。

江沼郡から能美郡に通じる北陸道は鎌倉時代には海岸線を通つたのであるが、戰國時代には現在の國道と同じであつた。木場潟と今江潟との間をこの街道が通過する所の幅は一五〇〇米ばかりで、その間に海拔二二米三の丘陵があり、北方の背面は今江川によつて限られてゐる。この地形を利用したのが、御幸塚城である。從つてこの城樓から望見すれば一人の潛行も許さない要害である。今は城中全く畑となつてゐるが、南面に長さ二三〇米、高さ七米の掻上げがあり、その外に幅七米の塹壕が殘つてゐる。

初めは富樫泰高が據り、富樫氏が亡びて一向一揆の居る處となつたが、後に佐久間盛政、德山則秀等が來て御幸塚を攻略した。天正八年には柴田勝家がこゝに陣したこともある。

片山津温泉

動橋驛から温泉電軌により片山津下車

柴山潟の畔にあり、西に小丘を負ひ、湖水を隔てた北方は丘陵が續いて薄林がある。その南方は江沼平野が展がつて遠く白山の諸峯を仰ぐ。旅館の建物は何れも湖水に臨み、見晴す湖畔の風色、白山一帶の山々など詩趣豐かな水郷の湯街である。又舟遊びも樂しめる。

それに他の加賀三温泉に比べると鐵道線路に近いから北陸を旅する者が、旅の疲れをやすめるのによく、浴後

の淺酌低唱などに喜ばれてゐる。散策地には齋藤實盛が老の最後を華々しく飾つた篠原の古戰場があり首洗池、實盛塚など、回顧趣味が豐かである。

溫泉の涌出口はもと湖中に在つたのを埋立地としたもので、その所在は享和年間の麦慰紀聞にも「此領内潟の内に湯出る所あり。或人竹を以て湯の出るといふ所へ入れ見るに、あたゝまりしこと甚しと。青竹ならば色も替るべきと覺えし由物語なり」と記されてゐる。埋土工事の行はれたのは明治三年以後で、同十年には溫泉宿ができたやうであるから、それ以前に泉源が保護され樋によつて導かれてゐたのである。同十五年にはこの泉源以外に掘拔工事によつて他にも涌出を見ることがわかつたので、廣く泉源附近を埋立てゝ、多くの掘拔工事を行ひ益々豐富な湯量を得るやうになり、現在はそれら總てから集めた湯を電動力で各旅館へ送つてゐる。今では十數軒の旅館には何れも内湯があり、店鋪は軒を連ねて華かな湯の街を成し、なほ年を追うて各旅館では競つて湖面を埋立てゝ進出し、宏壯な建築が殖えて行くやうである。

泉質鹽化土類及び石膏含有食鹽泉で、溫度七十四度、慢性胃腸病、皮膚病、婦人病、リウマチス等によい。古くから「脚氣山中かさ粟津胃腸疝氣は片山津」といはれ胃腸病には特效があるといふ。飲用には一日千五百瓦ぐらゐ用ゐるとよい。

毎年六月四、五日は菖蒲湯といつて、土地の有志青年等が菖蒲、蓬などを浴槽中に投入れる行事がある。六月二十七八日は開湯記念「湯の祭」といひ、色々の催物や他より興行物などが入り込み、浴客も多く大いに賑ふ。

旅館　矢田屋、湯の出、東野、あらや（三圓）鹿野、森本、吉野屋、手塚屋、關、はやしや、とくのや、ぜにや、かもや、菅波屋（二圓）

名物　湯の花煎餅、溫泉染タオル、九谷燒、竹細工

片山津節

春が來たぞヘアノ片山津、花の安宅の關あけて
芦の葉かげの小舟に月を、のせて涼しい片山津
鴨の浮寢の柴山潟に鴨と浮寢をして見たい
鴨で一生くらすはいやぢや早く家鴨にしてほしや

註　こゝにいふ「かも」とは湯女の代名詞で、柴山潟に浮かぶ水禽から來たものといふ。

柴山潟

柴山潟は一に瓢海ともいひ、砂丘を以て海と隔たれた潟湖で江沼、能美兩郡に跨り、串川によつて今江潟と通じてゐる。これらの湖水は梯川により小松の西方を經て安宅浦に注ぐ、安宅は古來怒濤の爲に屢々閉塞され、湖水の氾濫も時々あつたが、今は湖の西北手塚山から約一粁餘で新村海岸に出る掘切工事が行はれて水難の憂なくまた漁舟の出入も自由に便利となつた。長さ四六九一米、幅九八二米で周囲一四粁三、こゝへ注ぐ河川中の主なるものは動橋川、馬渡川、八日市川で、溫泉の涌く所は南西の湖底である。

こゝから獲れる水産物はすつぽん、はぜ、ぼら、めなだ、なまづ、こひ、ふな、にごひ、もろこ、はいからもろこ、へこ、さけ、ます、いはな、あゆ、あまさぎ等がある。その他貝類にどぶがひ、まるどぶがひ、からすがひ等を産する。

江沼、能美兩郡の間には柴山、今江、木場の三湖があり、柴山潟が最も大きい。上代ではもつと水の面積が廣かつたのであらう。この水の多い地方を江沼と呼ぶのはまことに故あるかなである。

今江潟

一に琴湖ともいひ、能美郡の南西にあり、その南東及び北部沿岸一帶の低地は河成沖積層で、その西方海岸一帶は海成沖層であるから崎壁がなく、沿岸は緩い斜面をなしてゐる。長さ二〇七三米、幅一三〇九米、周囲八粁である。注入河川は今江前川によつて木場潟より、串川を通じて柴山潟より、梯川の河水はその河口が閉塞するときのみ注入してゐる。

木場潟

能美郡の南にある潟湖で、その東には粟津の丘陵が連り、西は月津臺地により柴山潟と今江潟の南端に境してゐる。長さ一四一八米、幅四三六米、周囲五粁六。注入河川は津波倉川、山代川などあるが、水量少く夏は涸れてゐる。排水口には今江前川があつて今江潟に通じてゐ

る。

水産物は今江潟も木場潟も殆と共通で、魚類にはすゞき、しまいさき、かじか、はぜ、ごり、ぼら、いなだ、いとうを、とみうを、こひ、ふな、なまづ、めだか、あまざぎ、しらうを、うなぎ。貝類にはまるどぶがひ、どぶがひ、からすがひ、ましじみ、やまとしじみ、まつかさがひ、まるにし等を産する。

篠原古戦場

片山津温泉街から七〇〇米

古戦場は老松の多い丘陵の一帶である。壽永二年木曾義仲の大軍は倶利伽羅峠の戰に敗れた維盛の軍を追擊した。平軍は敗殘の兵を纒めて安宅城の堅壘を保守した。安宅は梯川の下流が今江、木場、柴山三湖の水を合せて海に注ぐところで、攻擊側に在つては一大障害であつたが、義仲は加賀の住人林六郎光明をして河水を測らせた。光明は直ちに鞍馬十頭を逐ひ放ち流を渉らせたので、義仲は徒渉のできることを知り、直ちに諸軍に進擊を命じた。平軍は遂に支へることができず安宅城を棄てゝ悉く潰走し、源軍は逃げる敵を並松、成合等に驅逐した。平軍の勇士の中には馬首を廻して逆擊した者もあつたが多くは源軍のために討たれた。時に平軍に齋藤實盛といふ老武者があつた。實盛は初め源爲義義朝父子に仕へたが、保元の亂後義朝が敗死してから平宗盛に仕へてゐた實盛は平軍に從つて北陸道に下るとき、宗盛に「實盛近年は武藏に居住してゐるが、もとは越前の住人で、我が祖利仁將軍は三人の男子を擧げ、嫡子は越前に、次子は加賀に、季子は越中に居て子孫何れも榮えてゐる。他日實盛が戰死を聞かば、彼等は直ちにその征裝の美醜如何を知らうとするであらう。願くは石打の征矢を負ひ、錦の直垂を着けて死屍を飾りたい」といつた。宗盛はこれを許し、遂に篠原の戰に手塚太郎光盛のために討たれたことは、武士道の精華を發揮したものとして語り傳へられてゐる。

平家の侍、武藏國の住人齋藤別當實盛は「我七十有餘に年闌けたり、今は後榮期することなし。終に遁るべき身にあらず、何の國にても死なん命は同じ事」と思切つて、赤地の錦の鎧直垂に、黑糸威の甲を著、十八差いたる征矢負ひて、只一人進出でゝ、死生知らずにぞ戰ひける。木曾の手に、信濃の國の住人、手塚の太

郎光盛といふ者あり、實盛に目をかけて歩ませよる。實盛も亦手塚に目を懸けて進んで懸る。手塚近寄りて「誰人ぞ、只一人居留つて軍し給ふは、大將軍か侍か、心にくし名のれ。かく申すは、信濃國諏訪郡の住人、手塚太郎金剛光盛といふ者也。能き敵ぞ、名乘り給へや、組み給へ」と云懸けて、互に駒を早めたり。實盛申しけるは「戲呼、さる者と聞く、思ふ樣あり、名乘るまじ、汝を嫌ふには非ず。只首を取つて源氏の見參に入れよ、能き所領の價なるべし。徒に淵瀨に捨つべからず、木曾殿は見知り給はんずる也。思ひ切りたれば、一人留つて戰ふ也。敵は嫌ふまじ、軍の習は勝負をするこそ面白けれ、寄合へ手塚」と云ふ儘に、弓をば捨て、無下に近く寄合す。手塚が郎等、主に組せじとて、馬手に並べて中に隔てたり。實盛押並べてむづと組み「己は手塚が郎等にや、餘すまじ」と云ふまゝ、鎧の押付の板をつかまへ、左の手にて手綱かいくり、左右の鐙を强く蹈んで引落し、馬の腹に引付けて提げもて行く。是は地より一尺許擧りたり。手塚是を見て郎等を討せじとて、馳並べて、敵の甲の袖に搦付いて、曳聲を出して、鐙を越え我先きにぞ落たりける、實盛、二人の敵にあひしらはんとせし程に、三人組合ふて、馬より下へ落ちたりけり。實盛、手塚が郎等を押へて、刀を拔き頸を掻く。手塚其の間に實盛が弓手の草摺引上げて、柄も透れとさし、嚏て上に乘得て頸を掻き、水もたまらず切りにけり。手塚、敵の首を郎等にもたせて、木曾の前にもちて行き、申しけるは「光盛籌者の頸取つて候。名乘れと申せば、存ずる旨あり名乘るまじ、木曾殿は御覽じ知るべしと許にて、名乘らず。侍かと見れば、錦の直垂を著たり。大將軍かと思へば列く者なし。京家西國の者かとすれば、坂東聲なりき。若きかと思へば、面の皺七十餘に疊めり。老者かとすれば、鬢髮黑うして盛と見ゆ、何者の首ならん」と申す。木曾打案じて「あはれ武藏の齋藤別當にてや有らん。但しそれは一年をさな目に見しかば、白髮の精尾に生ひたりしかば、今は殊の外白髮になりぬらんに、鬢鬚の黑きは何者やらん、面の老い樣はさもやと覺ゆ。實に不審也。樋口は古同僚、見知りたるらん」とて召されたり。髻を取り、引仰けて一目打見て、はら〳〵と泣き「あな無慙や、實盛にて候ひけり」「いかに鬢鬚の黑きは」と問ひ給へば、樋口「されば其事

思ひ出られ侍り。實盛日比申し置き候ひしは、弓矢取る者は、老體にて軍に向はんには、髪に墨を塗らんと思ふ也。其故は、合戰ならぬ時だにも、若き人は、白髪を見てあなづる心あり、況や軍場にして、進まんとすれば古老氣なしと惡み、退く時は、今は分に叶はずと謗らん。實に若き人と先を諍ふも憚あり、敵も甲斐なき者に思へり。悲しき者は老の白髪に侍り。されば俊成卿述懐の歌に、澤に生ふる若菜ならねど徒に年をつむにも袖はぬれけり。と詠み侍るとかや。人は聊の物語の傳にも、後の形見に言をば殘し置くべき事に侍り。云ひしに違はず、墨を塗つて候ひけり」年來内外なく申し、事の哀さに、樋口次郎兼光、水を取寄せて自ら是を洗ひたれば、白髪の尉にぞ成りにける。さてこそ一定實盛とは知れにけれ。

源平盛衰記

手塚山と首洗池

片山津温泉から六、七百米

柴山潟に沿うて北行すると畑の中にある砂山が手塚山で平家の齋藤實盛が戰死した古戰場である。その麓にある小さな池が首洗池であると傳へてゐる。源平盛衰記に齋藤實盛の首を實檢する條で「水を取り寄せて自から是を洗ひたれば白髪の尉にぞ成りにける」と記してあるのを見ると、その洗つた水はどこからか汲んで取り寄せたもので、首を池の畔に持つて行つて洗つたものとは想はれない。

謡曲拾葉抄には時宗縁起略を引いて「加州江沼郡篠原といふ砂原に、實盛が首洗池とて大きなる池有、其上を手塚山といふ」と記してあるから德川中期には既にこの池が名所となつて存在したと見られる。

實盛塚は老武者の亡軀を埋めた所といひ、老松が聳えてゐる。この地點を墓と定めたことは藤澤の清淨光寺の遊行上人太空がこゝで亡靈を濟度したといふのに起つてゐるらしい。附近には鎧掛け松などの名所がある。芭蕉はこの古戰場を訪ねて「むざんやな甲の下のきりぐ〜す」の名吟を遺したことは有名である。

篠原の金明竹

片山津温泉から四粁

河崎氏所有の桐畑約三坪の地に密生してゐる。指定の

天然紀念物で數百本あり、若竹の稈の一部が黄金色の帶狀を現して他の半面は普通の竹のやうに淡綠色をなしてゐる。又葉にも黄金色の斑條のあるものもある。

大聖寺町

大聖寺驛所在地

江沼郡の西にあり、東西は福田村に續き西南は三木村と三谷村に境し、白山の連峰は遠く東方に、西は日本海に面して平坦な地勢と肥沃な平野が展開されてゐる。大日山を源とする大聖寺川は町の北方を貫流し、南から來る熊坂川と合して鹽谷港に注いでゐる。人口約一萬二千。

昔白山五院の一、大聖寺の伽藍があつたところから此の町名が生れたといひ、それ以前は舊熊坂庄の一部であつたといふ。寛永十六年四月には金澤藩主前田利常の三男利治が始めて大聖寺藩主となり七萬石を領した。九代利之のとき十萬石となり、明治維新まで二百三十餘年間城下町であつただけ、町には今に武家屋敷の跡が殘つて居り、もの寂びた落着きのある町である。

大聖寺町は土地低濕で絹織物の製織に適し、加賀絹の産地として知られてゐる。その歴史は古く、和銅年間にこの地方へ多くの秦人が歸化し養蠶機織を業としたのが其の始めであるといふ。明治四十年頃から機械工業に改革されてから品質もよくなり、現在最も多量に産出するのが、小巾羽二重で、町の東南南郷村の日本絹織會社工場は專ら富士絹を製織してゐる。次が絽及び紗、次が繻子縮緬、富士絹等で年産額六十萬疋、千二百五十萬圓に達し、また自轉車用リームも九谷燒と共にこゝの主な産業となつてゐる。

旅館 淺井屋、林屋、加納屋（三、四圓）

大聖寺城阯

大聖寺驛から一粁五

大聖寺町の西にあり、大聖寺川の清流に臨んだ錦城山又は御城山がそれである。城名の初めて見えるのは建武二年名越太郎時兼が加賀、越中、能登の兵を率ゐて上洛しようとした時、大聖寺城に據つたが、土豪のために亡ぼされたことが太平記に載せられてゐる。その後津葉五郎清文といふものが居城した。次で一向宗一揆の據城となり、或は朝倉氏の持城となつたが、慶長二年前田利長が攻略して支城とした。寛永十五年から幕府で一國一城

の制を布くやうになつてから廢城となり、山上の城壘は全く破壞された。

この城地は越前から加賀へ入る舊北陸道の隘路を扼するもので、南方の鐘ヶ丸方面を大手とし、大聖寺川は山の北と西を廻つて搦手の防禦線をなしてゐる。本丸は中央にあつて南東から北西に長い廣場があり、北西隅に約一六米四方の櫓跡がある。その南西に續いて高さ七米、長さ四〇米の壘壁があり、深い塹壕を隔てゝ鐘ヶ丸と相對してゐる。鐘ヶ丸は慶長五年に前田軍が最も猛烈な攻擊を加へた所である。

畑城阯と畑時能

大聖寺町字畑（前極樂寺）地内の八幡山（通稱畑山）にある。八幡山は日本海岸に平行して起伏する丘陵の一部で、南は錦城山や白山山脈地帶と相對し、江沼平野を抱く形勝の地である。

城阯は大聖寺川を隔てゝ對岸にある武家方の津葉城阯と相對し、丘陵中最も嶮峻な地點に築城せられてゐる。城阯は畑山と呼ばれ、五峰三谷から成つてゐる。また山麓から切り出す石材は畑山石といつてゐる。物見櫓跡の臺地は東は東ヶ谷、西はゴシンガ谷を基點とし南方に斗出し、且つ南斜面は急峻で容易に攀づることができない。この物見櫓跡の高地を境として西麓に山岸の聚落があり、東麓に古屋敷といふ地域がある。こゝに飲清水といふ泉が湧出してゐる。もと極樂寺の聚落があつた所といふ。物見櫓の北方に幅約七十間の空濠を隔てゝ本丸跡があり、その北方の低地にある廣場は馬駐場といひ、馬駐場の北隅に馬駐といふ所がある。

この城阯は南朝の忠臣畑時能の據つた所で、彼は新田氏に從ひ近江に越前に加賀に轉戰し遂に新田氏が延元三年七月藤島に殉死後四年の間北陸の官軍を統率し、興國二年十月越前伊地山に陣歿するまで、血戰奮鬪その生涯は戰塵の間に終始し、よく忠節を全うした。

太平記には伊地山の合戰の有樣を

金銅の上に火威の鎧の敷目に拵へたるを草摺長に著下して同じ五枚兜に鍬形打つて緒を締め熊毛打の頰當に大立揚の鶴當を脇楯の下まで引籠めて四尺三寸の太刀に三尺六寸の長刀柄短かに拳り、一引兩に三鄰の笠符、馬の三頭に吹きかけさせ、鹽津黑として五尺三寸ありける馬に鎖の鎧懸けさせて劣らざる兵十六人前後左右に相隨へ「畑將軍此處にあり、尾張守は何處に坐す」と叫ばはりて大勢の中へかけ入り、追ひ廻し懸け亂し一方を拂つて四維に遮りしかば萬卒忽ちに散じて皆馬の足をぞ立てかねたる。

とあり寄手の三千騎を十六騎の小勢でなやましたが、五騎、九騎と次第〳〵に討たれ、時能も歸當のはづれ、小手の先と傷を負はぬ所とてなく、殊に肩先の矢傷が重く立つことができず、遂に興國二年十月二十五日陣歿した。

時能は江沼郡畑村の生れで（或は武藏の人）十六歳の時から武藏國に來り、建武の初め新田義貞に從つて力戰し、後郷里の畑村に築城し、越中越前の武家方に備へたのであつた。時能は戰ふたびに犬獅子と名づけた愛犬を使つてまづ賊情を探らせてから攻擊した。この犬は賊の用心の嚴しい時は吠え、警備の薄いときは尾を振つて合圖をするので、この犬獅子に從つて奇襲を試みると大抵は落城したといふ。太平記に「犬は守禦を以て人に養はるといへり。誠に心なき禽獸も、報恩酬德の心あるにや」とあり、軍用犬使用の嚆矢といはれてゐる。

時能は大正四年正四位を追贈せられた。

長流亭　大聖寺驛から一粁

大聖寺町江沼神社の境内で大聖寺川に臨んだところにある。

寶永六年舊藩祖前田利直が建てたもので、歴代藩主は河端御亭といひ、徒然を慰める席に用ゐたが、維新後藩主が東京に移つてから一時町年寄預けとなつたのを明治二十三年江沼神社に寄附し、昭和九年國寶に指定せられた。

この建築は小堀遠州の設計したもので、間取は簡單で上の間と次の間とも同じ廣さの六疊半、兩室はたゞ床の間の位置がかへられたばかりで、周圍一疊通りの入側があり、北西二方の入側は水に臨んで直ちに釣魚の興をすることもでき、川を隔てゝ遠く南朝の忠臣畑時能の城阯を眺められる。また東方の緣先からは白山一帶の山々を望むことが出來る。

菅生石部神社　大聖寺驛から二粁、自動車がある

國幣小社で俗に敷地天神ともいひ、延喜式内の古社で菅生石部神を祀る。歴朝の崇敬厚く、木曾義仲、富樫昌家、足利義持、豐臣秀吉等の武將を始め、大聖寺藩主前田氏も代々厚く尊崇し、社殿及び調度品の修造を繼續寄進した。

本殿と幣殿は慶長六年九月の改造、拜殿は元和五年九月の改造、その他に神饌所、神門、舞殿などがある。

二月十日の例祭當日は御願神事といふ勇壯な神事がある。皇國は武道を以て始まるといふ理由で、信徒中から數千本の竹を寄附し、祭式の終るを待つて白鉢巻、白襦袢を裝うた岡、敷地の青年等數十名は、鬨を作つて廣前に突進し、齋火で身を潔めた後、氏子から寄進の青竹を六尺ばかりに切つたのを手にして、當るを幸ひ、たゝき合ひ、打ち割る。それに次いで大蛇に擬した大綱を拜殿から曳き出し、境内を曳廻した後大聖寺川に投げ棄てる。前記の打碎かれた竹は惡事災難疾病を免れる靈驗があると信ぜられ、參拜者はその頒賜を受けて歸る。また此の竹を以て箸を作り、御願箸と名づけて希望者に授ける。常にこれを用ゐれば災難除けになるといふのである。

祭事はこの他、四月、十一月の午の日に執行される居入祭、七月二十四日から二日間、敷地祭に續く湯花祭などが行はれる。

社寶には國寶の蒔繪角赤手箱、正親町天皇宸筆御詠草一幅の他、古文書、刀劍類、武器などがあり、秋の蟲干の時一般に拜觀を許してゐる。

瀨越竹の浦　大聖寺驛から六粁

加賀と越前との國境、日本海の沿岸にあり、朝も夕もたゞ波の音と、松籟に暮れ行く穏かな一仙境である。竹の浦は江沼郡の西北端にある瀨越村地方の舊稱で、昔は此の邊一帶の湖沼で、大聖寺川が入江に注ぐあたりの沿岸には竹藪が多かつたので竹の浦と呼んだといはれてゐる。古來文人墨客はこゝが國道筋にあたるので、この地に憩ひ四境の風景に思慕の情を詠んでゐる。西行は能登から竹の浦に遊び

波よする竹の泊りのすゝめかひ

うれしき世にもあひにけるかな

と詠み、明智光俊（光春）は一向宗の一揆を平げ

音にきく竹の浦風ふき立てゝ
眞砂にあそぶ秋のかりがね

と詠んだ。

吉崎御坊と一向一揆　大聖寺驛から六粁、自動車がある

文明年間蓮如上人が近江から逃れて北國に入り、こゝを根據地として北國に布教した遺蹟である。今東西本願寺別院が數百米を隔てゝ建つてゐる。背後の山は昔朝倉茂景が蓮如上人に寄附したものと傳へ、俗に御山といひ、展望美に富んでゐる。

有名な蓮如の肉附面は佛緣深い珍品で、蓮如上人が願慶寺の開山祐念坊に又は西念寺へ後世の戒しめのため與へたものといひ次のやうな傳説がある。

文明年中蓮如上人がこの吉崎に在住の頃、近在の十樂村に與三次といふ者があり、妻はお清といひ子供が一人あつたが、夫與三次と子供は病のため相次いで死別した。お清は思愛悲傷の念去り難く、世の中を儚なみ、先立つた者の菩提を弔ひ、後生を願はうと思ひ、幸ひその頃蓮如上人が吉崎に來合はせたので、自分も教化聽聞のため夫の命日に吉崎へ詣り、熱心な信者となつた。然るにその家の姑は稀に見る慳貪邪險の性質で、嫁の吉崎詣を喜ばず鬼の形となり、嫁を威して吉崎詣りを止めようと巧み、祖先から傳はつた鬼の面をかぶり、身には白の帷子を着け、小谷といふ物凄い谷間で、お清を待伏せ突然現れ出て嚇したがお清は物ともせず「食まば食め、喰はゞ喰へ金剛の他力の信はよもやはむまじ」と口ずさみ、南無阿彌陀佛〳〵と稱へつゝ、靜かに吉崎へ詣つた。老婆は急ぎ我家に歸り面を取らうとしたが、面は額にひつゝき皮を剝ぐやうに痛み、この委を嫁に見られては申譯なしと自害しようとすれば手足がしびれて動くことも出來ない。そのうちに嫁が吉崎から歸つて來て、これはまた何としたことかと驚けば老婆は大音あげて恥しさに泣き沈みながら、平生の心中をそのまゝ今宵のことも隱さず物語つたので、お清も泣く〳〵是非なき御事なれど早く念佛せよと勸められるまゝ老婆は生れて初めて南無阿彌陀佛と一聲稱へたところ、不思議にも面は直ぐさま落ち、

手足も元のやうになつたので、老婆も前非を悔い、お清と共に吉崎へ參詣し、無二の信者となつた。その時この面を蓮如上人へ差上げたところ、宋代の見せしめにせよと願慶寺の開基祐念坊に與へた。面は今に當寺と西念寺とに傳へて一般の觀覽を許してゐる。

北陸巡遊に來て吉崎御坊に留つた蓮如上人は、文明七年朝倉經景のため燒かれて若狹に逃げ、留錫は僅か四年に過ぎなかつたが、その德化は深かつた。上人を迫害した富樫政親は遂に長享二年本願寺信徒の爲めに鞍ケ嶽山上に亡された。これより本願寺信徒はやうやく横暴に、加賀の守護富樫泰高などは問題にせず、石川郡山崎山に本願寺を建てゝ本據とした。信徒はこれを尊崇してお山と稱へた。

このやうにして加能地方は本願寺の名の下に自治を行ひ、この地方の租稅なども守護に渡さないで、一部は自治の費用に充て一部は石山本願寺に送り、一の法王國をなし、佛の名に於て一致團結し、もしこれに反抗するものがあれば佛敵といつて爭ひ、或は朝倉氏を敗り、或は織田信長を手古摺らせた。この時代がいはゆる一向一揆の時代で加能地方はその本據であつた。石山軍記はこの頃の時代相を劇に作つたものである。

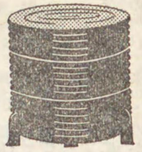
天正三年八月信長は大軍を率ゐて越前から加賀に入り、同八年三月再び柴田勝家、同勝政、佐久間盛政等をしてこれを討たしめた。諸將は海山兩道から進擊し、能登を攻め遂に尾山を圍み、一方は宮腰方面から、一方は犀川を隔てゝ討ち入り、同年八月遂に平定した。信長は地を佐久間盛政に與へ、盛政は本願寺を正式の城地に改築し御山を嫌つて尾山と改め尾山城とした。この高臺は白山々脈の山の尾で、附近一帶を古くから尾山といつたと傳へられてゐる。

鹽谷海水浴場

大聖寺驛から八粁、自動車及び巡航船がある

鹽谷は大聖寺川の河口にある漁村で、海は遠淺で波靜かなところである。附近には蓮如上人の遺蹟として知られた吉崎御坊や、濱坂の天狗岩や、北潟湖などがある。

旅館 田原屋（二圓程度）



山中溫泉

大聖寺驛から八粁九、溫泉電軌山中驛階近

江沼郡の南西山中町の中央僅かの平坦地が拓けた所に賑かな湯街を成してゐる。四面殆んど山に圍まれ、いはゆる「谷にや水音、峰には嵐、あひの山中湯の匂ひ」とあるやうに、西に藥師山、水無山、東に東山の翠巒、大聖寺川の淸流が迫つてゐる。大聖寺川の上流はこの附近では山中川、又は黑谷川とも名づけられ、聚落のある處から約一〇米の低地を流れ、蟋蟀橋と黑谷橋とが上下に架けられてゐる。五層六層の旅館はこの川に臨み、何れも宿泊、娛樂の諸設備が完備し、氣は澄み、岩に碎ける水音また耳に快く、靈泉に浴しつゝ此の雰圍氣に浸る氣持は、北陸の旅に忘れがたいものとなる。

開湯は古く千二百年前僧行基の發見と傳へられるが、文獻に表はれたのは蓮如上人の「文明第五九月下旬第二日至巳之刻二、加州山中湯治之中書」集之二記一とあるのが始めで、その後一時中絶し、文治年間には長谷部信連が鷹狩のとき、白鷺が葦の間の靈泉に傷ついた脚を浸してゐるのを見て、こゝに浴槽を設けたといふ。前田氏が入國してからは慶長七年以降湯錢銀子を收納した請取書が現存し、その湯錢の銀子は代官に湯治客から徵收させたらしく、元和元年には旅籠營業者から運上を上納させて代官を廢したとある。次いで大聖寺藩の領有後は藩自から湯ざやを築造して湯錢人別一文宛を徵する制が起つたと祕要雜集に記されてあるから、山中村が小物成として湯役を上納する以外、別に湯ざや維持費として浴客に課したやうである。廢藩後は鑛泉組合の管理となり菊之湯、葦之湯といふ二大浴場を總湯とし、別に白鷺之湯といふ高等浴場を設けた。ところが各旅館に內湯のないのは不便なので、昭和六年から共同浴場を一箇所とし內湯の設備を完成した。同年五月の大火に街の大半は燒失したが、最新の建築技術の粹を集めてやうやく復興して來た。

旅館に內湯の出來るまでは浴客は皆總湯へ通つたものであつた。總湯へは旅館から浴衣べいべいやの略で下

婢の意）を派出して自家の客の衣類を預り總ての世話をさせた。また總湯へ客を送迎したものであつた。客はのんびりと湯に漬つて手足を伸してゐるのに、それを待つてゐる浴衣べいは恐しく所在のないもので、その退屈さの不滿を訴へたのが有名な山中節の「浴衣肩にかけ戸板にもたれ、足でろの字を書くわいな」である。然しその哀調を帶びた唄には當時の溫泉情景が如實に寫し出されてなつかしさが多分に湧く。

このほか山中には猪といひ脂粉を裝ひ、客の枕席に侍る湯女がゐる。その名は恐らくは花（纒頭）で戲れる意味合から生まれた隱語と思はれるがその事實は今は無い。こゝの湯女は廣く全國に知れ渡り、彼等の存在は、溫泉街の繁榮に何程かの影響があるらしい。山中節には次のやうな唄がある。

加賀の山中恐し所、夜の夜中にしゝが出る
藥師山から湯座屋を見れば、しゝが髮結うて身をやつす

また山中節の文句に「桂清水で手拭拾うた、これも山中湯の流れ」といふのがあるが、桂清水の水脈が溫泉と何の關係があるわけでなく、しゝといはれる山中の湯女が、「送りませうか、送られましよか、せめて二天の橋までも」と湯治客を送つて來た時代に、こゝらあたりでも情緒纒綿とした別れの言葉が交されたことゝ思はれる。「桂地藏さんにわしや恥かしや、別れ涙の顏見せた」といふのがそれで、桂地藏は別に別れの地藏とも呼ばれた。

江戸時代では山代山中の名は知つてゐても、入浴の機會は容易に得られなかつたが、今は交通が發達して東京方面からも一夜の旅である。大聖寺若しくは勤橋から溫泉電軌に乘ればわけなく行かれる。この溫泉電軌は附近の山代、山中、粟津、片山津の諸溫泉を結んでゐるから浴閑にはこれらの溫泉を訪づれるにも便利である。

大聖寺川に沿うては名所舊蹟が多く、山中八景と呼ぶ醫王寺、小富士、蟋蟀橋、味谷、道明淵、高瀨、桂泉、釆石巖などあるが、蟋蟀橋が最も名高い。

泉質は石膏性苦味泉で、溫度四十九度、脚氣、リウマチス、腎臟炎などによい。

溫泉場の行事としては毎年六月四、五日に菖蒲湯が行はれる。

旅館　吉野屋（四圓以上）、聽泉閣、河鹿莊、俵屋、五明館（三圓以上）、山田屋、柿屋、紺屋、丸岡屋、桂

屋（二圓以上）

名物　九谷燒、山中塗、かやのみせんべい、松吹雪

山中塗といふのは山中で產する轆轤細工の挽物で、もともと挽物であるから木材を露出して置くものであるが、それでは汚れがついて使用に堪へなくなるから漆を塗つたに過ぎない。製造品は食器、酒器、茶器、菓子器、佛具、玩具等種類は頗る多い。初めは諸國から集つて來る御客の土產品として賣れ口がよかつたので着手した小さな工業であつたが、時と共に次第に盛況に趣き、現在は益々進歩して立派な工藝品として知られてゐる。

白山神社

山中町の南端にあり、相殿に長谷部信連を祀るため、長谷部神社とも長谷部樣ともいはれる。

山中町の氏神で白山比咩神社の分靈である。祭神は菊理比咩神と長谷部信連で、春秋二季の祭禮には溫泉旅館業者は特に饗宴を設けてこれを長谷部祭といふ。これは建久年間この地に來た信連が白鷺の傷脚を水中に浸すのを見て、靈泉の涌出を發見したといふ傳說に基き、その神恩を報謝するものである。

醫王寺

町の西方水無山の麓にあり、眞言宗高野派に屬してゐる。聖武天皇の頃僧行基が開いたと傳へ、承平中兵火に罹り、溫泉寺と共に荒廢してゐたが、後白河院の文治中長谷部信連がこの地に狩して一體の尊像を安置してから再興され今日に至つてゐるといふ。

寺寶に九谷燒の名人後藤才次郎作の金剛童子像があり國寶に指定されてゐる。

像は左手に利劍をつき右手に纒衣を握り岩座の上に立つ姿で總身に綠紫の釉藥がかゝつてゐる。綠釉は才次郎により創始されたといひ、その色調は古九谷燒と異り、古九谷燒以後の吉田屋窯の作品に似てゐるといふ。この陶像は寺傳によれば才次郎が自ら製作して奉納したとある。

蟋蟀橋

町の南端大聖寺川の溪谷に架けた木橋で、橋桁から水面まで約二十尺、奇岩怪石の間に水が激しく流れてゐる。風景は狹いが優雅奇絶である。橋の名の起りは此のあたりは秋深くなると、千草に啾く虫の音に哀愁堪へないものがあるといふので、虫の名の代表として蟋蟀橋と名づけたといはれてゐる。併し絃歌の聲が河畔の酒樓に響く今日では、哀愁に蟋蟀を聯想するどころではないやうである。

道明ケ淵

大聖寺川の兩岸迫つて、怪石正に相咬むといつた所に一奇橋がある。俚傳に昔こゝに龍が棲み、しば〳〵行人を取つて水中に引入れた。このとき道明といふ者が現れて、大鰻を拔いて岩頭に立ち、龍を罵しつて出でゝ雌雄を決せよといつたが、さしもの龍も其の勢に恐れてその後は姿を見せなくなつた。それ以來龍の害は止み、こゝを道明ケ淵と呼ぶやうになつた。

この淵の右岸に芭蕉翁の句碑がある。

黑谷橋

これも大聖寺川に架る橋で、蟋蟀橋ほどの雅致はないが、自然石の大岩石を橋臺として架けてある。橋の袂に芭蕉堂がある。

俳人芭蕉は元祿二年山中溫泉を訪うたことは奥の細道に記してある。この地の俳人自笑と黑谷に來り「平岩に座して手をうちたゝき、行脚のたのしみ爰にあり」とあるのを見れば、その頃は上流に蟋蟀橋の奇景がなかつたやうにも思はれる。

芭蕉が「北海の磯づたひして、加州山中の湯湯に浴す。里人のいはく、此處は扶桑三つの名湯の其の一なりと。誠に浴することしば〳〵なれば、皮肉うるほひ、筋骨に通りて、神心ゆるく、ひとへに顏色をとゞむる心地す。かの桃源も船をうしなひ、慈童の菊の枝折もしらず」と書き更に「山中や菊は手折らじ湯の匂ひ」と詠んだのを見れば當時いかに野趣横溢の山中であつたかゞ想はれる。

栢野の大杉

蟋蟀橋から南二粁

西谷村栢野にあり、指定の天然記念物である。菅原神社の境内に亘杉四株あり、社殿は北に向ひ、參道を挾んで兩々相對してゐる。その社殿に近い西のを大杉といひ、東にあるのを第一號樹とし、遠いものは西にあるのを第二號樹とし、東にあるのを第三號樹といつてゐる。大杉が最も大きく土際の幹圍、一一米、第二號樹は一〇米九その他も各七米九、四米五ほどあり、樹勢何れも旺盛で今後益々成長せんとする風姿がある。

附近の山中スキー場は刈安山の麓、海拔三〇〇米のところで、一帶が緩傾斜の丘陵で初心者向である。

各溫泉旅館にはスキーの備付があり、スキー場には休憩所も設けられてゐる。雪質は平均一米の軟雪で期間は一月上旬から三月上旬まで。

九谷燒窯元阯

山中町から一四粁

江沼郡西谷村の九谷市谷間にある。後藤才次郎と田村權左衞門等がこの地から陶土を得て製陶に從事した所と傳へ、有名な九谷燒の名稱はこの地名に因むものである。

慶安年中大聖寺藩主前田利治は大日山の麓九谷下村に良質の磁石のあるのをきゝ、藩士後藤才次郎、田村權左衞門の二人に命じて陶窯を築かせた。しかし當時はまだ精良の作品を製出するまでには至らなかつたので、才次郎は肥前國唐津に至り、身を落して陶家の下人となり三年間研究してその祕訣を探り、逃げるやうにして立歸り藩主に復命し、吸坂の路傍に陶土を發見して試みたところ良品ができた。繪は久隅守景が手に成り、これが後人の珍重する古九谷といふものである。のちこの窯が中絶し、文化の初年に吉田屋八右衞門がその廢絶を歎き再び九谷の陶窯を修理し、專ら支那交趾風の陶器を製出した、これを九谷の中興といふ。しかるに九谷の地は大日山の麓にあつて道路が悪く運搬に不便なので文化十一年に陶窯を山代村に移し、吸坂の陶土をとり、盛んに製造した。これが世にいふ吉田屋窯である。その後吉田屋についで宮本屋が起り、飯田屋といふ畫工が出て古雅鮮明の良品を出した。

山代温泉

動橋駅から温泉電軌により
山代 停留場下車

山代町は江沼郡の中央に位し、山代、尾俣、桂谷の三字から成り、東に薬師山の丘陵を負ひ、西に江沼の平野が展開してゐる。人口約四千。

山中温泉とは薬師山を中に挾んで背中合せとなつてゐる。山麓には薬王院温泉寺、式内の服部神社があり、背後一帶は萬松園といひ、浴後の逍遙に適してゐる。こゝからは南東に白山、大日山の諸峯を望み、北西には柴山、今江、木場の三湖が明鏡を並べたやうに光つてゐる。

温泉の發見は山中と同じく僧行基の發見と傳へられ、大聖寺の藩主前田氏により再興されたといふ。堀椿庵の三州奇談に「湯は家々に取て、座敷湯とて、家ごとに二三ケ所宛、上湯下湯の浴場を拵らへ、自由過ぎたる湯元なり。湯は清く、香又山中より薄し。然共堀口何某の家に湯井三つあり。湯浦きかへりてすさまじ。之を懸樋にてとり、又山水を樋にて交へて家口にとり、大樣熊野湯の峯の如し」とあるから、明和、安永の頃は旅館の多くは家に引湯してゐたらしい。

現在の山代の主な十八戸の旅館は何れも内湯があるが、そのほかに宿泊のみを業とする旅籠屋が三十軒もあり、その多くは縣内の農民達を顧客とするもので、各戸に浴槽がないからこれらの客は共同浴場へ行くことになつてゐる。共同浴場は内湯旅館に四方を圍まれた廣場の中央にあり昭和四年の改築である。こゝの旅館の建方には落着いた閑雅な温泉街の氣分が表れ、枯淡な寂びのある一面を持つのがこの湯街の特色であらう、また温泉の煙に明け、三味の音に更け行く情緒豊かな湯街で、昔から名妓、美形が多いので知られ、古い傳統を誇つてゐる。

此の附近の赤粘山の松山の蔭から紫煙の立ち昇るのを見るが、これは九谷燒の窯で山代の青華磁は殊に優れてゐる。この地は慶應三年大聖寺藩が二箇の製陶所を起し、古九谷の最盛期を現出しようとした所である。名工後藤才次郎はこゝの出身で、初め大聖寺前田氏の臣であつたが、藩主の命により肥前有田で陶窯の祕法を習得し

て九谷燒を製出したことは既に山中の項で述べた通りである。

町の背後の萬松園は松茸狩によい。昔は領主前田氏の用に供せられたので、藩から小吏が出張して取締をしてゐた。今は浴客の需に應じて採らせるやうになつてゐる。

その他の名所に薬王院、服部神社、神明宮、春日山などがある。

スキー場は温泉場の東方にある薬師山の一部を開いたもので、其の後スキー場の擴張その他の設備も考慮し温泉のスキー場として浴客にのみ利用されてゐるやうだが、一般向のゲレンデとしても好い。各旅館にはスキーを備付て宿泊者に無料で貸してゐる。

期間は一月上旬から三月上旬まで、軟雪で平均七〇糎である。

泉質芒硝性苦味泉で温度六十六度、リウマチス、中風脊髓痨、腺病によい。

旅館 田中屋、くらや、大野屋、吉田屋、花屋、白銀屋、あらや（三、四圓程度）

名物 九谷燒、漆器、湯の花、湯染布

法皇山横穴群

温泉電軌勅使停留所から半粁

勅使村勅使にある丸山を法皇山といひ、花山法皇の陵又は法皇の御寶物を埋めた所といひ傳へてゐる。鳳凰山或は寶江山とも書き、土地では訛つてホンゴ山と呼んでゐる。山上には老松が數株生ひ茂つて遠方からも見える。山は凝灰岩の岩山で四十餘箇の横穴が完全に遺つてゐる。それが明治の中頃まで誰にも氣付かれなかつたが、今は四十餘も發掘されて昭和四年には史蹟として指定された。

穴の多くは規模大きく複雜な構造で、羨道には更に一箇若しくは二箇の小室を縱に連ねてゐる。玄室のうちには二室から成るものあり、平面は多くは長方形で天井は穹窿狀又は屋根形をなしてゐる。これらの横穴からの遺物は齋瓮土器が最も多く、横瓮、高坏、横口坩、坏、壺長頸臺付坩など、また直刀、鐵製帶鈎、槍身などがある。これらの多くは羨道部の小室から發見されたといひ、今同所の願成寺内に保存されてゐる。

北陸本線に沿うて（金澤から津幡へ）

深谷鑛泉

森本驛から約二粁、金澤驛からは八粁
倉舊自動車がある

三方山に圍まれた閑雅な境で、元湯、中の湯、口の湯の三つに分れ、浴舍は何れも溪流に沿うて營まれてゐる。金澤市から約八粁なので、日曜や祭日に一泊がけの浴客が多い。特に痔疾に特效があるといひその湯治者が多い。附近には風光の目を樂しませるものもないが、野趣豐かで讀書思索などには、却つて適する靜かな山溪である。

この湯は古記に寛政中前田氏が遊獵中鳥の浴みするのを見て發見し、典醫小澤某に命じて調べさせたところ良泉であつたとある。奥の湯が最も古く、弘化年間に著した鶴の尾の記に「深谷に近年より金湯を掘り出し、湯屋を建て發行す、但し其湯至つて微溫なりとて、是を涌かして浴す、疝氣に能く應ずといふ」とあるから大體その頃からの開場と思はれる。

泉質弱食鹽泉で痔疾、消化器病、貧血、婦人病、皮膚病、脚氣などによい。

旅館（奥の湯）石屋、（口の湯）白銀屋、清水（二圓程度）

名物 四王寺村の秋胡瓜、自然生芋、柿

津幡町

木津幡驛下車

加賀と能登と越中とを結合する三叉路に當り、街形全く丁字狀をなしてゐる。藩政時代は極めて重要の宿驛で眼を驚かす程の殷賑さであつた。津幡節にある手綱をゆるめた馬子姿や、掛茶屋にあふれた宿場氣分も今では昔の思ひ出と傳はるばかりである。明治時代も人馬絡繹たるもので、維新直後は人力車が三百臺以上もあつたといふ。七尾線が開通してから昔の津幡は本津幡と改まり、昔のやうな全然交通の要衝からは外れてしまつた觀があるが、それでも人口約三千五百を擁してゐる。

昔は津波多又は津旗などゝ書き河北潟の畔に在つた寂しい漁村に過ぎなかつたが、戰國時代から兵火が絶え間なく、現在町役場のある大西山は文治年間都幡小三郎隆家の居城地であつた。また富樫氏春が桃井直常の上洛を

こゝで喰止めたといひ、壽永二年には都幡富樫石黒の一族が共に木曾義仲の味方となり倶利伽羅峠の合戰に參加したのもこのあたりで、天正年間上杉謙信が加賀に攻め入つた時もこゝに陣地を布いたといはれてゐる。

こゝの產業に絹織物、米穀、甘藷、野菜等がある。

名所には清水八幡神社の傍に冷泉爲廣塚といふのがある。俗に廣塚ともいつてゐる。爲廣は定家流の書家で、能登の畠山氏に寄つてゐたが大永六年七月七尾で歿した。併し故あつてこの地に葬り、墓側に石塔があつたので塔屋敷と呼ばれてゐた。明治八年後人冷泉爲紀碑を建てたが今は甚しく荒れはてゝゐる。

ほかに大西山の津幡城趾、縣社白鳥神社などがある。

清水八幡神社の例祭は四月十五日と九月十五日とに行はれ、秋祭には獅子舞の神事がある。毎年九月一日にこの境内で行ふ八朔の相撲は加越能三州の寄合相撲で名高く人出が多い。

正月〳〵どこまでどざつた、倶利伽羅の茶屋までどざつた。土產は何ぢや、榧や勝栗、蜜柑や昆布、あまのはらの串柿、納屋の隈の黑豆、ゆづり葉にのつて、ゆづり〳〵どざつた。

河北地方子守唄

倶利伽羅古戰場

倶利伽羅驛附近

倶利伽羅峠は加賀國河北郡と越中國西礪波郡の界にある礪波山の中にあり、もと倶利伽羅不動明王を祀つた祠があつたのでこの名があり、源平の古戰場として知られてゐる。

源平盛衰記に「谷深くして山高く、嶮難にして道細し、馬も人も通ふ事輙からず」とあり、古來北陸間道の要所である。峠の道は新舊二つあつたが、今は鐵道線路が山腹を貫いてゐる。以前は幅の狹い急峻な路でやうやく一列行進の出來る難所であつたらしく、竹橋、倶利伽羅、矢田、蓮沼の順で、これを矢田越の古道といふ。矢田から石坂、埴生に通ずる路は天正十三年秀吉が越中に攻め入るときに拓き、その後元和元年に前田利常が參覲交代のとき改修した路であるといふ。また北陸街道九折越は

竹橋、越中坂、九折、安樂寺、上野の順路で今の越中坂は當時の遺跡と傳へてゐる。

古戰場は東は富山縣西礪波郡埴生村から礪波山を越えて西、石川縣河北郡倶利伽羅村竹橋に至る約一二粁の舊北陸道を中心とし、南北約四粁の山岳地帶で、高さ百米乃至二百五十米の山々が連亙してゐる。古戰場の視察には北陸本線の石動驛から下りて歸路は倶利伽羅驛で乘車するやうにすれば源軍が攻めたやうすがよく分るが路は上りとなり徒歩約三時間かゝる。これを逆に倶利伽羅驛で降りて石動驛で乘車すれば路は下りで徒歩約二時間半である。何れにしても趣味深い徒歩旅行である。

治承四年源義仲は以仁王の令旨を奉じて、平氏を討つべく義兵を信濃に起し、終に一國を從へ、翌年越後を攻め、進んで平通盛を越前に破り、兵勢日に盛んとなり、北陸道の諸豪も多くはこれに來屬した。

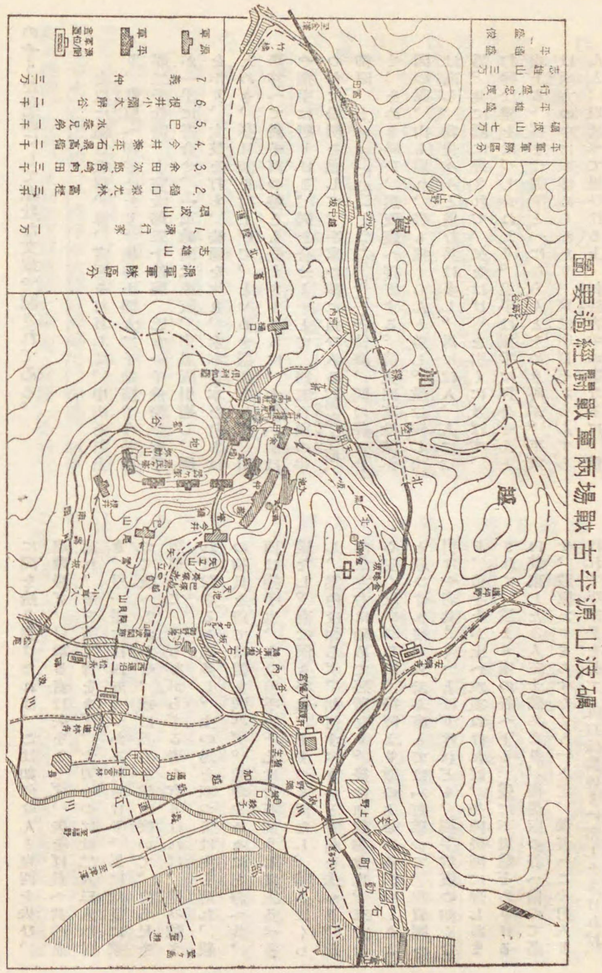
一方平氏は源頼朝が兵を伊豆に、木曾義仲が信濃に兵を擧げるときゝ、諸將を派遣してこれを討たせた。北陸道には平清盛の孫維盛が十萬の將として壽永二年五月東下全軍を二隊に別け、搦手の大將は通盛で、知盛、越中前司盛俊、忠清、景家以下三萬騎を率ゐ、宮腰（金石）、大野、青崎、（粟ヶ崎）、日角見（日角）を經て能登に入り、志雄山に陣した。追手の大將は維盛で、行盛、忠度、忠經、季國、長綱、範高等七萬餘騎これに屬し、森本（森下）、崎田（才田）、大庭（大場）、竹橋、閑野（七志）、津播多（津幡）井上を經て倶利伽羅に向つた。

義仲はこの情報を聞いて五月十一日部署を定め、源行家等に一萬騎を分けて志雄山の敵を牽制せしめ、その他は盡く倶利伽羅に向つた。この方面では今井兼平が松永の日宮林に陣して先鋒の司令官となり、義仲は埴生庄にゐてその總司令官となり、樋口兼光、根井小彌太等の諸將は各々兵を分けて迂回軍となつた。

同じく十一日平軍は倶利伽羅峠を越え、將に坂路を下らうとすると、白旗が日宮林に翩翻としてゐるのを見て維盛は、此の山は四方岩石が嶮しく天然の要塞であるから、急に攻めることはあるまい、それに能登路は塞いであるから前面の警戒を嚴しくして置けば恐るゝことはないと、倶利伽羅堂、國見、猿ヶ馬場に陣し、遠征の兵士は皆甲を脱き刀を解いて仲夏の涼風に露營の夢を貪らうとしたとき、圖らずも木曾冠者義仲の奇襲に遇つて千載の恨を遺してしまつた。その戰況は源平盛衰記に繪卷物

のやうな華麗にして悲壯な文章で記されてゐる。

去程に樋口次郎、林、富樫を打具して、中山を打上り、葎原へ押寄せたり。根井小彌太二千餘騎、今井四郎二千餘騎、小室太郎三千餘騎、巴女一千餘騎。五手が一手に寄合せ、一萬餘騎北黒阪、南黒阪引廻し、鬨を作り、太鼓を打ち、法螺を吹き、木本萱本を打ちはためき、蟇目鏑を射上げて、とゞめき懸りたれば、山彦答へて幾千萬の勢とも覺えざりけるに、木曾「すはや搦手は廻りける、鬨を合せよ」とて、四五百頭の牛の角に松明を燃して、平家の陣に追ひ入る、胡頽木原、柳原、上野邊に控へたる軍兵三萬餘騎、鬨の聲を合せ、をめき叫び、黒阪表へ押寄する。前後四萬餘騎が鬨の聲、山も崩れ、岩も摧くらんと驚し。道は狹し山は高し、我先々々と進む兵は多し。馬には人、人には馬。共に壓に押されて、矢をはげ弓を引くに及ばず、打物は鞘をはづしかねたり。追手は搦手に押合せんと攻上る。搦手は追手と一にならんとをめき叫ぶ。平家は兩方の中に取籠められたり。軍は明日ぞあらんずらんと、取延べて思ひける上、如法夜半の事なるに、俄に鬨を造り懸けたれば、こは如何せんと東西を失ひ、周章騷ぎ、弓取る者は矢をとらず、矢をば負へ共弓を忘れ、甲を著て冑をきず、太刀一つには二人三人取付き、弓一張には四五人こかみ付きけり。馬には逆に乘つて後へあがかせ、或は長刀を逆に突いて、自ら足を突切つて、立ちあがらざる者も有りければ、踏み殺され蹴殺さるゝ類多し。主の馬を取つては主を忘れ、親の物具を着ては親を顧みず。唯我先々々にと諍へ共、西は搦手也、東は追手也。北は岩石高うして上るべき樣なし。南は深き谷也、下すべき便なし。暗さはくらし、案内は知らず、如何すべきかと方角を失へり。此山は左右は極めて惡所なり。後は加賀御方也。三方は心安く思ひつるに、後陣より敵のよせけるあやしさよと思ひければ、只云ふ事とては「打破つて、加賀國へ引けや者共〳〵」と呼りけれども、搦手雲霞の如くなり、追手上が上へ攻重ねければ、先陣後陣に押しあまされて、道より南の谷へ下る。爰に不思議ぞありける白裝束したる人三十騎あまり「南黒阪の谷へ向つて落せ、殿原あやまちすな〳〵」とて、深谷へこそ打入りけれ。平家是を見て、五百餘騎連りに落したりければ、



後陣の大勢是を見て、落足がよければこそ、先陣も引返さざらめとて、劣らじ〳〵と、父落せば子も落す、主落せば郎等も落す。馬には人、人には馬、上が上に馳重つて、平家一萬八千餘騎、十餘丈の倶利伽羅が谷にぞ馳埋みける。適谷を遁るゝ者は、兵仗は免れず。兵仗を免るゝ者は、皆深谷へこそ落入りけれ。前に落す者は、今落す者に踏殺され、今落す者は、後に落す者に押殺さる。かやうにして死にけれ共、大勢の傾き立ちぬる習にて、敵と組んで死なんと云ふ者は一人もなし。

このやうに平軍は兵を交へずして全軍擾亂して敗走し加賀の海岸宮腰、佐良岳に退いて旗を擧げ、能登の志雄山へ廻つた盛俊等も集つて來た。源軍はこれを急追せず金澤の西郊平野岳の木立林に陣を布いた。五月二十五日維盛等は宮腰の陣を撤して安宅へ移つた。六月一日から源軍は追擊戰を始めた。開戰後十餘日を經てゐるのは甚だ緩慢のやうであるが當時の戰法では已むを得なかつたらしい。

平軍は安宅城も遂に支へきれず、篠原では實盛等が戰死し、敗殘の軍は極樂林、小野寺林、須河林、福田、熊坂など江沼郡の各地を經て京都へ歸つた。初め十萬といつた兵も僅か二三萬を殘したに過ぎないといふ。こゝに於て北陸道は悉く義仲の手に歸した。

倶利伽羅谷は今でも地獄谷とか馳込谷とか呼び、この谷から流れ出る谷川を、死骸の膿汁が流れでたので膿川といひ、哀れな平軍の最後を傳へて五月雨の頃には谷から咽ぶやうな恨みのうめき聲が聞かれるといひ傳へ、そこには手向神社の小祠が祀られてある。

山頂の猿ヶ馬場は平維盛が本陣を置いた處で、猿堂の前には芭蕉の「義仲の寢覺の山や月かなし」の句碑が建てゝある。

碪波山

火牛餘焰獄楓丹　積骨舊溪使膽寒
一宇宙問問神策　古今唯是兩田單

富田景周

七尾線に沿うて

加茂神社　横山驛から一粁

高松村字横山にある。初めは河北郡加茂村にあつたが次いで鉢伏村に、後更に今の地に轉じた。別雷命を祀り大同二年の創建で延喜式内の古社である。

境内の桂の水は火傷、眼疾、腫物などに靈驗があると傳へられてゐる。

木津の桃園　横山驛の西北一帶の丘陵

横山から高松に到る一帶の地は、文政年間から有名な桃園で加賀藩主は毎年こゝで觀桃の宴を催したと傳へてゐる。

明治維新後この地の室屋某が京阪、武州、野州等から良種を取寄せて品種の改良に努力した結果、近年では上品な風味を持つ水蜜桃ができるやうになり、各方面から好評を博してゐる。

高松町　高松驛から二粁自動車がある

高松町は河北郡の最北部、加賀能登の日本海岸に亘る大砂丘中にある。今は人口約八千ほどあるが、もとは寂しい一寒村で囮國雜記に「住人のたのむ木影やそれならんけぶりにくるゝ高松の里」と記されてゐる。

明治四年七月の廢藩置縣では金澤縣に屬し、後、石川縣となり、明治四十年高松村と金津谷村を合して現在に至つてゐる。

「春は高松口錢場の茶屋で、泣いて別れた客を見た」の俚謠が遺つてゐるが、これは昔高松の南方木津に通ずる驛路に通行人から通行税のやうなものを取つて驛の經費に充てたもので、大野、宮腰あたりへ雇はれて行く能登方面の船乘りが、その邊の掛茶屋で涙の別れをしたことを唄つたものらしい。また「好きな酒ではあつたと思ふが、今日は何んぢやら辛うござる」なども故郷忘じ難いその場の心持が哀れに表現されてゐる。

この町の外觀は南、中、北、古宮、古宮小路、元小路御寺小路、流川、六軒、櫻井等に分れてゐるが、大通り

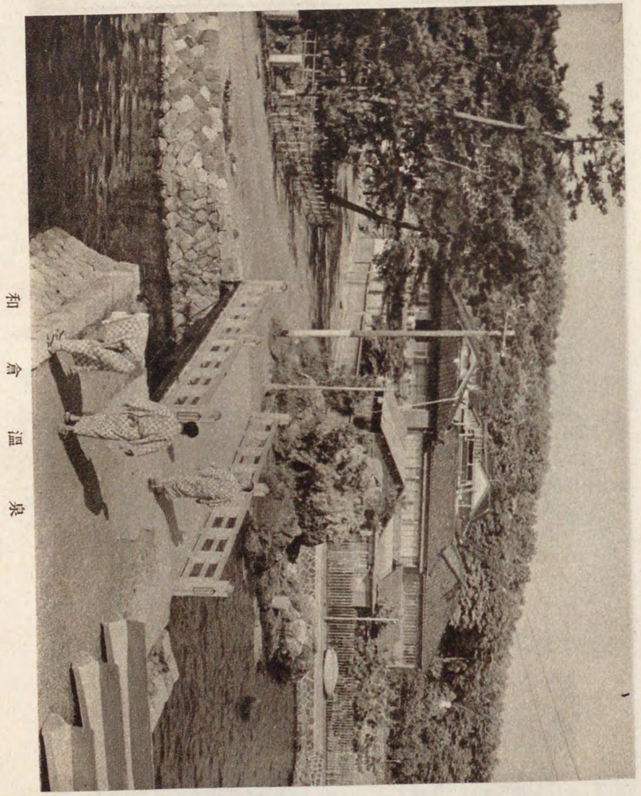
子湖の藤

國幣大社氣多神社（能登）

國寶妙成寺三光堂（能登）

國寶妙成寺本堂（能登）

能登金剛（能登）



和倉温泉

能登金剛

和倉温泉

七尾湾めぐり

七　尾　灣

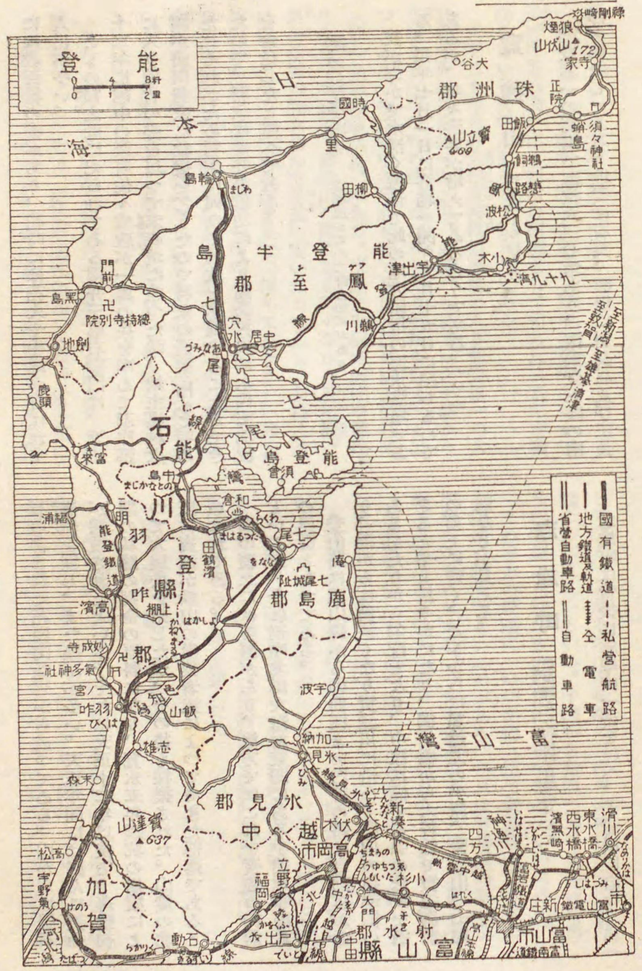
寺　島（七尾灣）

輪島の朝市

勝尾岬（七尾灣）

輪　島　塗

舳倉島へ出稼した後の海士町の漁家


能登
日本海
能登半島
七尾湾
石川郡
羽咋郡
鹿島郡
鳳至郡
珠洲郡
氷見郡
中越市
高岡市
富山市
射水郡
富山湾
加賀
國有鐵道
私營航路
地方鐵道
全電車
省營自動車路
自動車路

夏の高岡

には數百株の櫻があり、花時には花火や手踊が行はれて人出が多い。

こゝの額之社に祀られてゐる櫻井三郎右衞門は、天正十二年に越中の豪將佐々成政が一萬の兵を率ゐて羽咋郡に入り破竹の勢を以つて末森城に迫つた時、城主奥村永福が前田利家に救援を乞うたので利家の道案内を勤めた。それがため利家は何なく成政を擊滅することができたので、利家は櫻井の勳功により高松村民に永代宅地税を全免したと傳へてゐる。

高松海水浴場　高松驛から約二粁自動車がある

波が穩かで水清く遠淺で此の地方屈指の海水浴場である。毎年七月一日に浴場を開き九月十五日に閉ぢるのであるが、年々浴客が增えてゐるさうである。

寶達山　寶達驛から約六粁

能登第一の高峯で海拔六三七米あり、南能登丘陵の南部を代表してゐる。地質は石英、雲母に斜長石及び正長石の含まれた花崗閃綠岩から成つてゐる。山からは螢石滿俺を產し、また藥草が多い。天正年間には盛んに黃金が採掘されたといふ。それは天正十二年以後で、藩政初期の私鑄の判金の原料になり、寬永五年鑛坑の崩壞によつて大蹉跌を來したが、その後も採掘された。山麓の北莊村寶達が鑛山の從業者達によつてできた部落であるといはれてゐる。

山の頂上には神祠があり、地方ではこれを寶達の御前といふが、今は羽咋北郡大海村東間にある手速比咩神社の奥社となつてゐる。

登山路は横山驛から御前橋まで四粁の路は自動車があり、橋からは稍狹くなり寶達川に沿ひ、案内の指導標のあるあたりから勾配となり、中腹に達する頃の急坂を過ぎるとやゝ緩やかになり、御前橋から六粁餘で寶達御前の頂上に着く、こゝからは加越能の平原、醫王山、七尾灣などが見える。

志雄町　敷浪驛から約四粁自動車がある

志雄町は背後に志雄山一帶を控へ、子浦川に沿ひ、北

西は廣々とした平野に面してゐる。

古來加賀から越中へ通る要路で、就中志雄町の中心字子浦は奥能登へ出る屈指の宿驛として知られ、また古戰場や古い名勝地があるので知られてゐる。

天平二十年の春大伴家持は能登路に入り能登第一の大社氣多神社に參拜せんとし、志雄の海邊で「之手路から直越え來れば羽咋の海、朝なぎしたり船楫もかも」と歌つてゐる。彼は越中の國府を出で德川時代の御上使往來（昔の北陸街道永見、木久目、床鍋）を經て志雄町地内に入り、石動山、寶達山の間にある臼ヶ峯から邑知潟、氣多神社の森を望んで子浦に着いたのである、家持は前に廣々と展けた朝凪の海を見て、極めて歩きにくい砂丘の内側に沿うて粟ノ保村、羽咋町を迂回して、そのうへ羽咋川の河口を横斷するなどの困難を思ひ之手路から直こえ來れば」の歌意のやうに氣多神社まで一直線に舟によつて横斷することが出來なかつたことを憾んだものと思はれる。

また子浦の郊外にある城郭のやうな一小丘は家持が假館を造つてゐた所で、絹公中養が住んでゐた。古今集に「しほの山さし出の磯にすむ千鳥、君が御代をば八千代とぞ鳴く」とあるのは甲斐國のしほの山ではなく、能登國の方が正しいといふ。子浦から敷浪へ通ずる縣道に沿うた南側の丘陵が古への指出の磯であるといつてゐる。

この地方の民謠に「いつか宿へ出て敷浪越せば子浦の中橋歌で越す」といふのがある。これは昔加賀路から能登路へ入るには高松、今濱の沙濱に苦しみ更に川尻川を渡るときは往々沙洲に陷つて死んだものさへある。併しこの難所を越して子浦へ出れば道路は坦々として廣いから歌をうたひながら通つてしまふとの意味である。

古戰場として最も知られてゐるのは壽永二年夏平維盛が大將となり、木曾義仲を攻めたとき、兵を七隊に分けその一隊源行家等を首とし一萬餘は志雄山に陣した。のち義仲の奇計に平軍終に俱利伽羅に敗れたので志雄山の軍は戈を交へずして退却した。

羽咋町　羽咋驛下車

羽咋郡羽咋川の河口にあり、その北部の邑知潟は昔は大きな入江であつたが、能登半島の隆起と子浦川による沖積層とは次第に灣口を埋め、その砂丘上に羽咋の聚落

が生じたのである。もとは子浦川と羽咋川の河口に於ける港であつたが、砂丘の發達に伴つて漸次海岸を遠ざかつて現在のやうになつたものと見られてゐる。

交通は七尾線のほかに能登鐵道の分岐點をなしてゐる。羽咋から發する道路は南方加賀に向ふものと、北東に七尾西街道と七尾東街道とがあり、北方に富來に達する縣道があり、口能登の文化の中心をなし、聚落の發達は古く國造の時代にあるといふ。聚落の中樞に於ける區劃の不規則で道路の曲折してゐることが特色で、上代の街形を見るやうである。

町は人口約四千、商業を主とし、加工品には羽二重がある。また廣濶な羽咋平野にあるので農作物が豐富、また漁獲物の集散もある。

こゝの行事に子供獅子といふ特種の獅子舞がある。羽咋神社の祭禮に行はれるもので、服裝舞踊の形式は甚だ古雅で、烏帽子には輪鉾の紋を附けてゐる。

獅子頭は幅一七糎、高さ二一糎、前後に一二糎、その胴體となる布は長さ四米五、幅一米といふから餘り大きくはない。頭を動かすに一人、胴を動かすに四人で、その五人が一緒に猛烈に跳ね廻る。囃子方は竪笛二人、鉦一人、太鼓一人、他に天狗と稱する一人があつて舞ふ。

羽咋神社と唐戸山の相撲　羽咋縣から半粁

式内の古社で垂仁天皇の御代當地方平定のため下向し給へる皇子磐衝別命を祭神とする。命は北陸の鎭となられ要害の地に城柵を築き、壯丁を集め、武事を奬め、諸寇を平げて久しく此の地に留り、桑麻を撫育し、在治九十三年、百五十八歳で薨去せられた。人々其の德を慕ひ羽咋神と稱へ、御陵を築いて尊骸を奉葬せられた。これが御陵山である。のち王子石道別王と王孫石凝別王とは其の旨を承けてこの國を治め四世の孫磐城別王は羽咋國造となり、弟大兄彦王は加賀國造となり、その後裔世々國造となられた。土民その恩澤に感じて磐衝別命及びその子孫を祭祀する所以で、歷代國司の崇敬が厚い、社殿は昔は山上に造營されてゐた。明治十四年縣社に列せられた。

例祭は九月二十五日で、この日唐戸山に相撲會が開かれる。

唐戸山は羽咋神社から六〇〇米の所にあり、名は山と

いふが、砂丘に圍まれた大摺鉢の形をした盆地である。この最低部を土俵場とし周圍の斜面を桟敷に利用するのである。力士は上山方（加賀、越中のもの）と下山方（能登、佐渡のもの）とによつて勝負が決せられる。この日登場者四、五百人に上ることがある。行司が一たび團扇を引くと斷じて猶豫を許されないので「羽咋の相撲で待つたなし」といはれてゐる。最後に二番連勝したものが大關となり、翌日未明に羽咋神社に參拜して賞狀と御幣を受けるのである。

この前後三日間に亘り、本念寺に於て羽咋神社の祭神磐衝別命のために報恩の法會を執行する。

附近には多くの古墳が散在してゐる。最も大きいのが羽咋神社の境内にある大塚で一名御陵山ともいふ。これは前方後圓墳で南西し、東西六三米、南北一〇〇米、高さ一〇米、大塚の東、本念寺の境内であつた所に大谷塚一名王兒塚があり、その東長者川と子浦川との間に姫塚があり三俵苅の社ともいつた。その他痛子塚、寶塚、八幡森、藥師塚などがあり、これらを羽咋七塚といつてゐたが、今は多くは破壞され、磐衝別命、磐城別王の御墓といはれる大塚と大谷塚とが遺つてゐる。

豐財院般若堂　羽咋縣から五粁

堂内に聖觀音、十一面觀音及び馬頭觀音の三軀が安置されてゐる。何れも素地の一木造でその手のみが寄木造であるが併しその手は何れも後世の補作である。三軀とも立像で作風に共通な所があり、恐らくは同じ人の手に成つたものといはれてゐる。圓く締つた面貌と重厚な體格は一木彫に通有で、その樣式は平安初期の特色を具へてゐる。殊に馬頭觀音のこのやうな古像は極めて稀とされ、今三軀とも國寶になつてゐる。

氣多神社　羽咋縣乘換能登鐵道能登一ノ宮縣から約半粁

能登國一ノ宮で延喜式には名神大社に列せられ、今は國幣大社である。北陸著名の大社で、崇神天皇の御代始めて社殿を造營せられたと傳へる。中世以降は衰へたが畠山氏が守護職になつてから稍復興し、前田氏も入國後厚く尊崇し、社殿を造營した。祭神大國主命が天下を經營し給ふため、諸國を巡幸せられた時、高志の北島から海

に出で鵜浦に着き給ひ、後今の社地に行宮を造り、國内の諸神を率ゐて邪神を討ち、また邑知潟に棲む毒蛇を退治して、數年の間この國を治められた。この間に次第に國が開け、人口が殖えて來たので一國鎭護の爲に神靈を止めて國を去られた。これが能登一宮の起る所以で、今も鵜祭、平國祭、追燈祭などの特殊の祭式が此の社に行はれるのも此の爲めであるといふ。

本殿、拜殿、樓門、廻廊、攝社、末社があり、攝社若宮神社の本殿（國寶）は永祿十二年の建築で、一間社流造屋根檜皮葺の小社殿であるが、木割、枡組など雄大で、且つ蟇股の形狀や彫刻も優美である。

社寶としては後奈良院宸翰一軸（國寶）、永樂年間社殿改造の綸旨二通及び守護畠山氏、藩主前田氏の書狀數通があるに過ぎぬ。舊社の割に寶物の少ないのは一に戰亂の爲めに失はれたものといはれてゐる。

例祭は四月三日でその日は祭神が邑知潟の毒蛇を射留められた狀況に眞似て、蛇目の的形を射る式がある。それは門前の庭に靑竹二本を挿立てゝ新しい席を竪に張り蛇目を書いた的をつけて置き、祭式が終つてから二度ほどこれを射るのである。

平國祭は三月十九日から二十三日までで、御出祭ともいふ。これは祭神が國土を經營し給ひし時、邪神妖賊が庶民を惱ましたので、これを平げて國土を平定し給うた狀に擬したものだと傳へてゐる。三月十九日から途中二泊して道程四三粁を隔てた鹿島郡矢田鄕村所口の縣社生國玉比古神社に赴きそこから還御するのである。行列は錦旗、長柄鎌、生太刀、生弓矢、平國の廣矛などを列ね、神馬を牽き、供奉の神職は騎馬で神輿の前後を警固する。その能登生國玉比古神社に着かうとする時には鳥居内外の群集が喊聲を擧げて馬を驚かす、神職はこれに逐巡せず左右を薙き拂つて突進する。この時神職が若し落馬することがあれば米價下落の徵であると判斷され、また先頭に鹿毛の馬があれば年中快晴が多く、黑色なれば降雨が多いといはれる。

鵜祭は十二月十六日に行はれる著名の神事で、祭神がこの國を巡幸し給うたとき、御門主比古神が鵜を捕へて奉つたことに起るといひ、また御門主比古神と謀つた櫛八玉神が鵜に化して魚を捕へ奉つたことから初まる古式であるとも傳へてゐる。前田氏も入國後この儀を尊重し、鵜浦に鵜捕部を置き、鵜田二段をその料に當てた。

當日は鵜捕部三人が潔齋して鵜を捕へて籠に入れ、道程四〇粁の間背負つて氣多神社に至り神前に捧げる。のち本殿の階下で鵜捕部と執事と問答あり、それが終つて鵜捕部は鵜を階下に放てば鵜は自ら内陣に進む。若し進まないときは清祓又は清めの神樂を奏する。この式が終つて鵜を海濱に放てば必ず越後國能生神社の磯邊に漂着するといふ。

この他一月十一日の鳥居詣、四月三日の追燈祭、五月一日及び九月十五日の御饗祭などがある。

社域の後にある鬱蒼とした森林は丘陵の上にあり、東は田地及び畑地に接し、西は柴垣往來を隔てゝ田地に、北は同神社所有の赤松林に連り、總面積二四八アールに達してゐる。この社叢の現林相はつばきが最も多く、全林木の八割を占め、大きいのは周圍一米五を超えるものもある。しひ、たぶのきがこれに次ぎ、周圍三米乃至六米のもの各數十株を數へる。むべ、いたびかづら、ふぢ、ていかかづら、まめづた、つるぐみなど雜多の攀絲植物が大蛇のうねるやうに樹幹にからみついて一種の奇觀を呈してゐる。そのむべ、いたびかづらの太いものは周圍二一糎のものがある。

以上社叢の多くは常綠濶葉樹林で、嚴密な意味での原始林ではないが、その發生狀態と神社の來歷とで併せ考へると、少くとも原始林に近い天然の林相を備へてゐる。

この社叢の中に奥宮があり攝社となつてゐる。能登名跡志に「本社は大己貴命、奥社は素盞嗚尊、稻田姫の命也。則御夫婦の御神此所にて神がくれ給ふといへり」とある所で、同書に「毎年三月四日より石動山衆徒六人來りて、中門殿に於て七日の間別齋あり。神前に斧まさかり抔を持、舞曲を成し、護摩を焚いて奥の社へかける也。是を柴燈の護摩といふ。是を俗に男祓といふ」とあるもこゝの事である。これによつて氣多神社が、社僧の屬する石動山から著しい干渉を受けてゐたことがわかる。

石動山天平寺は戰國時代以前三百餘坊といはれ、武家の勢力に對抗して大いに威を張つたところである。

社叢内には三箇の古墳がある。積石式の塚で、巨石を以て蔽はれてゐるが、隙間から石室の内部を窺ふことができる。

更け過ぐる夜神樂の、月も傾く空なれや、丑三つも時至れば、神前に供ふる生贄の眞鳥もこゝに顯はれたり、空飛ぶ鳥も地に落ちて、神慮に從ふその有樣、ま

のあたりなる奇特かな。

謠曲　鵜祭

妙成寺

羽咋驛乘換能登鐵道柴垣驛から一粁半

永仁年間日蓮上人の高弟である日像は、師の歿後鎌倉を出て身延に登り、佐渡に行き、そこから七尾港に渡る船中で、石動山天平等の滿藏法師と法論の結果、法師を説服し法衣を改めさせて日乘と名乘らせた。二人は相携へて羽咋郡上甘田村瀧谷に向つたが、そこで日像がその杖を地に立てゝ後に寺を起すやう日乘に命じた。その時鄉士柴原將監といふものがあり、法華を信じてゐたので領地五町歩を割いて一宇を創建し、日像を開山とし、日乘を第二世とした。

永和三年足利義滿は莊田を寄せ、前田利家も深く崇敬し、羽咋郡土田莊を寄進した。その後利常の生母壽福院は法華の信者であつたが、慶長十九年利常が初めて大阪陣に從軍した時は番神堂を改築して無事凱旋を祈つた。利常また歸國後、五重塔婆、三光堂、樓門、鐘樓、開山堂、本堂、書院などを建て、これらは元和元年から寛永二年までに竣功した。桃山及び江戸初期の樣式を具へ、今尙北陸屈指の大伽藍を維持し、その多くは國寶に指定され、日蓮宗伽藍の制度を徴すべき建築である。

本堂（國寶）五間五面、單層屋根入母屋造棧瓦葺、慶長十七年の再建、寺中第一の建物で足利末期の特徴を具へ、桃山風の雄麗な手法を加味してゐる。

開山堂（國寶）五間五面、單層屋根入母屋造棧瓦葺で慶長十七年の再建で、その樣式は本堂と同じである。

五重塔婆（國寶）方三間五層の塔婆で、屋根は柿葺、元和四年利家の生母壽福院追善のための建立である。江戸時代初期の建築であるが室町末期の特徴がある。

樓門（國寶）三間一戸の樓門で屋根は入母屋造棧瓦葺、寛永二年の建築である。權衡がやゝ狹高であるが、細部の手法はよく江戸時代の特色を表してゐる。

書院（國寶）七間五面の單層で屋根は切妻造棧瓦葺、元和二年の建築で內部の裝飾には桃山末期及び江戸時代初期の特徴を存してゐる。

鐘樓（國寶）方三間重層、袴腰の形式で、屋根は入母屋造柿葺、寛永二年の建築である。形は上層が稍大きいやうであるが、江戸時代初期の建築として見るに足る。

祈願堂（國寶）三間社流造、屋根は棧瓦葺、慶長十九

年の建築で三光堂ともいふ。こゝの諸堂中最小の建築で、神社建築に屬し、最も多く桃山時代の特徴を表してゐる。

鎭守堂（國寶）五間五面、單層屋根入母屋造棧瓦葺、元和九年の建築にかゝり、別に番神堂ともいふ。桃山時代末期の特徴を表してゐるが、幾分纖弱に傾き、江戸時代初期の色調を呈してゐる。

經堂（國寶）三間五面、單層屋根寶形造、棧瓦葺、寛文九年の建立で一切經が納められてゐる。

その他祖師堂、釋迦堂、閻魔堂、寶藏、客殿、尙境內の附近には奧ノ院、七面堂、觀音堂、藥師堂、妙見堂などがある。

寺寶に山水蒔繪机一脚、料紙筥一合があり、何れも國寶に指定されてゐる。

椎葉圓比咩神社

羽咋驛乘換能登鐵道柴垣驛下車

上甘田村柴垣にある鄉社で椎葉圓比咩命を祀る。こゝの秋祭の神輿渡御は獅子舞を先行させ、神輿はこれに次ぎ、更に獅子舞の前にケン（天狗）ベシヤラ（鬼）といふものが數人ゐる。後方には長さ一四米の幡木に四幅又は五幅の赤白幡を立てゝ行く、この幡の美と幡木の大きいのを誇りとしてゐる。

神社の背後には祭神の前方後圓墳がある。

柴垣海水浴場

羽咋驛乘換能登鐵道柴垣驛附近

白砂青松、遠淺の海水浴場で中央に長手島が斗出し、小天の橋立の景趣がある。

附近の海は釣魚に適し、黑鯛、鰺あぶらめ等が釣れる。

福浦港と富來港

羽咋驛乘換能登鐵道三明驛から三粁七、自動車がある

福浦港は能登の外海に於ける唯一の良港で、灣口は狹く水は深く風浪を避けるに適してゐる。この港は南灣と北灣と二つの灣からなり、灣頭の高丘に村設の燈臺がある。港口は何れも西北に向ひ、最深一八米、最淺一米五干滿の差は六〇糎である。三方は丘陵によつて圍まれ、僅かに一方が海に展いて居り、暴風は避けられるが、水

底は土砂のために埋められてゐるから大船を入れることは出來ない。福浦が古く渤海國から來舶した港といはれるのは三代實錄に羽咋郡福良泊の山木を伐損することを禁ずる條があるからで、渤海の船が北陸道へ來ると、必ず還船を此の山の木で造つたのである。昔は日本海を航行する船は此の港へ避難しないと、佐渡まで流されたものであつたといふ。されば今でも土地の古老は帆船時代の繁榮をなつかしがつてゐる。

能登名跡志には「福浦村は北國の澗所、夏中數百艘の船不レ絶、家數百軒有て、船問屋抔繁昌たり。大澗の外に水の澗としてあり。何れも澗の緣に家居してあり。一向宗の坊二ヶ寺あり。又澗の上の崎に鑵火堂あり。此の邊面白き所なり。又水の澗とて有。不見の澗と書くよし、あらはに見えぬ故也。高に盜人穴とて有」と記され水の澗とはこゝで、その南方には本澗又は大澗といふ所があり、低い峠を越えて行つたものであつたが、今は隧道ができて往來に便である。

福浦港から富來に至る一四粁の奇岩峭立の海岸は日本海の怒濤が岩脚を洗ひ、豪壯な海岸美をなしてゐる。通俗之を能登金剛と稱してゐる。そこは巨岩が海中に突出した下を貫通した穴があり、巖門といつてゐる。約五四米の深さで、小船などは通過することができる。岩上も平坦で、近山遠海を觀賞するによい。この巖門に近く數十疊の洞穴があり、中央に地藏尊を安置してゐる。こゝは昔源義經が奥州落のとき追手を逃れて隱れた所と傳へてゐる。

巖門と對立して高さ約二七米、周圍一四四米の尖鋭な岩島がある。その上に老松が生えて好景をなしてゐる。古來この頂上へ登つたものがなく、鷹や隼などが巣をつくるので鷹巣巖と呼ばれ、安永年間に出來た能登名跡志には「少し行けば鷹巣島とてあり、岨しき小島なり。磯に鷹巣の不動とて靈驗あり。此所は昔目納左衞門とて郷士住みし跡有りしに、岸崩れて名のみ殘れり。この濱を錦の濱とて、小貝など交り美しき砂あり。壁などに塗りてよし」と記されてゐる。

こゝに近く碁盤島といふ全島岩石から成る奇しい島があり一日の清遊によい。

富來は富來町、領家町、地頭町、高田の總稱で舊名を富木と書いた。海岸の一灣入を富來川の河成沖積層によつて埋めた所に發達したもので、陸上交通は南は高濱町

に北は鳳至郡鹿地に續き東方には半島を横に通る二つの縣道あり一は鹿島郡中島に、一は鳳至郡穴水に達してゐる。住民の多くは農業に從ひ、街道に面して家屋を構へるものは商業を兼ね蒸鹽を副業としてゐる。人口約一千八百。

富來港は松ヶ下灣ともいひ、西は子ヶ崎の突端から北は酒見河口を經、東は富來河口に至る間、海岸線五粁に亘る廣大な港灣で、僅かに南及び南西の方向に展いてゐる。港内は水深く海底は泥砂を以て覆はれ、暗礁の憂なく入港が自由で投錨も安全である。從つて沖合で暴風に遭つた船はこゝへ避難するを常とする。明治三十七八年戰役の頃外國の軍艦が碇泊したことがあり、それより愈々富來の名が世上に知られた。

東增穗村八幡にある富木八幡神社のくじり祭といふのは能登の國中は勿論、遠く加賀、越中へんまで知られてゐる特色のある祭禮である。その起りは八幡神社の祭神が七月晦日の夜こゝの沖合で難船し、袖ヶ濱に打ち上げられ、そこの住吉神社の神に救はれ、その緣で契を結ぶやうになつたが、袖ヶ濱では浪の音がやかましいので、靜かな八幡の里に宮居を求めて引き移つた。しかし毎年七月晦日の記念の夜は密かに住吉の宮居に忍び渡り一夜の逢瀨を樂しみ明けて八朔の日に再びもとの八幡宮へ歸つて行くのであつた。祭りは毎年九月一日（昔は舊八月一日）であつたが、現在は一月遲れの八月三十一日の夜に、お旅といつて八幡神社の神輿の渡御が行はれる。この夜八幡の神輿は十時頃お宮を出て約七八百米の間を夜明けごろまでかゝつて住吉神社に詣くので、この途中に見物人の間でいろ〳〵なことが行はれるさうである。八幡神社を出て少し行くと薄蒼とした山王森といふがあり、この森を拔けると忽ち廣々とした砂原に出る。この森と砂原を通る時がこの祭の氣分が最高調に達した時で近郷近在から出て來た老若男女の見物人が、神輿の前後左右にぞろ〳〵と隨いて行くその間を、昔は暗中でさま〳〵の振舞が演出されたよしであるが、今は昔のやうではないといふ。

祭りは九月一日から六日まで、この間地頭町には露店が開かれ、見世物、演劇、相撲などが行はれ、町の者を初め近郷近在の人々の一年中最も樂しい歡樂日といふことになつてゐる。

永光寺

金丸驛から三粁

曹洞宗の名刹で、翠綠の山を繞し、日本海を一眸のうちに俯瞰することができる。瑩山紹瑾が草創の地で、またその終焉の地といふ由緒の深い寺である。

後醍醐天皇を始め後村上天皇、光明天皇、後土御門天皇の勅願寺で寺領を寄せられた。應仁年間殿堂僧坊悉く兵火に罹つたが、後土御門天皇が大いに土工を起し給うたので復興した。のち又天正年間兵火に罹り、五老峯の一閣を殘して悉く灰燼に歸した。德川時代以後は昔の盛觀を見ることは出來ないが曹洞宗の永平寺、總持寺などの地位が確立してゐるため法燈舊のやうにはならなかつたが、今に藏する多くの古文書はその盛時の狀を回顧させるに足るものがある。

石動山

良川驛から東九粁、途中三粁の二ノ宮まで自動車がある

石動山は鹿島郡越路村字石動山にあり、寶達山脈が北方に延びた中でも最高點で海拔五六五米、頂上近くに式内社伊須流岐比古神社とそれに奉仕した石動山天平寺の遺趾がある。神社は伊非諸尊を祭神とし、昔は山上大御前に權現堂があり、中腹に五社權現があつた。現在は山上大御前の權現堂を中腹に遷して本殿とし、天平寺の講堂を拜殿に當てゝゐる。神社の石段の左方にある動字石は、大いさ牡牛ほどあり石垣を繞らしてゐる、社傳によれば昔天から隕ちたものといひ、このため石動山の名が起つたといふが、學者は隕石でなく輝石安山岩だといふ。

能登名跡志には「石動山は二ノ宮より一里半登るなり。一國第一の高嶺なり。昔此山は天より星落ちて石となる。天漢石と號す。今講堂の前に在。開山泰澄大師養老二年登山以前は此石ゆるぎて山震動してあれしに依て石動山といへり」とある。頂上は大御前のあるところで、登拜の人々が此所まで登るのは困難なので、これより低い地點を選んで天平寺が建てられたのである。眺望は七尾灣、富山灣を俯瞰するによい。天平寺は戰國以前には三百餘坊あり、武家の勢力に對抗して威を張つたが、天正十六年前田利家の怒りを買ひ一山悉く燒亡の憂目を見た。これらの諸坊中最も勢力のあつたのは大宮坊であつたが、明治二年廢寺となり、同三十五年再興した。

七尾港

七尾驛下車

七尾町は北日本有數の良港を控へ七尾灣の風光を望み縣下唯一の開港場となつてゐる。街は商家軒を連ね能登半島第一の商業都市として殷盛を極めてゐる。人口約二萬。近年種々改修を加へ貿易港として進展し重要視されるやうになつた。

この地は昔は海中にあつたが、漸次地盤の隆起と天然に堆積した土砂のために出來たもので、特に海岸にあつては明治以後人工的埋立によつて擴張した所が多い。

王朝時代には初め古府に、後には府中を國司の治所とし、吉野朝時代には守護畠山滿則が下國し、古屋敷又は古城に居り、菊尾、龜尾、松尾、竹尾、梅尾、龍尾、虎尾等七山の尾をとり七尾と名づけたのがその起因である。その後滿則から義春まで八世百八十年の久しい間、畠山氏が、蟠踞してゐたが戰國時代になつては背後の山上七尾城に據り防戰地に當てた。天正五年上杉謙信のために滅されたことは謙信の名吟「霜滿軍營秋氣清」によつて知られてゐる。次いで前田利家が入國してからは小丸山城に築いて奥能登に入る咽喉を扼し、府中、所口（現在丸山公園）を包括した新市街を開き、畠山氏の城郭七尾の名を取つてこれにつけた。これより町も繁榮するやうになつたが、金澤藩になつてから城塞を廢し、奉行所を置いた。所口の街形は灣の形に添うて矩形をなし、道路は井然と區劃されてゐる。

港は古い歷史を持つてゐるが、有名になつたのは畠山氏入國以來で、その頃から大船が海外に航海し、支那、朝鮮と通商してゐたらしいが、文政年間英人がこの地形を視察して大船巨舶を碇泊させるに足るのを知り、幕府の許を受けて測量した。安政五年幕府が米國と通商條約を締結した時、北國地方の貿易港として本港を指定する

こと〻なり、堀織部正を此の地に遣して實地調査を行ひ能登島を居留地とし、天領四十三箇村と交換しようとしたが、藩では暗礁が多いから大船の碇泊に適しないなど〻と主張して幕吏を歸させた。當時十分に調査し、貿易港として開いて居れば今頃は神戸、横濱のやうな大貿易港となつてゐたであらうといはれてゐる。

港は鹿島郡の東湊村、七尾村、西湊村、石崎村とこれに對する能登島の西島村との間に挾まる海面で、その港界は西島村の松崎から東湊村の赤崎間に引いた線以西と西島村の屏風崎から石崎村の石崎に引いた線以東に亘る七尾南灣の一部である。前面に能登島が横はつて日本海の激浪を防ぎ港内は波穏かで深く常に湖水のやうで日本海有數の良港である。灣は大規模な沈降海岸であるが、これを繞る四周の山、山の景は頗る明快で石崎屏風、屏風崎、須曾屏風など多くの小突出、小灣があり勝景をなしてゐる。大正十年には機橋の補修工事が施され、三十噸級の船舶を自由に繫留荷役が出來るやうになり、その後滿鮮、ソビエート聯邦との關係が密接になり、昭和二年十一月第二種重要港灣に指定され、その計畫として昭和三年度より湊町埋立工事に着手し、同十五年度に竣工豫定である。

能登半島の港宇出津、飯田方面に通ふ定期船が發着してゐる。特産物には工産物に製材、建築、大日本人造肥料會社七尾工場の人造肥料、七尾セメント株式會社七尾工場のセメントなどがある、セメントは殊に良質で北日本唯一の工場といはれてゐる。海産物には鱈、鰯、鰤、鱒、鮪、蟹などが多く、就中海參は七尾の特産物で、それは海鼠を乾燥して製したもので、加賀藩主が德川將軍への恒例献上品であつた。また幕府が外國貿易を禁じた時代でも特に輸出を許されてゐたといふ。その當時は捕獲期を制限して十一月から翌年四月までとし、七尾商人の中から頭海鼠役といふものを置き、代々世襲してその製造に當らせた。

七尾酒は俗に「七尾の甘口三年酒」といはれ、芳醇で且つ甘味のあるのを特色とする。三年酒といふのが最も良く特色を具へてゐる。町から六〇〇米に岩屋醴泉（永源地）といふ岩洞がある。洞口は五米ばかりで、洞水に湧く天然水が七尾酒の釀造用に利用されたが、今は此の水を引いて港内の船舶給水に使用してゐる。

七尾名物の大豆飴は大豆を原料として製した飴で、昔

源頼朝が長谷部信連を能登の地頭としたとき、信連はこの豆飴を賞味し頼朝に献上したといふ。

まだら節

七尾に昔から傳はる民謡で、梵語曼荼羅の轉訛であるといひ、或は秀吉の朝鮮役に出征將兵が凱旋の祝歌として船中で唄つたものとも傳へられてゐる。とにかく船方に唄はれる祝儀歌で船持が年一度舊正月十一日に船頭水夫を招いて盛宴を張り盛んに唄つたものである。この唄は祝儀の席上にのみ唄はれ、その特色は樂器をかるの必要なく、これを唄ひ得るものも得ないものも、滿座共に手を拍つて唱和合唱が出來る點にある。北陸沿岸中まだら節の行はれるところは七尾港の他に輪島であるが、式作法は前者の方が嚴格で、打囃す手拍子の數まで一定してゐる。歌詞は「めでた〻の若松様よ、枝も栄える葉も繁る」を本唄とし、ほかに五六種の脇唄があり、溫雅悠揚迫らぬ調子で、しかも男性的なところがある。

此所口は能登一國の國府にて諸商買の問屋有て繁榮の地也。凡家數六千軒といへども、今は四千軒有、町奉行一方在住に代官六人（中略）又利長公御城跡は丸山といふに有、其時御城下は今府中とてあり（中略）此所に名物多し、名酒數多有、中にも羽衣酒とて若松屋何某の方に有、其外豆飴等魚鳥類の便りよく、自由自在の國府也。むかしは七尾と云ひし松尾の古城の拳に有し也。則松尾山の城は七尾の城とて、山の尾七ツ有て、菊の尾、龜の尾、松の尾、虎の尾、竹の尾、梅の尾、龍の尾抔とて有、依て七尾の名有、此國の國府として世々の人住めり。

能登めぐり

七尾城阯　七尾町から南東約四粁

矢田郷村石動山の北に連る山脈から西北に派出した頂點を削つて城臺をなすもので海拔二九〇米、自然の要害をなし、眺望に富んでゐる。古屋敷から古城に出て城山に差しかゝると麓からは一面に能笹が茂つてゐるがゝさして嶮しくはない。本丸までうね〻〻した路がつゞき、婦人子供でも下駄ばきのまゝ登ることができる。本丸から能笹を分けつゝ更に山頂に達すると眼界俄かに開けて脚下に七尾灣、能奥の丘陵が一眸の下に集まり、遙か東に日本アルプスの連山を望むことができる。

前田利家が小丸山城を構へ、その城下を七尾といふのに對し、こゝを舊七尾といふ。正門は海に面し、矢田村方面にあり、北門は七尾赤坂と稱し、古府口にある。本丸、二ノ丸、三ノ丸が東から西に連り、その前に櫻の馬場がある。南に搦手口の坂があり、その前に砦阯がある。西面は山路で中間を三折して下る。これは大手口で赤坂口と呼ばれた所らしい。四面殆ど窮谷をなし要害堅固の城で上杉謙信は幾度かこゝを攻擊しようとしたが占據することはできなかつた。

應永五年畠山滿則が能登の守護に任ぜられてからこの城を築き、爾來八代百八十年間能登を領した。畠山氏は戰國時代に入つては相繼ぐ内憂外患に惱まされた。その弱味に乘じて侵入したのが上杉謙信であつた。それは天正五年七月のことで當時長綱連は大手赤坂を守り、溫井景隆は搦手大石谷に備へ、遊佐續光は木落口に陣した。その頃城主畠山義春は僅かに五歲の幼少で、病に罹り遂に斃れたので城内の士氣沮喪し、唯一の忠臣長綱連の一族も謙信に内通した遊佐續光のために誘殺され、七尾城は全く陷落した。時に天正五年九月十三日の事で、謙信が陣中七尾灣の風光を見てその感懷を述べた詩は人のよく知るところである。

霜滿軍營秋氣淸　數行過雁月三更
越山併得能州景　遮莫家鄕憶遠征

その月二十六日初て入城した謙信は「今登城見渡候得者、從二聞及候名地。賀越能之金目之地形與云、要害山海相應、海頻島々之體迄も離し寫繪像一勝景」と歎賞した。

その後謙信は七尾城に鰺坂備中を置いて守らせ、直江大和、松川兵部を副とした。天正九年八月前田利家は能登を領するやうになつたが、七尾城の邊陬を嫌つて小丸山城を築いた。七尾城阯は昭和九年内務省より史蹟として指定され、近年は山路を擴張して探勝し易くしたので新綠の頃は人出が多い。

能登生國玉比古神社　七尾驛から半粁

縣社で延喜式内社である。祭神は大己貴命で命は出雲國からこの地に着かせられ、湖水に毒蛇が棲み人民を苦しめてゐるといふので、これを退治せられ、遂に羽咋郡竹津浦に垂跡せられたので氣多本宮とも呼ばれる。

崇神天皇以來歷代の天皇厚く崇敬せられたが、殊に天武天皇は多くの社殿を造營せられたといふ。また能登の

守護畠山義綱も深く尊信し、弘治三年には社殿を改築したが、天正年間火災にかゝつて燒失した。後天正年間前田利家が入國して社地愛宕山に新城を築くため、その南方明神野に遷して社殿を再興した。現在の社地がこれで前田氏は代々これが造營を怠らなかつた。

祭典は三月二十一日の平國祭が最も著れてゐる。

長齡寺　七尾驛から一粁半

西湊村の通稱山の寺にある曹洞宗で、前田利家が七尾在城のとき、越前高瀨の大透圭徐を請じて開山としたもので初めは寶圓寺と稱へたが、文祿三年今の寺號に改めた。天正六年に前田利家が兩親の菩提の爲に建立したもので、前田氏最初の香華院であつた。境内に七尾城代前田利好と守勝の墓がある。

寺寶に前田利春像一幅がある。國寶で絹本着色、衣の上に袈裟をかけた僧侶の姿である。利春は利家の父で、もと尾張の荒子で二千貫を領してゐた。

能登國分寺阯　七尾驛から南二粁

德田村字國分にあり、村役場の東北一粁半餘、縣道に架る戻り橋を渡り、縣道と分れて北に向ひ、中川原を經て七尾に通ずる小徑の傍に、半ば土に埋れた塔の礎石が殘つてゐる。これは續日本後紀の承和十年十二月朔には能登國部内定額大興寺を以て初めて國分寺と爲すとある所である。

大地主神社

矢田村字府中町にある、俗に山王社といふ。鄕社で、もと加夫刀比古神社と稱し、大山咋神、素盞嗚神、伊許保止神を祀り地主の神として崇敬せられてゐる。府中は王朝に於ける國司置廳の地で、能登國建國以來國守が厚く信仰した。この時から神饌を柏の葉に盛る青柏祭の古儀が始まつた。この日七尾町に飾られる山車は畠山氏が能登の守護となつたときから始まるといふ。その後天正の初頃兵亂のため神事が中絕したが前田氏が入國してから復興させた。

現在の青柏祭に用ゐる山車（鉾山）は、上部の廣い梯形の屋臺が丸太で組立てられ、蓆や幕で外方を蔽ひ、そ

の内に歌舞伎がかりの裝飾を施してある。その幕には畠山氏の紋章、紋丸に二ツ引きが附けられてゐる。

祭日は五月十三日青柏前祭と五月十四日青柏祭本祭、五月十五日青柏後祭の三日間で、十四日の本祭には魚町、府中町、鍛冶町から奉幣の儀が行はれる。この祭禮は數百年間行はれた盛大な祭で近鄕近在から夥しい人出があり、魚町、府中町、鍛冶町を練り廻る。

能登島

七尾驛の西北四粁の沖合、鱈船の便がある

俗に島の地といひ、また袋島、八太郎島、蝦夷島の名がある。古來著名の勝地で萬葉集に能登の島山と歌はれてゐるのはこゝである。東西一三粁五、南北六粁五、周圍約七一粁、面積五七〇七ヘクタールあり、東島、西島、中乃島村に分けてある。七尾灣の沈降に當り比較的高い丘陵が海上に殘つたものであるから、平地は少く、僅かに中乃島村向田附近の水田と、東島村野崎附近にやゝ廣い平坦地があるのみで、その他は斷崖をなして海に臨んでゐる。海岸は甚しく屈曲に富み、風波穏かで到る處小舟を繫くのに適する、能登半島とは三ケ口瀬戸に於て四〇〇米を隔てゝゐる。

能登島に附屬する島に佐波沖の寺島、こしき島、嫁島、からす島、はげ島などがあり、野崎沖にはせんべい島、しぶと島、松島、さゞえ島、小浦島が横はつて風景がよい。長崎附近にはなれたり島、竹生島、曲の沖にはちやうしや島、かもめ島、こべ島、大島、水越島、小島、黑島などがあり、田尻沖には鱈島、中島、江ケ島がある、通り沖には猿島がある。

太古は此の島に多くの蝦夷人が住居したと傳へるが、それは五十四代の仁明天皇の承和元年頃までらしく、穴居の跡は今も須曾山中に殘つてゐる。

傳說によるとこの年僧空海は蝦夷を退去させるため能登島に巡錫して來たところ、須曾には多勢の蝦夷が住居し、そこの衣川から獲れた鮭を常食としてゐたが、空海が丁寧に會釋して一尾の鮭を乞ふと、蝦夷はそんな鮭はないといつて與へなかつた。そこで空海は「昨日來て今日來て見ても衣川、須曾ほころびて鮭もあがらず」と一首の歌を詠んだところ、翌日から島中何れの箇所からも鮭が獲れなくなつてしまつたので、蝦夷は食物に窮して島を去つたといふ。

大伴家持が能登國司だつたときは此の島に寄つたといふ、降つて畠山氏の時代には住民の生業は漁獵製鹽を業としたと傳へ、時には武士が世を逃れて身を隱したこともあるらしい。前田氏の世となつてからは流謫の地として自由の交通を遮斷したので島へ遊ぶ者はなくなつた。

島は昔から駿馬の產地として知られ、源頼朝に愛馬池月を獻じたといふ牧山がある。

能登島八太郎といふのは一個の人物のやうであるが、その實は昔初めてこの島へ役人を置き、八名八村の制度があつたので、この名が生れたと傳へてゐる。

須曾古墳

七尾港から約一一粁

佐波まで發動汽船がある、能登島西島村須曾にあり、蝦夷穴ともいはれる。

須曾部落地方の丘陵上にある圓墳で、同一封土らしい南側に二つの石室が入口を開けてゐる。西の方にあるのを雌穴といひ、已に破壞されてゐるが、東方にある雄穴はほゞ完全で、雌雄約三米を隔てゝゐる。雄穴の玄室は平面の長さ三米二、幅二米一、側壁は底面から一米ほど直立し、その上部は數箇の石を四方から持出し、天井石を載せてゐる。

雌穴は長さ二米七、幅一米六、高さ一米、上部は持出し形をなし天井石は內部に墜落してゐる。この古墳は蝦夷の穴居した遺跡といはれ、その女は此の地を去るとき、己れの洞穴を破壞したが、男は再び來ることもあらうかと、そのまゝ殘して行つたといふ傳說がある。

寺島遊園

七尾港から汽船約二十分

佐波の海上は島が多く最も大きいのが寺島で、こゝには昔瑞禪寺といふ寺があつたが、海水に浸蝕せられて今は跡方も留めてゐない。嫁島は婚禮のをり花嫁がこの島に憩うたところ、烏島は塒を求める烏の群れ集ふためで、時に全島黑色となるときもあるといふ。蠟燭島はもと寺島の一部であつたらしく、その形によつて名づけられたものである。寺島附近殊に風色が勝れて、水淸く波穏かで海水浴場の施設があり、夏は遊覽船が絕えることがない。

和倉温泉

和倉駅から二粁自動車がある

七尾灣を南灣、西灣に劃する辨天岬の突端にあつて能登島に對し、東に屏風崎、俎板崎の奇勝が横はり、西に瀨嵐、筆染、唐島の曲浦を見、その内に種ヶ島、机島を泛べ、風光すぐれた海岸温泉である。たとへ温泉が涌かなくとも絶好の遊覧地で、夏は海水浴も行はれる。

こゝはもと涌浦と呼び、約一千二百年前平城天皇の大同年間に發見され、藥師嶽の西溪湯谷から涌いてゐたが、永承年間湯脈が海中に轉じたと傳へてゐる。七尾城主畠山氏のとき此の湯を保護するため、周圍を石で圍み、浴場を汚されないやうにし、必要に應じ湯船を以て七尾に採湯して湯治した。その後幾たびか天變地異に遭ひ、且つ兵亂相續いだため温泉の經營を圖るものとてはなかつた。

慶長十六年の頃前田利長が廐物に惱んだとき、越中の商人が和倉の湯の效驗を進言したので、試用したところ效目があつた。それで利常のときこの湯を一般庶民にも利用させようとして寛永十八年湯島の築工を起した。

湯壺は方六尺餘で石で圍ひ、その周圍十間ばかり土を盛り、湯島を築き一般の入湯に充てた。併し上流の人は七尾町へ湯を取り寄せて入湯するのを例とした。その保護監督としては湯番頭庄五郎を七尾に置いた。當時の入湯者は非常に多く無病者でも數日滯在して遊興するものがあつたので、藩では是等の者を盜賊改方をして掃湯させた。安永の頃にはその取締が最も嚴重であつた。藩はその頃農民の遊情に流れるのを防止したもので昔の和倉温泉は上流の人々の使用と他國へ樽詰として廻送するのが主で、他の百姓町人は病氣以外みだりに入湯は許されなかつたのである。

延寶二年からは涌浦を改めて和倉の字を用ゐるやうになつた。涌浦の二字は相類似してゐるため農民などは往々にして上下を顚倒して書いたからであるといはれる。この温泉に關する調査の最も古いのは安永二年及び天明元年の書上がある。後者に據れば

「一、和倉村領分中の温泉は海中に島在レ之、地方より六十間計り隔り居申候、但島形丸く指渡し十間計龍在候。一、湯壺は島の中に有レ之、深さ六尺計御座候。口指渡三尺計、桶筒二つ入有レ之候。一、和倉村之儀至而家居不レ

宜に付、御家中御侍樣方に於ては所口（七尾）御逗留被レ遊二取湯一候而御入湯被レ成候。下賤の者の儀は和倉村に止宿、於二鶴に一口指渡二尺許、深さ二尺計の桶に温泉汲込み入湯仕候。至而熱湯に御座候故、汐を指申候」とあり、當時いかに利用せられたかゞ察せられる。

また湯島へ行くには、安永二年の書上に「海上手舟に乘通路仕候」とあり、文化十年金子鶴邨の能登遊記には「温泉者在二于島中一架二板橋一通二往來一、湯池方六尺餘、熱手不レ可レ近、故連二浴桶一汲レ湯、凡湯一斗加二潮水三斗一而後冷煖得レ中」とあるから漸次便利になつて來たことがわかる。

また安永年間の作といふ「鹿島郡和倉の詞」を見ると「温泉の島は千歩に至す眉引の横山より海を入れと眞中に巖をかたどり辨才天立せたまふ市杵島姫の命を祭りて三女の一つにまします。向ふは舟木伐るてふ島山を構へ、水光引ちがひて屏風崎筆染楓島をなんとたてり。左は瀨嵐長浦三栗の中島より浦山立つゝきて海鼠は此邊を上品とす。又芦邊をさして鳴わたる田鶴の濱松千世こもれる淺みどりも今一しほの春をえてめでたし、右は七尾より打曲りて曾濱石崎津向海士が業ひ朝夕の網引のいとま小魚わかち鬻ぐさまいと賑し。又此石崎のならひとて露のひるまもいはず男女のましらひのしるしに門に櫂立るなり。それに行來の人もさとりて入らず、いづれ此類ひ紀國加田浦にも有て海士がしわさのつくろはぬいにしへの手ふりめきていとおかし、抑此温泉もと窺ひみるに石疊の壺より涌出る所汐湯にて汐の滿干に深淺を顯す四時おしうつて賑ひ、湯さやに行かふ客人は赤躰にして、髣髴笹の根に、蜘蛛のすがくが如し。あるは湯桶にもたれて眠りを催し、あるは湯桶のほだへ足さしのべて唄ひのゝじるも其日々々の、うきめはらすなぐさめなるべし」とあり、「湯さやに行かふ客人は赤躰」などゝ當時の入湯者の有樣がまのあたりに見えるやうである。

明治五年十月和倉村は久しい以前から湯番頭であつた庄五郎に手切錢二千貫文を支出し、湯は村の自由になるやうになつた。

明治十三年には獨逸に開かれた萬國衞生博覽會には本温泉を出品して三等に推された。海岸を埋め立てゝ湯島を連續させたのもこの年であつた。今は海岸の埋立が益々進捗して宏壯な旅館が軒を並べて大温泉街をなしてゐる。

泉質は無色透明で臭氣なく、味は強鹹、溫度は約八十二度、濃い食鹽泉に屬し、沃度を含む點に於ては海内第一といはれてゐる。效能は慢性リウマチス、經久性半身不隨、小兒麻痺類、慢性子宮周圍炎、殊に慢性消化器病及び傷病に對して特效がある。内用すれば慢性消化器病慢性喉頭及び氣管支加答兒によい。

灣内は釣魚に適し、舟を雇つて周遊するにもよい。また御便殿の丘の下は波靜かで遠淺で婦人子供の海水浴に適してゐる。

附近の散策地としては今上天皇の東宮に在せられたころ行啓あらせられた御便殿がある。日和山の上にあつて灣内の風光が手に取るやうに見渡される。

机島は海上四粁にある風景のよい島で、周圍一粁三、島土に松が同じくらゐの高さに茂つて綠の蓋のやうな形をして美しい。また奇岩怪石の多いうちに長さ二米餘の奇石がある。硯石の石質は極めて堅く、六〇糎許りの墨池には常に水が湛へられ、いかなる時にも增減がない。「昔は大伴家持を初め畠山氏等が連歌の宗匠をこの地に招いて遊宴を張つたことがある。

この島は萬葉集に「所間多爾乃机之島能小螺乎、伊拾持來而、石以、都追佐破夫利、早川爾、洗濯辛鹽爾、古胡登美、高抔爾盛、机爾立而、母爾奉都也、目豆兒乃負、父爾獻都也、身女豆兒之負」と記されてゐる。

その他圓山公園、御成山、和倉神社、青林寺などがある。

旅館 和歌崎館、銀水閣（四圓—五圓）、柴端館（三圓五〇錢—四圓）加賀屋、都石館（二圓五〇錢—三圓）多田館、海望館、直木館、本田館、小泉館（二圓—二圓五〇錢）大德館、大井館（一圓八〇錢—二圓三〇錢）その他十數軒

名物 和倉しそ、鑛泉せんべい、湯の花、このわた、湯櫻、雪の友、湯の花羊羹

穴水町

穴水驛下車

穴水町は七尾北灣の北隅灣頭近くにあり、西北部は鹿島、羽咋の二郡に接し、地勢一般に高く、東部の穴水灣に面する地方一帶は低く、田圃が開けて耕地が多い。鳳至郡南部の物資集散地で人口七千を數へ、能奥では輪島に次ぐ繁華な町である。

海岸は屈曲多く、たけが鼻、新崎鼻が突出して穴水港を抱いてゐる。灣内水深く九米に達し、巨船の碇繫に適してゐる。北方の麥ヶ浦入口、南方の志ヶ浦入江も漁船の出入に適してゐる。新崎及び志ヶ浦附近には青島があり、綠樹蓊鬱として四時閑寂の別天地をなし遠く能登島を控へてゐる。

穴水町は流程一四粁の小又川の土砂による沖積層で、今は海岸から稍々離れてはゐるが、聚落草創の頃には全く海に近づいてゐたものといはれてゐる。

穴水灣は天然の良港で上代から船舶の安全港で、大同三年以前は能奥交通の要路に當る水驛であつたらしい。次いで鎌倉時代後地頭長氏が附近に城郭を構へてから再び城下町として繁榮して來た。前田氏入國後も交通の要衝にあつたのでさまで衰勢に陷ることはなかつた。

現在は穴水から四八粁能登半島の東部を通り七尾灣の風光を見ながら鵜川、宇出津、松波港を經て飯田町に達する省營バス奥能登線があり、また七尾から發する汽船便もあり海陸の交通が大いに開けて來た。

住民の生業は農を主とし、漁を副とし、米穀が産業の主なもので、次に各種用材、鯛、鰈、鰯、日本酒等を産する。

穴水は七海より十九町あり。入海の奥にありて、此の穴水公領にて家數三百軒あり。町中に長十間餘の橋あり。川の南を大町といひ、北を川島町といふ。此川の源は荒屋村奥村山より流れ、又一筋は唐川村奥村富木山境より流れて、此の町の後にて合流す。商家多く繁昌也。毎月二の日三さいの市あり。湊は餘程の船着にて賣買の便ありて、公領一の廣き所なり。大町の庄屋は宮の森といへり。川島の庄屋は池田永齊といひて長家へ忠勤の者の筋目也。橋爪に關寺といふものゝ方に、弘法より傳へられし五香湯あり。産後に吉し。一貼何にても升物一升に代ふる也。昔は此穴水は、長家の城下にて數千軒の家あり。兵亂に退轉せし也。今の家居あるは出村といふ所なりし也。其の比は寺庵も多くあり。兵亂に散亡して、今も兩町に藥師堂とて二ケ所作佛安置あり。

能登名跡志

長谷部神社

穴水町宇大町にあり、鄕社で長谷部信連を祀る。文治二

年四月信連は鎌倉に參向し、先に以仁王に從ひ平氏を防戰した功により能登國の守護職に補せられ、鳳至郡火屋庄穴水に居住した。後建久年間加賀の逆徒を掃蕩した功により江沼郡塚谷保を賜ひ、同國檢非違使所を預けられた。建保六年十月大屋庄河原田で歿した。これより先、信連自ら骨像一軀を造り、穴水大町の地に影堂を建てゝ安置した。現在の神體がこれである。爾來信連の子孫長氏が代々祭祀を掌つた。弘安元年以降は別當來迎寺に奉仕させた。寶暦五年十二月に武健靈神の號を賜ひ、武健靈社といふ。明治維新の際神佛合祀を禁ぜられたので、來迎寺の地所を割いて社地とし、明治十六年鄕社に昇格した。

來迎寺はもと靑龍寺眞言宗といふ古刹であつたが、天正五年上杉謙信が攻め入つたとき諸坊と共に頽廢した。後再興して宇留地の關寺にあつた阿彌陀像を迎へて本尊とし來迎寺と改稱した。

長氏の遠祖は淸和源氏から出で、秀賴の時、大和國に住んで長谷部を稱した。季賴の曾孫に爲連があり、その子を信連といひ、久安三年正月遠江國長邑に生れ、長を以て氏とした。信連は後に朝廷に仕へ武勇を知られた。また大和國の强盜が、大炊御門京極の常葉御所に闖入し、衆を傷け資財を奪ひ去らうとしたとき、信連は彼等と戰ひ、その四人を斬り、その一人を捕へた。この功により左兵衞尉になり、院の昇殿を許された。

治承年中信連は皇子以仁王に屬して三條高倉宮に仕へた。同四年以仁王は源賴政の奉ずる所となつて兵を擧げんとせられたが、事露はれて平宗盛は源兼綱等に命じて高倉宮を襲擊させた。王は潛かに園城寺に逃れ、信連は獨り止つて宮を守り、力戰して敵十數名を斃したが、その身も重傷を蒙つて遂に虜となり、六波羅に引かれ、宗盛に調べられた。信連は凜然として更にその威に屈しなかつたので平家の諸士は皆彼が死罪に處せられるのを惜んだ。そこで宗盛は死一等を減じて伯耆の日野郡に流謫した。

平家滅亡後信連は伯耆の土豪に屬して、逆徒を鎭めて武功を擧げた。後安藝國に入り、轗軻流寓の間に數年を過してゐたが、文治二年四月鎌倉に至り、將軍賴朝に會つたところ、賴朝は前年彼が平氏と戰つたことを賞して、御家人となり、後能登國能登郡の地頭職に補せられたといふ。

建久年中加賀の逆徒を征服した功により、江沼郡塚谷

保を加賜され、後、こゝで放鷹を行ひ山中溫泉を發見したといふことになつてゐる。そして附近に醫王寺を建てゝ藥師如來を安置し、土民に命じて湯番の職を行はせたといふ。信連はその後建保六年十月七十二歲で歿した。その墓は今河原田村山岸の地內に遺つてゐる。信連の居城阯も大屋村にあつて墓地と遠く隔てゝゐない。信連の子孫は室町時代には守護職畠山氏を補佐してその股肱となり、戰國時代には越後の上杉氏の攻略により、畠山氏の家臣互ひに相鬪ぐや、孤忠を守つて節義を全うし、主家が滅亡してからは織田氏に屬し、越前田代の重臣となり七百年の久しきに亘り、連綿として祖宗の祀を斷たず、今に男爵として儼存してゐる。信連以來七百年間常に武勇を尙び、よく先世の聲名を墜さなかつたわけで加能二州に於いて稀な舊家といはれてゐる。

總持寺別院

穴水驛から二〇粁　自動車がある

鳳至郡門前町字門前にある。もと越前の永平寺と相並んで曹洞宗の大本山であつたが、明治三十一年燒失後、橫濱市鶴見區に移され、今は法堂、客殿、紫雲臺、慈雲閣、輪藏、傳燈院(祖廟)、白山殿等がある。

堂塔燒失の翌三十二年一宗を召集して大會を催し、再建を議決したが、當時の役僧等はなか〳〵實行に着手せず、密かに都會附近の便利な地へ移轉することを計畫してゐた。しかし門前附近の信徒はそれに反對し、多年爭つてゐたが、遂に明治四十年三月本寺を鶴見に移し、舊地に別院を置いて大祖堂、客殿などを建てることにして解決した。

當寺はもとは眞言宗で諸嶽寺といつたが、後醍醐天皇の元亨元年定賢律師の時、鹿島郡の永光寺から瑩山和尙を迎へて開山とし、禪宗に改めた。第二世峨山和尙となつてからは敎化愈々都鄙に普及し、武門の歸依深く、足利義滿、同義政、德川家康、前田利家等何れも祈願寺として寺領を寄進した。かくて全國に二萬餘の末寺を持ち諸堂伽藍よく整備して大本山の地位を保つてゐた。

藩政時代に出來た金砂子を見ると當時の狀況を次のやうに記してゐる。

門前村、寺口とも櫛比ともいふ。一山の名諸嶽山總持寺、曹洞宗出世の地、寺領四百石、內三十石塔頭芳春院、智識持なり、芳春院樣御位牌あり。五院、普藏

院、大源派也。妙高院、通幻派也。洞川庵、無蹟派也。傳法庵、大徹派也。如意庵、實峰派也。此の五院を、末山の僧諸國より毎年八月十五日に、翌年八月十五日まで五人宛輪番持に來り、本山日夜の勤行なり。此の外塔中十八ケ寺あり

宇出津町

省營自動車奥能登線能登宇出津驛下車

宇出津町は能登半島の中央に位して富山灣に面し、能登内浦の樞要地にある。南方は天然の漁港宇出津港を抱き、港口は東南に向つて開け、東西三〇〇米、南北八〇〇米、深さ一一米に近く、遠島、崎山の二岬が相對して灣口に向つてゐるから風波の憂がない。港内の惠比須崎及び鵜の島の入江は特に風光がすぐれてゐる。

住民の多くは漁業に從事し、古くから漁業の中心をなしまた物資集散の商業地として活氣を呈してゐる。寛政年間の舊記に據れば戸數わづかに四百軒に過ぎなかつたが百年後の現在は一千三百を超え、人口六千五百を數へる。

宇出津の産業は漁業が最も盛んで藩政時代から特別の保護を加へられて發達し、海岸線四千米は無盡の寶庫ともいはれ、縣下隨一の漁場である。漁業の主なものは鰤大敷網、鰯角網、鮪網などで近年は鮪、鰯の豐漁に伴ひ、漁獲高は百萬圓に達してゐる。その他鱈、鯛、延縄漁業烏賊釣等の沿岸漁業より、沖合漁業へも進出してゐる。また鰤、鯖、鮪の化工品も品質すぐれて産額に於ても縣下の主位を占めてゐる。

舊記能登半島には鰤漁のやうすを「沖合一里許の所に向ふ。見渡せば遙に漁船幾艘となく、艪柱立てゝ勇ましく波上に浮ぶ。……網は扇形に打伏せあり、其の末開けたる所より要の所に鰤を追込むなり。かくて眞一文字に浮べる船は次第に半圓形となり、要の所に待てる二、三艘の船と、遂には圓形を造りて網を揚ぐ。未だ其水際を離れざるに、漁夫手に手に鉤の著ける長き竿にて、潑剌たる鰤を引きあぐるなり」と記してある。

能登名跡志には宇出津のことを「國中一の四十物所にて、毎年春鯨など取れ、大獵至極の地也。其外諸商人あり間には數百艘不絶、問屋の座敷には數百旅人不絶、不斷に市をなし、夏冬共に賑はしき事國府に勝れり」と書いてあり、能登遊記には「居民或商或漁、漁則網ニ横海之鯨魚ニ、商則輸ニ南貨ニ控ニ西財ニ、有ニ大港ニ諸州商船舳艫常相屬、其西有ニ黒瀧坡墟ニ山海景勝如ニ畫ニ」と記され往時の盛況が偲ばれる。

明治三十一年縣がこゝに水産講習所を設け、同三十七年講習所を廢し、水産試驗場と改めた。かうした設備のあるのも、藩政時代から漁獲に重きを置きこの地に鹽魚の制とて特別の保護を與へてゐた結果と思はれる。

漁師町として殷賑を極めたこの町の花街は棚木にあり能奥第一といはれ、往時の建築は人の目を奪ふものがあつたといはれる。

港の東北にある棚木城阯は田名木、或は遠島山の城とも呼ばれ、長氏の家臣黒瀧與重郎景連のゐたところであつたが、天正年間長連龍のために攻略された。

富田景周の三州志に「舊記に天正五年越後の兵珠洲の三崎へ著船し、川尻飯田の要害を攻屠り進むによりて、與市城を開て降り、越後へ至り景勝の麾下に隷すと。按るに此説不詳。五年には景連珠洲郡の正院に在城也。同十年五月景勝より魚津の後援を爲さんとすれども、寡兵なれば先づ能登を征せんとする時に、與市其先鋒をなし、能登へ來り此の棚木城に保むを、長連龍魚津より此に軍を進む。景連城門外へ出て苦戦して死し城陷ちぬ」と記してある。

小木町

省營自動車奥能登線能登宇出津驛から九粁五、自動車がある

珠洲郡の内浦にある、リアス式の海中に突出して南北の二小港をなすところ、その南を小木港、北にあるのを九十九港といふ。街は灣の形に沿うて馬蹄狀をなし、灣内は東西三七九米、南北四五七米、最深一六米七で、浪の高いときでも天然の良避難港である。越中越後及び能登各地に來往する小廻船の寄港するものが多い。住民は古來漁業に從事するものが多く、漁獲物は遠く京阪市場まで搬出される。住宅地は狹い所で、ごた〳〵と家が込み合ひ人口五千七百となつてゐる。

町の周圍は白い凝灰岩でいかにも内浦らしい景觀を呈し、この凝灰岩は石材として利用されてゐる。

九十九灣はリアス式沈降の典型的なもので小木の日和山から越坂に至る間に入江をなし、汀線の屈曲が多く、これが九十九灣の名のある所以である。斷崖絶壁の處々には幾つかの岩洞がある。また灣中に全島岩から成り、

美しく樹木の茂つた蓬萊島がある。灣内は遊覽船で約三十分もあればすむ。日和山は見晴しがよく海を隔てゝ見る立山方面の山々は雄大である。

能登名跡志には「九十九入とて日本無双の入海有り、九十九潟といへり。風景日本三景にも等しき所なり。是は小木、一ノ瀬、越坂三ケ所の領境の入海にて、今九十九所有り。深さ百五十間餘有り。廻り三里餘有り。中に鶴下り島とてあり、形は蓬萊の臺の如し。越坂の松とて名木有り。肉桂の木數多有り。辨才天の社有り。島の東に丸き盍のやうなる所あり。元朝に開くといへり。誠に風景仙界の如し」と記してゐる。

「佐渡は四十九里波の上」この四十九里といふ距離は、能登の東海岸から海上杏に佐渡を望んだ形であるといふことである。その能登の東海岸にある港、小木とか宇出津とか飯田とかいふ港から東に向つて航する和船は、佐渡の夷、赤泊まで、順風を待つて一齊に帆を卷き上げて出帆した。そして途中で風の方向がわるくなると、「千石積んだ船でさへ、風の都合で出て戻る、私とてもその通り」と小唄にもあるやうに、佐渡の島影がもう見えてゐるあたりまで行つてゐるにも拘らず、皆そこから元の港へと引返した。從つて能登の東海岸の小さな港は、いつも和船の帆柱でうめられるやうな光景を呈した。

これ等の帆船は、多くは中國あたりから北海道へ鍊を積みに行く船である。三百石積、五百積、さうした船は、裏日本の港々に碇泊して、山陰の諸港から珠洲崎の絶端をめぐり、佐渡からずつと北へ北へと航して行くのであつた。そして歸途は、到る處の港に鍊でふくらました縞の財布を空にしつゝ故郷の港へと歸つて行つた。

私は九十九灣を見に行つた歸りに、その帆船で埋められた面白い光景を小木港に發見した。小さな港は殆ど帆檣と船とで一杯になつてゐる。半島の東海岸を定期に航行する汽船すら入つて行くことが出來ない位である。海に面した旅舍の二階の欄干から見ると、銅色をした船頭の肌、束ね髪にした嬶の頭、船縁に危な氣もなく遊んでゐる子供、疊んだ帆布には暮い夕日がさして、港口の潮の早い脈が黑く碧く光つて流れた。

「もう今夜あたり立つて行くだ。四五日こゝに居るのでな」

かう婢は私に言つた。

そして風さへ能くなると、その時の朝であり夜半であり晝であるに拘らず、さうした和船は、一齊に帆をあげて出かけて行つて、朝起きて見て、あの多い船がいつ發つて行つたらうと思はれるほど、港が空しくなつたことなども珍らしくはなかつた。

田山花袋　山水小記

松　波

省營自動車奥能登線松波驛下車

奥能登線は穴水を發して川尻から山間に入り曾山峠を超えて鵜川に出で、それから海岸の波打際を通つて帆檣林立の宇出津港に出で、再び山間に入り、松波、鵜飼を經て奥能登の首都飯田町へ行つてゐる。この間山間以外の路線は海邊近く走るので富山灣を隔てゝ見る、水墨畫のやうな越中の山々や珠洲の東端の眺めがよい。

松波は古い聚落で、能登名跡志には「鵜飼より一里十六町上りの馬次也。本馬五十八文、輕尻四十一文、人足二十一文、家數三百軒餘あり。此郷の大村にて昔の城下なり。此村は松波常陸介というて畠山類葉の領地、六萬石の城下成し也。天正の頃謙信勢の爲に落城せり。城山は此の川向の松山なり。風景の地なり。此筋目というて福壽院といふ百姓あり。亦積寶山滿福寺といふ禪宗あり。大寺にて則常陸介位牌木像あり。その比菩提寺の時は、地方三百石寺領ありしなり」と記してある。

松波の次驛戀路は珠洲郡木郎村に屬し、能登名跡志には次のやうな地名傳說を乘せてゐる。

「いつの頃にや有けん多田の里に女あり。茂九郎の里に男ありて夜々行通ひけり。其頃は道も岨しければ磯傳なる淺瀨をたどりけるに月なき夜は女岩の端に篝を燒て待しとなり。又男ありて我戀の仇なるを恨み、或夜女をいましめ、篝火の所をかへて燒置けり。やさ男此ことを知らず渡りしに、磯の深みへ沈み死けりとなり。女も此事を聞きつゝ又身を投げて死せしより戀路村の名あり」と。

沖に辨天島、海岸に玄武岩が露出してゐる。

飯田町

省營自動車奥能登線能登飯田驛下車

能登半島の北端、珠洲郡の中央にあり、西北は一帶の丘陵で東南は飯田灣に臨み、人口二千五百能奥の首都である。古來珠洲郡内商業の中心地で海陸の便あり、物貨

の集散地として榮えてゐる。

寶立山を水源とする若山川の溪谷が海を埋めて沖積層をなすところに出來た聚落で、海岸は更に荒い砂丘によつて包まれてゐる。

街の形は海岸を通る街道に沿うて帶狀をなし、なほ若山川の溪谷から外浦に向ふ道路に沿うて延長するから全體から見れば丁字形をなしてゐる。

若山川は流程一四粁といはれ、珠洲平野數箇村を灌漑し、飯田三十町歩の水田を養ひ、町の北部を貫流して海に注いでゐる。昔はこの川に小廻船が出入して帆檣林立の賑ひを見せたといふが、今は見ることができない。

飯田港は町の海面五〇〇米の間で風波を防ぐ何ものもなく、且つ水も淺く船舶の碇繫に便とはいへないが內浦航路の要點となつてゐる。この海岸三崎村長手崎から木郎村赤崎に至るまで約一八粁の間は大彎曲をなして、その中に蛸島、飯田、松波の諸聚落が散點してゐる。七尾からくる小汽船は何れもこの海岸に寄つてくるのであるが、平直なこの海岸では風波を避けることはむづかしかつたらしい。しかし今は飯田穴水間に自動車が開通したので、往日のやうな海上難は避けられることゝなつた。

飯田町の成立については全然不明である。王朝時代の郡家所在地でもなく、戰國時代有力な武士が據つたといふことも聞かない。たゞ海岸道路に於ける足溜りで、また若山川流域の農產物集散地であつたため、かゝる不便な海岸でも港津として利用することを强ひられ、遂に殷賑を來したものといはれてゐる。

能登名跡志には「飯田、正院より二十四町、木馬三十一文、輕尻十九文、人足八文、家數三百軒許、二七の市あり、不殘商家也」とあり、二七の市は今も行はれてゐる。もとは物々交換に始まつたもので、賣品の種類により區域を定め、街頭の左右に陳列し購客の群集で町は埋まり俗に「市場にない商品は馬角のみ」といふほど盛んである。

旅館 森下、神德（二、三圓程度）

名物 いもがし、松茸砂糖漬

須須神社

飯田町から約一四粁自動車がある

三崎村字寺家にあり、今縣社で天津日子穗瓊々杵尊、美穗須々見命、木花開耶姫命、健御名方命、保食命、武甕槌命を祀る。社傳によれば天平勝寶中鈴御獄からこゝに遷座して、高座宮、金分宮の兩社とし、前者は男神、後者は女神で、社地は各獨立した丘に據つてゐるが、これを總稱して須須神社といふ。延喜式には須須神社は載つてゐるが、二座ありとはない。三代實錄の貞觀十五年には能登國高倉彥神に授位の儀があつたとあるが、これは式外の神で、高座宮の名と似通つてゐるから、後に須須神社と混同したものではないかともいはれてゐる。

文治三年義經が北陸通過のとき、この地の三崎沖で難風に遭ひ當社に祈願して災厄を免かれ、祕藏の笛と眞筆の詠歌を寄進したといふ。文明以後兵亂のために社殿は炎上したが、天正十四年前田利家が巡國の際田地五町を永代寄進し、慶長十九年には社殿を造營し、國家鎭護の祈念を凝すやうに命じた。また珠洲郡の總社として寬政七年までは御出御幸といふ儀式があり、每年八月朔日から同月十四日まで郡內を巡幸したと傳へてゐる。

この神社は能登地方の舊祠で、その創立は崇神天皇の御代といはれるだけあつて、古文書を多く見ることのできるのも當社が第一に推されてゐる。それによると高座宮とその社僧が各時代の豪族によつて、いかに崇敬されたかゞ明かとなる。

この社の境內は樹、椎、松などの古木に蔽はれ、金分宮の側には高く聳ゆる銀杏があり、社頭に參拜するものはこの銀杏の落葉をよく拾つて歸るので「三崎土產は銀杏の葉」といふ諺が遺つてゐる。また高座宮にも有名な御所櫻があり「珠洲の岬の四所御所櫻、枝は越後にその葉は佐渡に、花は大阪の城に咲く」と歌はれたものであつたが今は枯死して見ることができない。

高座宮は假殿で金分宮は本殿、釣殿、拜殿があり、國寶に指定された男神像一軀がある。

狼煙

飯田町から一六粁、自動車がある

西海村字狼煙は祿剛崎燈臺の丘陵のある所で、その部落は東が海に臨んで潮騷の音に明けては暮れる平和な漁村である。天保年間の能州日曆には「是(三崎村寺家)より一里餘、外海に狼煙村あり、此所に彼鳳至郡中居村の製にて、イギリス抑いふ大筒の大砲を村長預り居て、夷賊等不虞の防に備ふ」とあり北海の警備をこの出崎に置いたらしい。狼煙といふことは古への烽火の別名で、王

朝時代には海上警戒のためにそれらの設備をしたことが出雲や肥前の風土記に散見してゐる。

祿剛崎燈臺は能登半島の北東端にあり、明治十六年七月に建設された國立の燈臺である。燈臺の構造は白色圓形の石造で、燈質は不動白色光、燈の高さは七米八、水面からは四七米四、一萬八千燭光で三秒の明暗、光達距離十九海里を照してゐる。

狼煙から半粁手前に山伏山がある、海拔一七二米、金剛崎の背後に當り、山上に須須神社の奥宮がある。もと鈴ヶ嶽奥神社とも鈴奥大明神ともいはれた。三崎村寺家の須須神社はこゝから遷つたもので、周圍は鬱林が茂りその多くは暖帶性の樹木で、殊にアカガシを含んでゐるのが珍らしい。これらの森林により山の形が美しい圓塊狀をなし、近海を航行する船舶の目標になつてゐる。難船の舟人が權現を祈念すれば此の山に火が見える。また中古はこの山腹に大きな燈明臺があり、國守から一夜に油一升、燈心布三尺づゝ給されて航海者の助けとしたといふ。山伏山について能登路記は「日野大納言資朝公の一男阿新丸、父の仇を討ち佐渡の沖にて追手にかゝり、難儀に及びしを、三崎權現幼年の孝心を、あはれみ給ひて、山伏の姿となり、船中にて難儀を救ひ、此國へ伴ひ來り給ひて、此山に神隱れ給ひしより、山伏山といへり、又聞く義經の御内常陸坊海尊此處にて義經に別れて、仙人となり、此山に住ひて山伏の姿にてありし故、山伏山と云ふものもあり、亦三崎權現大社にて逆徒多く、此山の腰にありけるより、山伏山と云ふもあり、又渡海より山伏の頭巾のやうに見ゆる故よしもありて此說まち〳〵也」と述べてゐる。

大谷

半島の最北端狼煙から磯傳ひに約一四粁半自動車がある

西海村大字大谷は昔平大納言時忠が左遷された所で、船着き場を江ノ間といふ。時忠がこゝへ着いたとき一羽の鳥が立ち去つたので、それは自分を導くものであるとしその鳥の行きとまつた所に居館を建て文治五年二月廿四日六十歳で遠逝したといふ。その後に時忠の墓所と傳へるものがある。この時の鳥の出たところを今鳥川といふ。村には時忠の血緣が多數居り家の名を實名からとり、賴兼、賴光、賴正、兼政、友安、政賴、友古、助友、吉盛、國吉、助光、則定、末定などゝ呼んだといふ。

また義經が奥州へ下るとき能登を通つたといふことにより所々にその舊蹟が多い。これは義經が時忠を知つてゐたので、わざ〳〵時忠の死所を訪ねたものであるといつてゐる。

平家物語に「九月廿三日平家の餘黨の都の中に殘りたるを皆國々へ遣さるべき由、鎌倉より公家へ申されたりければ、さらば遣さるべしとて、平大納言能登國(中略)とぞ聞えし」とある。

源平盛衰記には「時忠能登國珠洲の三崎に着、立わたり眺むれば、岩間に生たる濱松の岸うつ波に顯れて、其根あらはに在けるを、心細くもうちとけて寢いらざれば我身の思ひになぞらへて、白波の打驚かす岩の上にねいらで幾世經ぬらん」とある。

時國

大谷から約一四粁、宇出津から二四粁
途中曾々木まで自動車がある

町野川の河口にあり、南時國、西時國とに分れてゐる。この地は往時大納言平時忠の子時國が能登に流謫されてゐたので、時國の名がやがて村名となつたものといひ、その末裔時國甫太郎氏は今なほ南時國に住んでゐる。當時の家來の子孫が代々小作人となり、廣い土地を持ち、大きな邸宅を構へ、今でも金箔で平家の定紋揚羽蝶を散らした襖などが用ゐられてゐる。

能登名跡志には「此村は下時國とて公領と私領入交りあり。川西より一里十町あり。本馬六十一文、輕尻二十三文、人足十八文。上時國村、日野氏右馬助とて一軒百姓なり、公領第一の高持にて庄屋也。此の先祖は昔元暦の頃、平大納言時忠卿此國へ配流有て、其嫡子時國といへる人の子孫の由、中頃まで此處を太刀村、晦日村といひ、不殘田地せし也。今の下時國村田地を分ちて、藤左衞門といへるを賴みて御當代になり出家せしより下時國とて私領になりし也。右馬助家に色々什寶あり。畠山殿時代書物等多く持傳へり。今も下時國不殘公領にて、右馬助高の内にて一村下百姓の家來分也。いつしかに太刀村、晦日村を此家名に呼び、今は時國村といへり、上時國、下時國、大川、曾々木とて別れてあり。御收納藏あり。高田寺とて眞言宗あり。時國兩家の菩提所なり。車の場とて同宗の小庵あり。氏宮八幡宮に、八月十六日毎歲祭禮には歌舞妓あり。曾々木といふは町野川の湊にて、少々商家等もあり。下時國村入交也。藤左衞門とて

右馬助別家山廻役あり。日野氏なり」と記されてゐる。

現在の時國家の屋敷は五四三〇平方米、建坪は九〇六平方米の大いさであるが、元祿八年に國家から代官に屆出でた文書によると母屋は文明十五年建造にかゝり、桁行二十四間、梁間十間、臺所は天正十八年改築の三間十一間の庇、その他土藏八間三間半、酒藏七間四間、馬屋十二間六間半、稻藏九間八間とあるから、總建坪一五八五平方米の時代もあつた。

輪島町

輪島驛下車

日本海に突出する能登半島の尖端鳳至郡の西北部にあり、奥能登第一の都市で金澤、小松に次ぎ人口約一萬五千を數へる。

東西南の三方は山を繞らし、北方に行くに從ひ、次第に傾斜して沙濱となる。東西に小丘があり、西にあるのは鳳來山（觀音山）東にあるのを町山といふ。鳳來山の山嘴は更に延び、天神山の斷崖をなして海に迫り輪島灣の岬角をなしてゐる。輪島川は市内を貫流してその沿革は能登名跡志によれば次のやうである。

鳳至、河合、海士町、輪島崎にて家數千軒餘りあり。是四ケ所を輪島といふ。昔鷲の惡鳥住みしより鷲魔の名あり。順和名抄などにある大屋の庄小屋の湊とは此所なり。又東鑑に能登國大屋の庄へ長谷部の信連を遣すとあり。又源平盛衰記にも、能登國大屋の庄を信連に賜るとあり。何れにも其頃は此輪島は信連の領地にて、則爰に卒しありし也。廟所は河井町川向の、山岸村の中頃十村役せし遠藤氏田地の中にあり。盆中は長家より代參燈籠の手向等あり。則城跡は同じきつゞき宅田村といふにあり。今も地名に一番町抔とてありて城下の時氏神住吉宮などあり。其後に城地を穴水へ移せしと也。親の湊へ漂ひ來て「浮草や水によるべの咲き所」。鳳至町、大屋の庄にて川の西に在りて、家數三百軒餘あり。河合町は河原田の郷に在り、川の東也。

家五百軒餘あり。間に長四十八間の橋ありて町の端とす。此川源は市阪村奥山より一筋流れ、其外所々谷水落入し、能野川とも河原田川ともいへり。鳳至川と合流して、湊は數百艘の船夏中不絶、小屋の湊とて繁昌也。此輪島は國府同事の所にて、諸商に便なく、四九の日市あり。中頃まで郡奉行在住あり。今も御鹽代官三人、山廻り役一人在住あり。御武具土藏御收納藏は河合にあり。御高札は鳳至にあり。兩町に肝煎あり。町に畠や、山形、久保などとて古き船持の者あり。河合町若恩屋とて、利家公御腰懸られし筋目あり、鳳至町御印物頂戴せし鍛冶十三軒あり。輪島庖丁刀小刀の始也。其外名物多し。輪島索麪、堅地漆器、慰斗鮑類、海草の產名物也。

輪島港は輪島川の海に注ぐところにあり、東西約一〇〇米南北約五〇〇米ばかりで、港口は狹く、水も淺いので大船の出入に不便なため漁港修築工事が行はれ、堤防ができ、内港は浚渫し、礁に二萬八千平方米の荷揚場が造られた。能登の北岸の漁業にはこの港が隨一の根據地で、舳倉島、七ツ島、珠洲岬、皆月沖方面で獲れた魚類は何れもこの港に陸揚げされる。その主なものは鯛（九萬六千圓）、鯖（六萬二千圓）、鰤（一萬一千六百圓）、鱈（八千四百圓）、鰯（七千二百圓）、鮑（三萬六千四百圓）等である。

輪島町はこの川の流出した土砂の沖積作用によつて出來たもので、商工區域の輪島本部（河井及び鳳至町）と漁業區域である輪島崎町（西方海岸一帶）と、その後中間に侵入して來て二つを接續する海士町から成る複合部落である。全體の街形は灣の形に從ひ、別に穴水街道と門前街道とに沿うて深く南方に延び、西は天神山丘陵によつて風威を防いでゐる。

旅館　富士屋、鳳來館、川端、廣谷（一、三圓程度）

名物　輪島塗、袖餅子、乾鮑、礫草、索麪

輪島塗

輪島漆器は全國的に聞えたもので「塗は輪島か輪島の塗か」と謳はれ年產額三百二十六萬一千八百圓に達してゐる。町民の生活資源は殆んど此の漆器に負ふほどで、輪島の人々は何より漆器を賞められることを喜ぶといふ。

その起原は異說があつて詳かにすることができないが五百餘年前紀州根來寺の僧が輪島の垂蓮寺に來て、同寺の膳椀などを造つたのに始まるやうである。その後この

地にその髹漆法を習ひ修めるものが數十名に達し、文明八年に建立された重藏神社講堂の棟札を見ると塗師三郎次郎、定吉なる髹工の名が記されてゐる。なほ同神社に傳ほる塗裝飾を施した神輿には享祿四年辛卯六月に再興したことがその底板に記されてゐたといふから輪島塗が約五百年前に存在してゐたことがわかる。

輪島塗は初めは朱塗ばかりであつたが、その後黑塗を創め、また種々の改良工夫を加へたが、萬治年間にはまだ根來、薩摩、會津の諸漆器と肩を並べるほどの信用はなかつた。しかるに寛文年中に偶然地の粉といふ黃土を發見してこれを塗料の下地に使用し、堅牢無比の製品を產出するやうに至つた。この地の粉發見に關しては重藏神社の記錄によれば「漆器を作り百方に賣りあるかせしに、大神敎へ給ひけるは、土器殿の邊の土を燒きて、漆に調和して用ふべしと託し給へり。卽神託の如くにして造るに、塗堅固にして他製に勝る」とあるもので、この黃土を塗料の下地に使用するやうになつてから他の模擬し難いものとなつた。爾後二百五十年の間不斷に採取したため殆んど盡きはてようとしたので、同業者間に大恐慌を來したが、幸ひに小峰山に同質の黃土を發見して今日に至つてゐる。これより先、元祿、正德の頃には已に輪島塗の販路が遠國に及び、塗師屋覺兵衞その他多くの優秀な漆工が輩出した。かくて漆器の地質は堅牢になつたけれど、未だ上塗の模樣に就いては工夫を凝らす機運に至らなかつた。享保年間に三笠屋伊平といふものが、その得意先の松前から歸る途中、彫刻の技能のある六部を連れ歸り、二箇の硯箱に唐草模樣を彫刻させた。土地の大工五郎兵衞（後ち館順助と改名）がこれを見て大いに憤り、鑿の刄先を尖磨して、彫刻にやゝ意匠を加へ、更に其の子雅水を遣して繪畫を學ばせ、遂に漆器に花鳥人物の模樣を彫鏤し、その中に漆を敷き金箔を壓貼し、それが乾燥してから紙片で表面を拭へばよく形が顯れてくる。これが沈金術發明の根元である。その後諸種の鑿を案出して工夫を重ねます〳〵精巧なものが出來、遂に今日の隆盛を來したのである。文政年間には會津の安吉といふものが蒔繪を傳へ、更に舟掛宗四郎は明治三十年に漆器に象眼を施す特許を受け、大正三年には久保叶が木目浮出塗を發明した。

營業の組織は分業法でこれを塗物、椀木地、指物、檜物、沈金、蒔繪の六つに分けてゐる。輪島漆器は需要

者を待つてから、製作するもので、その原料も裝飾も一々註文に適應するやうに造らせなければならぬ。從つて塗師は他の五職にそれ〳〵適したものを造らせ、たま〳〵註文の閑散なときは自己の考案にかゝるものを製作して向上を計つてゐる。

椀木地の原料は鳳至、珠洲の兩郡から採り欅で造り、その製法は伐採後二三箇年以上も放置し、全く乾燥してからこれを截斷し粗製の型を造る。

指物の原料は椀木地と同じく鳳至、珠洲二郡より產出する羅漢柏で、能登では檜といつてゐる。これを十分乾燥させて板とし、鉋削截斷して所要の形に組上げ木製の釘止をなして製作する。主として膳、箱、盆類などであるからこれを角物といつてゐる。

檜物の原料は總て檜で多く津輕地方から輸入し、その製造方法は板材を浸水させた後で彎曲し、底板を篏め込み、木製の釘で定着させるもので飯櫃、湯桶、盆類をつくるがその需要は割合少ない。

塗物の原料である漆液は、從來殆ど鳳至郡內から採つたもので間にあつたが、近來は加賀、越前、大阪、名古屋、奧州また支那方面から輸入し、日本漆八分支那漆二分の割合である。製法は種類にもよるが、その一例を擧げれば素材の木地を直して仕上げをし、極上漆を詰めて乾燥しその表を滑かにし、鮫皮及び木賊で磨き、地の粉を生漆に混和して全體を塗上げる。この作業を總身といふ。その後乾かして砥石で研き、生漆に米糊及び一遍地の粉を混和したもので塗上げて一遍地塗といふ。これを乾かして研いて二遍地塗となし、更にこれを研ぎ、漆と砥の粉とを混和した中塗漆又は錆といふもので凹凸のないやうに塗り、なほ拭上げた後上塗をして仕上をする。この作業中木地拵から二遍塗までを下地といひ、工場內で行ひ、中塗と上塗とは必ず倉庫內でし、これを塗上げれば直ぐに塗師風呂といふ箱に列べて乾燥する。以上の方法は大略で普通品は六七十回塗、高級品は百回塗、最少限度でも三十回位は塗る。從つて堅牢無比になるが同時に價格も廉くないわけである。

沈金の原料は金箔で塗上げた漆器に下繪を施し、鑿で淺く彫り、薄漆を敷き金箔を壓して仕上げる。

蒔繪の原料は金粉及び繪具で、製法は塗上げた漆器に下繪を施し、漆を着けた毛筆で繪を寫した後、金粉又は繪具を敷き、乾かした上、研ぎあげて製作する。

重藏神社

輪島驛から五〇〇米

河井町にあり、縣社で天冬衣命、大國主命他十五神を祀る。社殿によると崇神天皇の御代、大彦命が初めて神託により神宮を造らせ給ひ、神地神戸を寄附せられ、垂仁天皇の時また田地の寄進があつたといふ。天平勝寶八年五月には僧泰澄が當社に十二坊を建てゝ十藏大權現または重藏大明神と稱した。長谷部信連が地頭職になつて入國以來尊信あつく祈願所とし、銅瓶、武具、金穀等の寄進があつた。永仁四年有連の建てた本殿は特別保護建造物に指定されたが、明治四十三年に燒失した。現在の本殿は原形と同じく模造したものである。

社寶中菩薩面は明治三十三年四月國寶に指定された。木像で面貌豐麗鎌倉時代の作である。これは舞樂に用ゐられた假面で、色彩は剝落してゐるが、古雅な感じがする。

大祭は八月二十三日が宵祭で、切籠その他の奉燈で賑ひ、二十四日に渡御祭が行はれる。

如月祭は御當祭ともいひ最も古典的な祭禮で二月二十日から三月七日まで當年四十八歳の氏子が奉仕し人身御供の式を行ふ。

輪島の海士

海士は定住の民ではなく、その生活の資を得るところは輪島町の北方海上に横はる舳倉島と七ツ島であるから夏から秋へかけては島で暮し、潜水に不便な冬になると輪島町の海士町に歸り、或は輪島河口の渚に漁舟を繫いで水上生活をなし、或は內浦海岸に出て運搬業に從ふ。警察も學校も僧侶も總て彼等の團體が移住する跡を逐うて轉々としてゐる。文化的施設を有つ遊漁の民とでもいひたい。

海士の家屋は海士町と舳倉島とにあり、海士町にあるのを本住としてゐる。昔は掘立小屋ばかりであつたが、今は多くは板葺または草葺の平家造で、悉く妻入となつてゐる。入口の外に一箇の小窓があり、一家のうちに數戸が同居をしてゐる。舳倉島へ移ることは島渡といひ、毎年六月上旬に渡り、十月下旬に歸つて來る。そしてこの期間中は假住生活の時期であるから、若し本住地の輪

島へ來ることがあつても、決して自分の家へ入ることなく、必ず舟の中に起臥する習慣である。彼等が本住地の屋內に生活することは甚だ稀で、年中殆んど水上の生活をしてゐる。その貧乏な者は生涯舟を家とし、船中に生れて船中に死ぬものさへある。

海士が普通の服裝をするのは祭禮と盂蘭盆の時期のみで、ふだんは質朴な木綿の筒袖刺子を着てゐる。女子は帶の端を前方に挾んでゐる。天氣のよい時は主に草履を穿くが、雨が降れば多くは跣足のまゝ歩き、傘や笠を用ゐないものも尠くない。夏は大抵裸體なのを普通とする。

潜水漁業を主とする海士の生活にとつて女子は生活の原動力であり、若者にとつては慰安であり好伴侶である。女兒が出來れば赤飯を焚いてお祝をする。幼時から海に馴らされ潜り專門に教へこまれる。海中へは十數尋から二十尋の深さまで潜つて活躍する。その鍛錬された身體は生々として均齊の發育を遂げた均齊美がある。女子は多くは天神髷に結ぶが潜水のときは髮を觀音髷に改め、鋼鐵の肌を露し、サイジといふ男子の用ゐる帷一つとなる。サイジは綿布を二重とし、長さ一尺二三寸で色絲を以つて刺繍を施してある。また近年は護謨絲の眼鏡をかけるものがある。觀音髷は潜水の時に限り結ぶもので觀音の姿になれば悪魚毒蛇が近くことがないといふ迷信によるものである。また貝金といふ鐵製で一尺四五寸のくの字型の棒を持つてゐる。これは鮑をとるほか、護身用とするもので、初め前田大納言から賜つたといふ傳說があり、大字の刻印が施されてゐる。

鮑取りにこの貝金を腰に挾み、二十尋內外の深さに入るときは腰に鉛錘をつける。深海と磯草とりには腰から舟に綱をつける、これが生き綱で、夫以外に持たせぬことになつてゐる。

海女の潜水による漁獲高は昭和十年の統計によれば、鮑一萬四千五百貫三萬六千四百圓、榮螺五萬貫七千五百圓、和布八千貫二千四百圓。磯草三百貫三百圓、えご一萬二千貫一萬七千圓、かじめあらめ二萬貫二千二百圓、計六萬五千八百圓。

海士が漁業に出るときは毎朝日の出を待つて海岸に勢揃ひをなし、一艘に四五人づゝ乘込み、三十艘內外の船が舳艫相銜んで海に出る。かくて女子は身體に繩を結んで舳艫相銜んで海に出る。かくて女子は身體に繩を結んで九尋或は十五尋の海底に潜り、生え茂る海藻を押しわけて鮑を採る。船中では男子が櫓を操りつゝ合圖を待ち

海女が呼吸をしようとするとき息繩を引けば、直ちに引上げて海面に浮かばせ、とつて來た鮑をカチカラ桶に入れる。

礫草は鮑より深く二十尋以上に沈み、刈り取つた礫草を悉く四肢に纏ませてゐるから二三人の男子が全力を盡して引上げるのである。かやうにして先發の海士は正午に上陸し、午後には別隊がこれに代つて日沒まで働く。海底には鯛、鱸、鯛などの魚類が身邊に游泳してゐるが海女に對しては別に危害を加へることはない。海女が潜水をするのは十八歳頃から四十四五歳までゝある。

海士の先祖は永祿年間筑前國宗像郡鐘ヶ崎の海士で又兵衛といふものが、漁船三艘に乘り、男女十二人で能登國羽咋郡に漂着したが、赤崎千ノ浦邊に居て沿岸の島々で鮑を獲つたのに始まると傳へてゐる。その後鳳至郡光浦の北端に移住し、現に海士屋敷といふ地名が遺つてゐる。しかし此の地方に海士のゐたことは已に萬葉集に表れてゐるから、筑前から漂着したといふのはその後のことゝ思はれる。天正中藩祖前田利家が領内を巡視したとき、熨斗鮑を献じたので舳倉島と七ッ島で魚介を獲ることを許され、寛永年間には男女百五十人となり、慶安二年には輪島の地所一千歩を居住地として貰つた。現在の海士町の大部分がこれである。

海士の氣性は勇猛で體質は極めて强健、男女ともに軀幹が大きい。鬚は少く女子に美人が多い。言語習俗は地方人と異なる所が多い。男女關係は嚴格な一夫一婦主義でこれを冒せば公衆の前で可なり慘酷な制裁を受けなければならないので、一般の風儀の亂れてゐるのに比べて姦通などは殆んど無いといふ。

結婚は女子が十三四歳、男子が十四五歳になれば各々任意に配偶を定める。また生活能力のある頃となれば、女の友人が男を探して世話するのが多い。さうなつてからは晝夜の別なく相會して談笑に餘念がない。これを道約束といつてゐる。もしその間に子供が出來れば兩三年の後公然と結婚して夫の家に入る、概して早熟早老の風がある。

女子の働きは生活費の基をなすので、女子が尊重されてゐる。しかし女尊男卑の傾向はなく、夫婦相和して海士全體の團結力を增してゐるといふ。

海士が舳倉島から引揚げた後は、一旦輪島の本居へ歸り、その十分の四ぐらゐは七尾灣の內浦沿岸に囘航し、

貯藏して置いた蠑螈、もだつ、その他の鹽物と米麥豆などの農産物と交換し十二月に歸鄉する。これを瀨廻りといつてゐる。

七ッ島

輪島港から海上北二三粁五

七ッ島は輪島の北にあり、今昔物語の鬼の窟屋島で大島(小屋島)、雁股島(矢筈島)、荒神子島、甑島(烏帽子島)、御厨屋島、赤島、龍ヶ島(鵜島)の七島である。大島が最も大きく周圍一粁半、海拔三〇米餘、半腹以上は一面に萱草が茂り、岩根を横貫する四〇〇米の大洞穴があり奇觀を呈してゐる。

七ッ島は輪島と舳倉島との中間にある避難所である。大島には眞水が湧き、輪島海士町漁業組合で建てた海難避難所がある。輪島の海士は三月頃岩海苔や若布を取りに行き、六月頃舳倉島に渡るまで、大島、御厨屋などに移住して十月まで鯛、榮螺、礫草、飛魚などを獲る。

藩政時代には漁權を海士が持つてゐた關係と舳倉島への中繼地として島は殆んど海士が獨占してゐる。

舳倉島

輪島港から海上北四八粁、發動機船で約四時間途中に七ッ島の奇勝がある

島の形は南西から北東に長く、やゝ楕圓形に延び周圍六粁島內は一帶に低平で、最も高い所でも一三米ぐらゐである。漁民の住家は南東面にあり部落の北西に續く所は蘆草が一面に繁茂してゐる。南岸は低礁があつて所々に入江があり舟を泊められるが、北岸は斷崖が海に迫り怒濤脚下を洗ひ、奇勝に富んでゐる。この島は潜水夫の調べたところによると、全部一枚岩から出來てゐる島で、その附近は遠淺であるから、若和布、荒和布の海草が寸隙もなく繁殖し、大曳などの定期漁業には適しないが、舳倉島、七ッ島及び珠洲郡高屋に屬してゐるヨメグリといふ暗礁が三つ鼎立し、この間數十浬は一枚の大岩石で深さ十七尋から五十尋なので、鯛や鰯の群棲には最も適してゐるといふ。

島の中央部には幅廣い平原があり、若竹、萱その他の雜草に覆はれ鬼百合、山百合などがある。昭和九年に三町歩ばかり開墾して耕地とし、蔬菜の自給自足をすることゝなつた。

海士は六月上旬に學校無電警察及び醫師僧侶と共に大擧して渡り十月上旬に歸るのであるが、昭和六年に燈臺が出來てからは次第に越年者が增して來たやうである。

島内に神社が六箇所祀られてあるが奥津比咩神社が最も大きく、延喜式内の社で島では大宮と呼んでゐる。寺は淨土宗法藏寺が唯一の寺院で海士の葬儀には會葬の海士が大聲を張上げて涕泣といふよりは寧ろ叫喚する風がある。昔は別に泣女といふものを雇入れて、その落涙の程度に五合泣、一升泣の區別があり、それによつて謝禮金が違つたといふほどで、これは支那又は朝鮮の風俗に關係があるといはれてゐる。

舳倉島は萬葉集では沖津島といひ、大伴家持の「於伎都之麻、伊由伎和多里与、可豆具知布、安波流多麻母我、都々美与夜良牟」の歌がある。また今昔物語に能登國鬼寢屋島語に海人の鮑ふる物語を載せ、光ノ浦から鬼の寢屋へは一日一夜航走し、更に猫島へは一日一夜を航走するといふのは前者は七ツ島、後者は舳倉島を指すものであるといはれてゐる。

今は昔、能登國の奥に鬼の寢屋といふ島有り。其の島には河原の石の有る樣に、鮑の多く有ければ、其の國に光島と云ふ浦有り、其の浦に住む海人共は、其の鬼の寢屋に渡てぞ、鮑を取て國の司には辨ける。其の光の浦より鬼の寢屋は一日一夜走て人行なる。亦其より彼の方に猫の島有なり。鬼の寢屋島より其の猫の島へは、亦負風一日一夜走てぞ渡るなる。然れば程を思ふに、高麗に渡る許かり程の遠さは有にや有らむ。然ども其の猫の島へは□□にて人不レ行ざるなり。然て光の浦の海人は、彼の鬼の寢屋に渡て返ぬれば、一人して鮑萬をぞ國の司に辨ける、其れに一度に四五十人渡ければ、其の鮑の多さを思ひ可レ遣し。

能登國鬼寢屋島語　今昔物語

鴨が浦

輪島縣から一粁五

鳳至町の西端に横はる丘陵鳳來山につゞく天神山の崖下に、奇岩怪石が低く高く海中に現はれたところを鴨が浦又は鴨浦といふ。砂岩から成る陸地を海水が浸蝕してできたもので、岩石が堆積してゐる場所は東西四百米、南北百米ほどあり、背後に百米ばかりの斷崖を負ひ、そ

こからは輪島港の全景や西に光浦、北に七ツ島を見はるかす。

輪島町が三箇年を費して開鑿した觀光道路は斷崖の下を通つて岩洞を貫き袖ケ濱の海水浴場へ連絡してゐる。

鴨が浦の中央部沖に面したあたりは巨岩が突立ち、水が深く海水が出入してゐる。これを利用して夏季は鯛、ちぬ、鰤、ゑとり、などを放飼して天然水族館としてゐる。附近の岩礁中からは帆立貝やあさりに似たやうな貝の化石が出る。能登名跡志にも「袖の濱より輪島崎へ濱傳を、鴨浦とて絶景なり。猫の地獄などいひて面白き所ありて、輪島より遊山所なり此浦傳ひ鹿磯より輪島まで五里許の間、難所といへども風景なり。谷内の清水に口の濁を濡し、岑吹き越ゆる靑嵐に袂の汙を乾し、とわたる舟の絶間なく眺めありて」云々と記されてゐる。

鴨浦の西に連り天神山の西面山脚に當り、觀光道路が通つてゐる一帶の海濱は袖のやうに長く、波穏かで色澤の美しい五色石が多く錦濱の名がある。

石川縣の方言

あくたいな　（いたづらな）
いらして　（左樣なら）
いじくらしい　（うるさい）
おくまつしい　（お止しなさい）
かなしい　（耻しい）
こすごい　（恐ろしい）
だら　（馬鹿者）
はいだるい　（迷惑だ）
へいろくな　（滑稽な）
やくちやむない　（飛んでもない）
あてがへな　（よい加減に）
いくまつし　（行きなさい）
おせど　（庭）
かんじよば　（大便所）
ぎやんど　（蛙）
しり　（汁）
なしも　（否）
めとにした　（侮辱した）
りくつな　（感心な）

遊覽日程

市内（バスで約二時間）

金澤驛—持妙院—尾崎神社—尾山神社—香林坊—兼六園—東西本願寺別院—金澤驛

市内（バスで約五時間）

金澤驛—尾崎神社—尾山神社—香林坊—犀川大橋—大乘寺—天德院—寶圓寺—兼六園—淺野川大橋—心蓮社—卯辰山公園—武藏ヶ辻—東西本願寺別院—金澤驛

市内（徒歩及び市電による）

金澤驛—持妙院—東西本願寺別院—卯辰山公園—（電車）—兼六園—（電車）—天德院—大乘寺—野田山—（電車）—香林坊—（電車）—尾山神社—（電車）—金澤驛

白山登山

第一日　上野又は大阪京都—（車中泊）

第二日　金澤（市内遊覽四時間）野町—（電車）—（加賀一ノ宮—白山比咩神社參拜一時間）—（電車）—白山下—（バス）—市ノ瀨泊

大阪京都方面からは寺井驛に下車し電車で加賀一ノ宮に行く。

第三日　市ノ瀨—（徒歩六時間）—室堂—頂上—大汝頂上—室堂泊

第四日　室堂—頂上日ノ出拜—室堂—（徒歩四時間）—市ノ瀨—（バス）—白峯—（電車）—白山下—（電車）—加賀一ノ宮—（電車）—野町—金澤—（車中泊）

第五日　上野

北陸溫泉めぐり

第一日　上野—（車中泊）

第二日　金澤（市内遊覽）—（汽車）—粟津—（電車）—粟津溫泉—（電車）—邦谷寺—（電車）—山代溫泉—山中溫泉泊

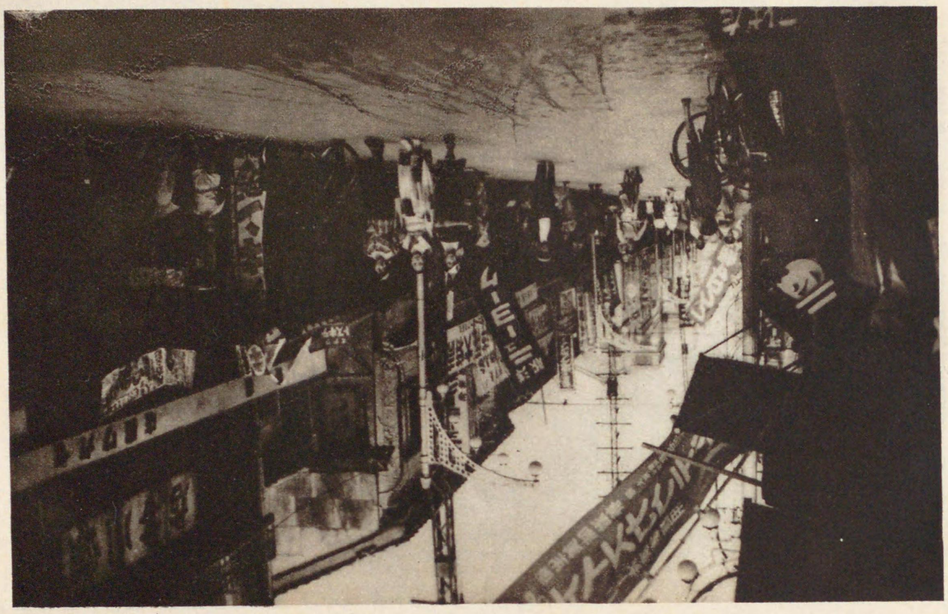
第三日　山中溫泉—（電車）—大聖寺—（バス）—吉崎御坊—（バス）—大聖寺—（汽車）—動橋—（電車）—片山津溫泉泊

第四日　片山津溫泉—（バス）—動橋—（汽車）—津幡—（汽車）—和倉—（バス）—和倉溫泉—（バス）—和倉—（汽車）—津幡—（車中泊）

第五日　上野

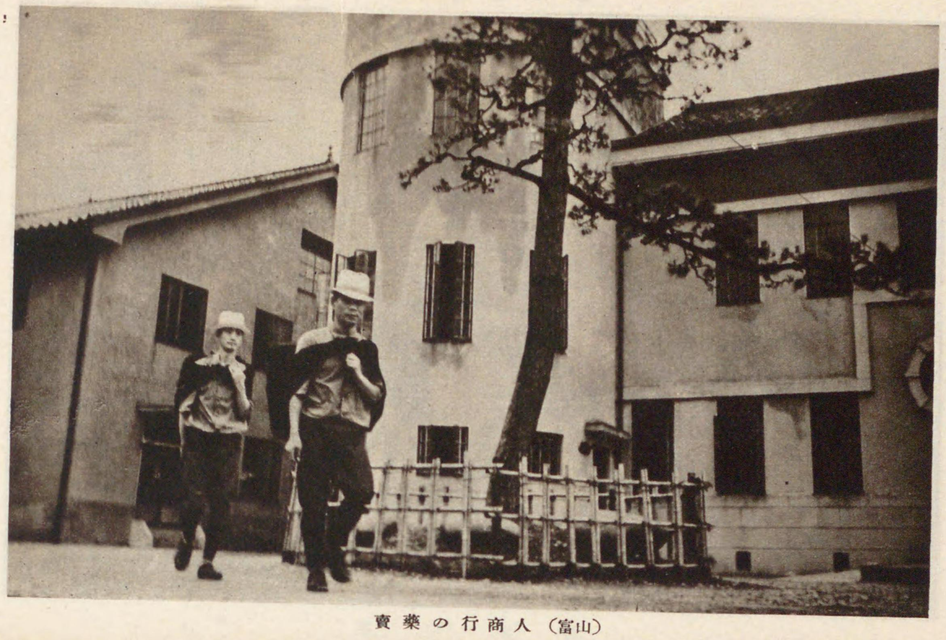
富山を中心に

恩　田　車



舞山滿滿工舞

舞山滿滿



（富山）人商行の藥賣

立山彌陀ケ原スキー場

立山の景百合

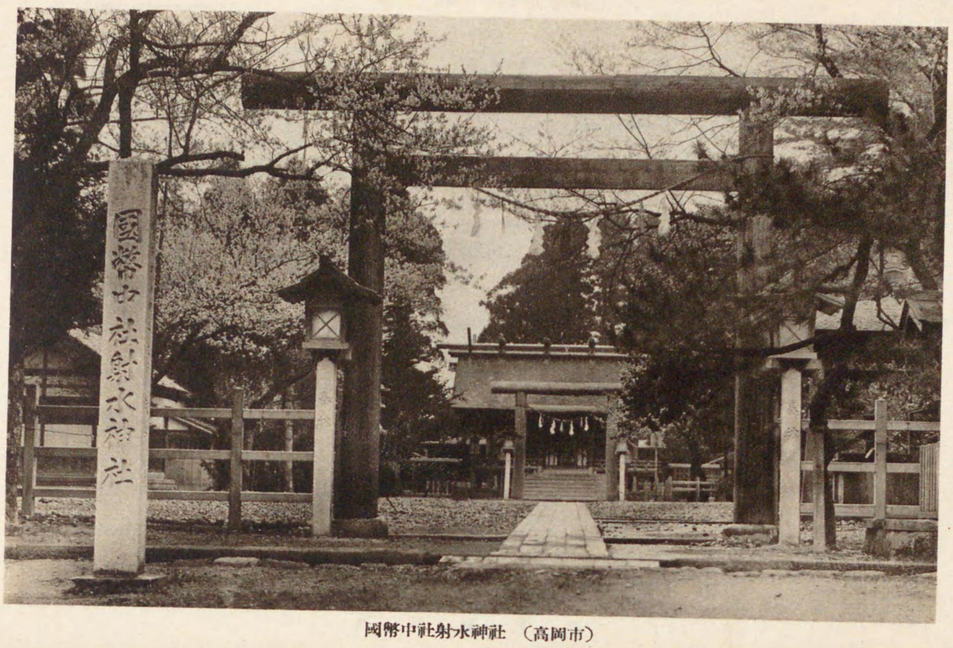
海鼠ノ山立

嚴本社神山雄頂々山立

高　岡　市　街

高岡瑞龍寺

瑞龍寺（高岡市）



國幣中社射水神社（高岡市）

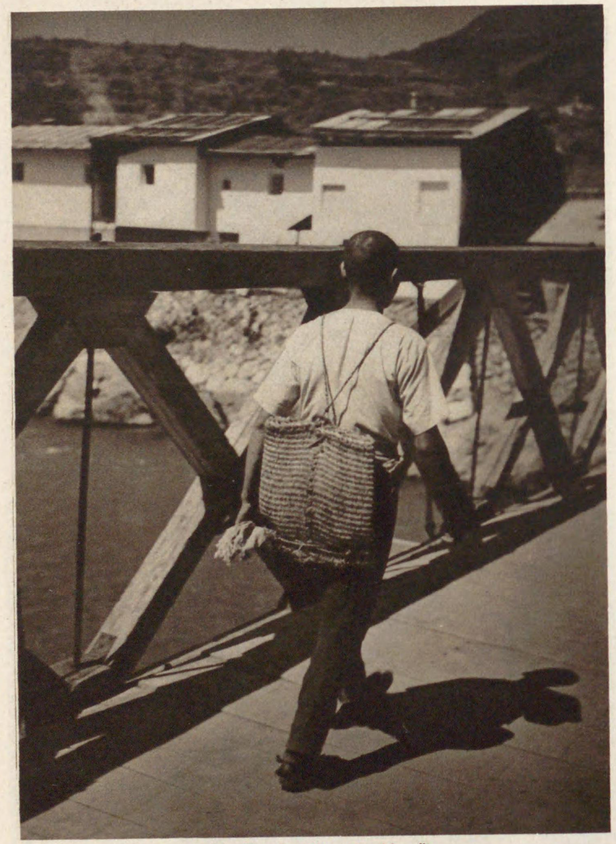
國幣小社高瀬神社

伏　　木　　港

島　尾　遊　園　地

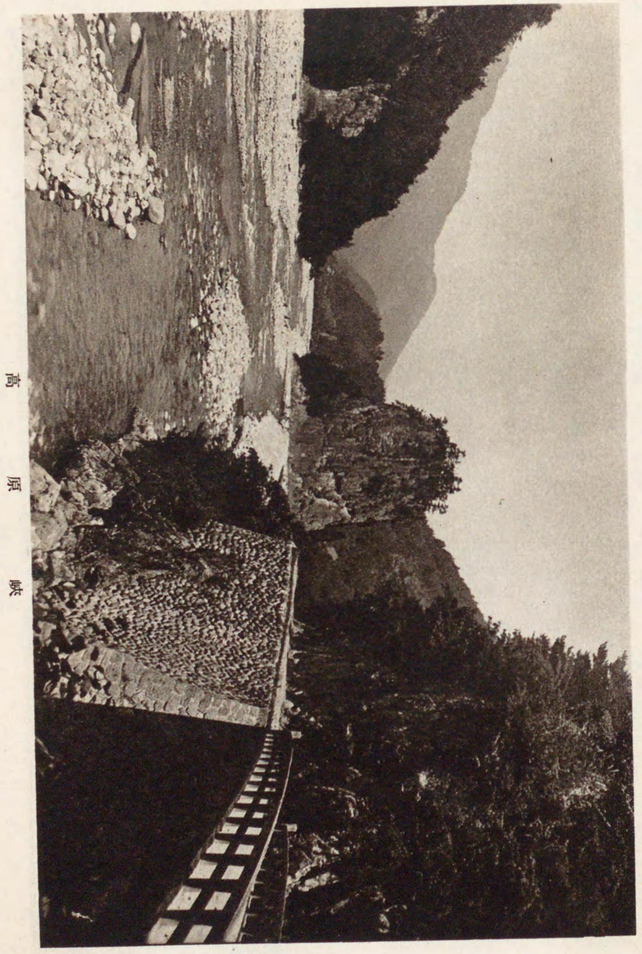
氷見の鮪漁

城端ラヂウム温泉



飛驒船津の風俗

五箇山の養蚕屋前



高原峡

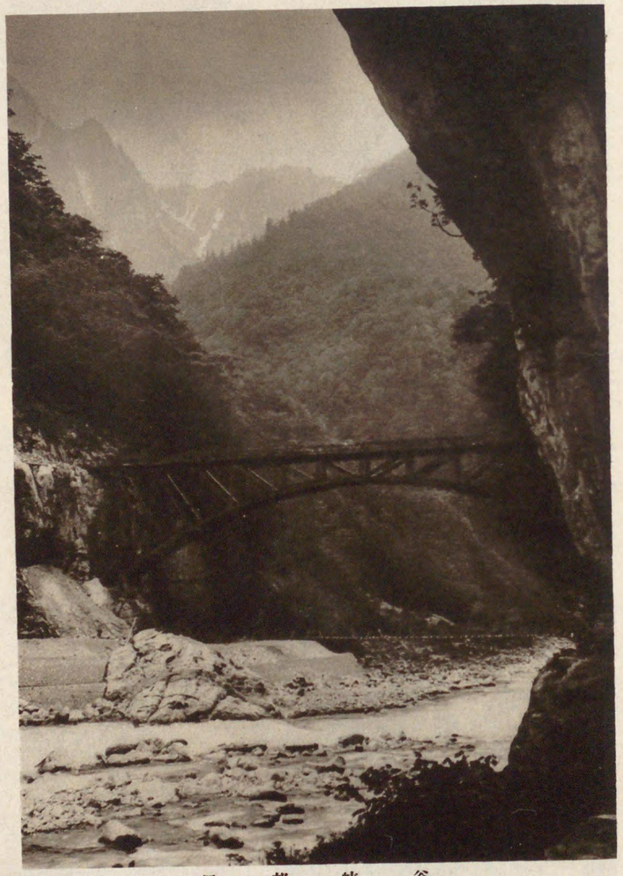
八尾の風俗

船　津　町

魚　津　城　趾

魚津の鯛網

宇奈月温泉附近のスキー場



宇奈月温泉

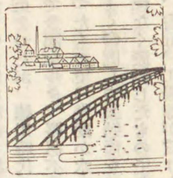
黒部峡谷

鱒釣温泉の天然浴槽

黒部峡谷廊下

谷峡の近附泉温釣鐘

北陸本線に沿うて（富山とその附近）



富山市

富山縣庁在地

富山市は越中の首都であり、加賀前田氏の支藩が置かれて城下として發達してきたのであるが、古くから越中富山の反魂丹と謳はれる有名な賣藥の產地であり、藩政當時から獨特の行商組織によつて廣く全國的に顧客を持ち、その名が全國に知られてゐる。

古いお城下町だけに市中を貫いてゐる電車も濠端に沿うて曲折してをり、その停留場の名にも總曲輪などといふのがあるやうに、富山城は石壘や濠を僅に遺すだけであるけれど、封建の名殘が多分にある。

この地は古くは藤居山といひ、その庄を藤居庄、その邑を藤井村と呼び、眞宗の藤居山富山寺があつた一寒村であつた。富山の名稱についてはいろ〳〵の傳承があるがその寺號を採つて富山と名づけたといはれてゐる。永祿の頃水越越前守重勝がこゝに築城してから次第に城下町の體裁を整へ、文祿四年に前田氏が領してからは江戸時代を通じてその支配下にあり、寛永十六年には利常の次男前田利次が越中十萬石を分けられて入城し、前田氏の支藩として子孫相繼ぎこゝに居城して維新に及んだのである。

市の西北部には遠く飛騨の山地から百五十粁餘を流れて、富山灣に注ぐ神通川が緩かに貫いてゐる。そして市街は越中平野の中央部にあたつてゐるので四邊は豁然と開け、僅に奥羽の丘陵が西方に低い寢姿を見せて隆起してゐるだけである。

市の東南方を望むと年中雪をいただく立山連峰の雄容が空を衝いて越中を象徴するかのやうに浮き出し、南には遠く飛騨の山々も目に入る。

市街の面積一九・九五平方粁、人口九萬五千。富山縣々治の中心地として縣廳をはじめ諸官署、銀行、會社等が多く、歩兵第三十五聯隊が置かれ、藥の本場だけに富山藥學專門學校もあり、また市外大廣田村には富山高等學校がある。

舊城趾の大手門附近を總曲輪といひ、官衙、會社、商店等の大きい建物は殆んどこの邊に集つて市内の目貫通りになつてゐる。櫻木町は富山の花街で、俗に櫻町といひ二つに分れ、一口に東、西と呼ばれてゐる。

市の產業は古來天下に知られてゐる賣藥が唯一の特產であり、第一の重要產物であるがその他に絹織物、ラミー紡績、製綿、製肥、清凉劑等の近代的工業も最近大いに發達してきた。

また建具、指物、漆器、鐵器のやうな手工的工藝品も產額が相當ある。

富山は大都市から遠く、東に親不知の難所、西に倶利伽羅の嶮難があり、昔は加賀へも越後へも甚だ不便であつた。いきほひ商業も振はずたゞ住民の物資を供給するに止まつたが、德川時代の商人は一足の草鞋と一雙の脚絆で全國を歩き、堅忍不拔の精神によつて今日の基礎を作つたもので、幾度か水火の災にかゝつたが少しも屈せずよく奮鬪して勤勉產を治めて富山縣人の傳統的特性を遺憾なく發揮したものである。近年商運は開け、更に銀行、會社、工場等が設けられ、海外貿易も盛んになつた。これらは一に時勢の進運とはいひながら、富山の商人が永年にわたつて鍛錬された氣風があづかつて大いに力ありといはれてゐる。

北陸中でも富山縣は面積が狹い割に財政は豐かで、商業の盛んなのと特に水力電氣事業に於ては天下に冠たるものがあり、巨商や富豪も多い。

旅館 富山館、富山ホテル、舟山館、堀佐、竹島屋、（三、四圓程度）

料亭 富山ホテル、八清樓、奥田屋、村井樓

名物 獅子頭、富山人形、月世界（菓子）、浮城（菓子）、螢烏賊、有磯煮、鮎の粕漬、鮎すし、烏賊の黒作り、栗饅頭

富山城趾

富山驛前から市内電車により縣廳前下車

富山城は富山市總曲輪にあり、今から約四百年前の所謂戰國の世の天文年中に水越越前守勝重が築城したのが始めで、越前守はこゝにゐる中に名を改めて神保越中守長職といひ、その後神保氏三代はこの城に據つてゐたのであるが、天正四年上杉謙信に攻略された。尙天正四年といふと京都では信長が安土城に移つた年であり、越後

の謙信は進んで京に上らうとして惜しくも翌五年に病歿したのであつた。

越中半國に封ぜられて天正三年府中城に入つた織田氏の家臣佐々成政は、それまで越中を侵してゐた上杉勢が謙信の歿後越後に退くと共に領内を平定し、やがて越中全土を所領として天正九年三月に富山城に移り、馳川を市内に引入れ、濠を深くし、城櫓を改修して守備を堅くし北國に武威を誇るに至つた。

天正十年信長が明智光秀のために本能寺に弑されてから三年後、天正十三年に豐臣秀吉は成政が德川家康と通じて異志のあるを知り、自ら十萬の兵を率ゐ前田利家を先驅として越中に討ち入つた。成政は倶利伽羅山に據り、城寨を三十餘箇所に列ねて防いだが、秀吉は石動山に登つて全軍を指揮し、士氣大いに奮うて長驅富山城に迫つた。成政は遂に髮を切り僧衣を着けて吳羽山にあつた秀吉の本陣に行つて降伏した。成政は僅かに新川一郡を與へられ、礪波、射水、婦負の三郡は前田利家の領有となり一時富山城は廢城となつた。

その後天正十五年に成政は肥後に移封されて、文祿四年には越中全領を前田氏が治めることになり、慶長二年利家の子前田利長が富山に入城し、城郭を大いに改めた。當時の牙城は城壁樓櫓高く聳え、二重の濠を繞らし、一朝有事の際には神通川、常願寺川の二水を市中に曳き入れ、市内一面を水浸しとして浮城とする計畫で、要害無比を誇つたと傳へられてゐる。この城樓も外敵はよく防いだが、慶長十四年自ら火を失して全燒し、暫く荒廢のまゝに放置されてゐた。三十年後の寛永十六年利常の次男利次は、富山に分封されることゝなつて十萬石を與へられてこゝに入城し、加賀前田氏の支藩として子孫相繼いで十三代二百三十年の間治世に勵み、明治維新に及んだのである。

維新後明治六年にはこの城趾に新川縣廳が置かれ、九年には石川縣支廳となり、十五年には拓かれて城趾公園となつてゐた。

その後公園は廢されたり復活したりして變轉したが明治三十三年以後は專ら縣廳敷地となつて今に及び二の丸、三の丸及び大手先の趾には裁判所、藥學專門學校、市役所、圖書館、商工會議所等がある。

佐々成政

佐々氏は宇多帝の後裔と傳へ、宇多帝九代の後佐々木三郎兵衞尉源盛綱の孫七郎左衞門尉氏綱が上總で佐々庄を賜つて始めて佐々氏を稱したといはれ、その十代金五右衞門太夫盛政の五男が成政で代々織田氏に仕へた。成政も早くから信長に從つて各地に轉戰し、數々の軍功があり天正三年には越中半國十萬石に封ぜられて、府中城にゐたが、天正七年越中一國を受けて富山城に移つた。この富山入城の年次については六年といふもの八年九年といふものなどがあるが、それまで富山城にゐた神保氏春が守山の麓の古國府に移り、信長の妹が彼に嫁したのが天正八年である。一說にはこの間の事情を解說して信長が氏春へ彼の妹を嫁せたとき、成政に新川郡を與へて神保氏の後見としたが、その實は神保氏を斃す謀計であつたのだといつてゐる。また三州志の著者で加賀藩の學者富田景周の說は天正七年に成政に越中一國を賜つたといふのが眞に近く、このときは神保氏その他の將領は總て所領が無くなつたやうに聞えるが、實は神保氏、菊池氏、土肥氏その他の土著の各將領が殘つてゐて、越中全州が成政の領有にはならなかつたけれど、成政へ一國として賜るのは信長が屢々行つた手法で、未だ平定しない國を先づその國の討手の將に與へ之を討伐せしめるといふ遠謀に基くその頃の常套手段であると說いてゐる。實際に成政は、富山に入城後越中の各地に土著した將領と兵を交へ、天正十年八月には土肥美作守政繁の弓庄城を圍んだが容易に陷らず翌十一年には媾和し、土肥氏が自ら越後に去り上杉景勝に賴つたといふこともある。然し兎も角成政は越中の守護となつて、武威を振つてゐたのである。

天正十二年四月豐臣秀吉と織田信雄とは尾州長篠で對軍し、德川家康は兵を出して信雄を輔けることになつたので、成政は信雄、家康に與し、北國から出軍して秀吉の背後に出で織田、德川勢とともに腹背から秀吉を挾擊しようと計り、家康、信雄と軍議を定めるため沙羅沙羅越の險を越えて東美濃に入り、成功の曉には加越能三州を領することを內約して再び深雪を侵して同じ嶮難を經て歸國し、先づ前田利家を憚つてその次男前田利政を成政の長女の婿に迎へることを申入れ、前田氏の戰備の緩

やかなのに乘じて加州に攻め入つた、時に天正十二年八月である。

成政の越軍は前田の加賀勢と各地に戰つてゐたが、天正十三年八月に豐臣秀吉は越中討伐の軍を起し、十萬の大兵を率ゐて加州に入り、前田利家を先驅として越中に攻め入つた。成政も城柴三十餘箇所を列ねて防戰したが、漸く壓迫されて富山城に據つたものゝ力及ばず遂に城を出て降伏した。巷間の傳說ではこの戰に成政は亡靈と鬼火に惱まされて悲慘な敗戰の浮目に遇うたといひ、その後新川一郡を與へられて富山にゐることを許された。

その後秀吉に從ひ京都に來てゐたが、天正十五年の九州征伐に從軍し九州平定後肥後に封ぜられ熊本城に入つた。肥後では內政に意を用ゐて功績を擧げようとしたが、檢地を嚴しくし搾取が烈しかつたので土寇が起り土著の諸豪族が之を援けて封內の物情騷然とし、成政は出兵して鎭壓しようとしたが却つて反擊され、秀吉の命を受けた鎭西諸大名の援軍を得て漸く平定することが出來た。成政は恐懼して秀吉に大いに陳謝したが、容れられず十六年五月尼ヶ崎に拘禁され「民を御するに苛酷で、民心叛離し、軍旅起るは大罪である」として自害を命ぜられた。時に成政五十歲であつた。

成政は武勇は勝れてゐたが餘りに謀略に過ぎ、野望に走り、武斷にすぎて苛烈な性格でもあつたやうで、その最後は悲慘であつたが、一介の家臣から起つて越中や肥後など大國の大名となつたのを見ると戰國の世の一英雄といつてよいであらう。

磯部堤の櫻と一本榎

富山驛から省營自動車又は市內電車にて招魂社前下車

招魂社の背後神通川に沿ふ長堤には櫻並樹が連り、市民の花見によい場所であり、堤の下には斡園五米、高さ十數米の榎が今に殘る天正の哀話を語るかのやうに孤立してゐる。

天正十一年富山城主佐々成政の愛妾に早百合といふのがあり五福村の生れで容色婉麗城主の寵愛を一身に集めてゐた。他の侍女等は之を嫉んで百方惡計を講じ遂に近侍の美男岡島金一郎と通じてゐると讒言したので、成政は激怒して直ちに兩人を捕へ一本榎の下で鋸鑢斬にした。早百合の怨靈は今も尙この樹にこもるといはれ、そ

の怨の一念が凝つて咲出たと傳へる立山の黒百合と共に土地の語り草となつてゐる。

人正しからざる時は必ず妖發る、正路に歸して行ひに儻なき時は、妖氣自然に發する事なし、故人曰く、妖は人に由つておこると、宜なる哉、神通川の合戦、佐々成政小勢を以て大軍に對し、戰いまだ半ならざるに、怪風起り數萬の幽鬼顯はれ出でゝ他人の目には見えざれども、成政一人を苦しめ、忽ち敗軍となりしこと、妖怪の業ながら少しくその謂はれなきにあらず、

佐々陸奥守成政越中國を賜り、富山に在職しける始め、一人の愛妾あり、名を早百合と呼べり、昨天正十二年の冬、此妾懷孕の心地有りければ、成政大いに喜び、兎角にいたはり寵遇日頃に勝れり、時に十一月十三日同志の大名をかたらひ、秀吉を拒み討たんと近習の勇士建部兵庫頭を先として、有合ふ者五十餘人引具し、雪中にさら〳〵越えを凌ぎ、甲斐駿河に行きて事を計る、この時竹澤熊四郎といへる小扈從一人、病氣なりとて其の供に從はず、富山の城に殘り止まれり、成政何とやら疑はしき體に見なしけれども、急なる折にてその儘に打立ち、二十日餘りを經て歸城しける、然るに成政が妾早百合の外に三人あり、是等の妾早百合が寵愛日々に增行くを妬み、「扈從竹澤熊四郎密かに早百合に通じ、その情尤も深し、依つて今姙娠める所は竹澤が子にして、成政が子にあらず」と一家中を云ひふらしければ、いつともなく成政が耳に入り、いよいよ疑ひ、心を附けて竹澤を見るに、何となくその氣色有りげに見ゆるぞ、是なん斧を失ひし唐人の諺ならんか。然るに或る旦成政早百合が閨の戸口にて、小さき錦の燈袋を拾へり、茶坊主を呼びてその主を尋ぬるに竹澤熊四郎所持する所なりといふ、是も彼の妬婦等が謀にて、竹澤が所持する袋を盜み、こゝに捨置きしや、又は實に竹澤が落し置きたるや、その事知るべからず、佐々成政この時大きに怒り、竹澤が密通疑ひなき實事なりと、頓て竹澤を庭前に呼出し、常に帶せる青江村正三尺二寸のわざ物拔打に斬り殺し、直ちに廣式に駈け入り早百合が長なる黒髪を左の手に卷き引提げ、この神通川の川添ひに走り出で、持ちたる髪を逆手に取り宙に引上げ、提斬りに切つて落し、柳の枝の垂れ下りたるに黒髪を結びつけ、ぶら〳〵と首を釣りさげ、

早百合が親兄弟を始めとし、一族十八人その側らに首を刎ねさせ、悉く獄門に梟けたりける、斬らるゝもの皆無實の成敗を怒り恨む、就中早百合が死する時罵り叫び、齒をかみ碎き血の涙を流し、美しかりき紅顏忽ちに變じ惡相を顯はし「おのれ成政、この身はこゝに斬罪せらるゝとも、怨恨は惡鬼となり、數年ならずして汝が子孫を殺しつくし、家名斷絶せしむべし」と叫びながらに斬られたり、見るもの目をおほひ、きくもの毛髮うどく。是より後成政神通川を渉り軍を出す時は、一度も勝利有ることなし、いく度か前田が家臣村井、奥村の兩人に鉾先をくじかれ、今日秀吉公と對陣の時、數萬の怨鬼顯はれしも、早百合をはじめ一族等が怨念にやと、恐ろしさかぎりなし、今も猶越中富山神通川の邊に風雨の夜は女の首を斬つて釣りさげたる貌の鬼火顯れ出づるを土人なづけてぶらり火と云ふ。又風雨もなき夜にても「さゆりさゆり」と大聲に呼べば此のぶらり火顯れ出づるよし、數百年の星霜を經るといへども、一念の怨氣消せずして世の人の語りぐさとなりぬ、後天正十六年、佐々成政百合の花より災生じ、終ひに尼ケ崎において自殺し、佐々の家斷絶せしも、正しく早百合が怨恨のなすところなるべし。

去る程に秀吉公の先手の勢五百餘騎は明らかに久利加羅峠へ押し寄せ鬪を作つて攻めかけける、此所は北國無双の切所なるに、九ケ所の要害砦を築き、逞卒を籠めおきたれば、城々より矢炮を飛ばし、きびしく防ぎ戰ふ程に、いかに大軍といへども攻動かす事能はず、にらみ合ひてゐたりけるに、富山の城より早馬來り、「秀吉旗本の勢四萬餘を引率し、能州より廻りて富山の城へ押寄せ、神通川の合戰味方勝利を失ひ、既に落城に及ばんとす、早く來つて後詰めすべし」と追々に告げければ、久利加羅の軍卒途方を失ひ仰天し、早落ち行くもの數を知らず、寄手の勢城中の色めくを見て鐵炮火箭を頻りに飛ばし、短兵急に攻めたりければ數多の城兵敵を前後に引き受け、とても防戰かなふまじと、我一に城を打捨て富山の方へ行くもあり、いづくをあてと定めなく、足にまかせて落つるもあり、九ケ所の砦一時に陥り、上方勢ゑい〳〵聲を出し、逃ぐるを追うて切立て切立て、富山の御勢に加はりければ僅かなる一城を十萬の大軍ひし〳〵と取圍み攻め立つる事なれば、曲輪曲輪も攻め破られ、僅かに本丸にとり

籠り、暫しは防ぎ居たりけり、佐々成政今は是迄なり、城に火をかけ切腹すべしと思ひしが先に神通川にて怨鬼の爲に軍破れ、成政ほどの者が一女子の怨みにより、身を亡ぼし家を失ひしと云はれんも口惜しき次第なり、不如降を乞うて秀吉が旗本に屬し、家名を全く相續せばやと思ひければ、寄手の陣へ使者を遣はし、種々に言を盡くし、さまざまに歎き、幕下たらんと願ひければ、秀吉も成政が勇ををしみ給ひ、降參を免し、堀尾帶刀吉晴を以て城を請取らせ、越中既に平定しける、成政自縛して秀吉公の御前に平伏す、秀吉公打ち笑はせ給ひ、「成政々々、向後秀吉が傍に勤仕し茶坊主を勤めよ」とて、成政が髪を剃らせ、「召具して上洛すべし」とぞのたまひける、さしも勇武の成政も、腰を折り膝を屈し、朋坊の中につらなれるは、偏に秀吉公の武威盛んなるに依つてなり。

繪本太閤記

吳羽公園

富山驛から西五粁、山麓まで電車が通じてゐる

吳羽山上を拓いたもので、山は海拔八〇米足らずの低い丘であるが、越中平野の中央に横つて之を二分し、その東を吳東、西を吳西と云ひ慣はしてゐる。

眺望廣濶で、東には立山、劍岳等の日本アルプスの連峯が仰がれ、北には富山灣を隔てゝ遠く能登半島を雲烟の間に望み、脚下には富山市街が指呼される。山頂は拓かれて前田正甫の銅像があるが、大部分自然の儘の山林公園である。

山麓の道心山には佐々成政剃髪の趾といふのがあり、こゝには天正十三年豐臣秀吉が佐々を攻め、同年八月成政は富山城を出てこゝで剃髪し、秀吉の本陣に行つて全軍失笑の裡に降伏したといふ太閤記の一頁を賑はす由緣の地である。

神通川

北陸での大河で、飛騨の位山から流れ出る宮川は飛越の國境猪谷村で紅葉に勝れた高原峽の高原川と會して神通川と稱せられ、富山市の西北郡を貫流して東岩瀨の港で富山灣に注いでゐる。水勢急で屢々氾濫し富山市も洪水の難をうけてゐたが、明治三十六年富山市の西方に、

新川を開鑿して以來、水害は殆どなくなつた。河口から笹津村まで二五粁の間舟が通ひ、鮭、鰯、鮎、鯉等の魚類が獲れ鮎は名產となつてゐる。

この川は庄川、黑部川などゝ共に水電王國といはれる富山の電氣事業興隆の源泉をなすものである。

越前の九十九橋も越中の神通川に渡せるものに及ばず、此川は急流なれば、常體の橋を懸ること叶ひ難し、されば船橋を懸けたり。先東西の岸に大柱を建て、鎖を二筋渡し、其鎖に船を繫ぎ、船より船へ板を渡す。船百餘艘に及べり。鎖の眞中二所程繫ぎ合せ八所ありて、錠をおろしたり。洪水の時之を切れば舟左右に分れて、洪水の溢れをおとすとぞ。亦一奇觀なり、奥州南部の城下にも舟橋あれど、神通川には及ばず。

橋南谿　東遊記

賣　藥

富山の賣藥は幕政時代から既に海内に汎く知られたもので反魂丹や熊膽丸、感應丸など廣く人口に膾炙してゐるが、その起原は今から二百五十餘年前の天和年間富山藩主二代の英主前田正甫の頃で、藩主の保護を受けて全國津々浦々まで行商人を出し、所謂置き藥といふ信用販賣方法で、一年毎に藥品を配置し、翌年その内の服用した分のみの代金を集め、服用しないものは之を引取つて新品と交換するといふ獨特の商ひ方である。近年同業組合が設置されて營業を改善し、益々隆昌を加へて年產一千萬圓を超えたこともある。昭和三年に國際製藥會社が設立されて臺灣、朝鮮、滿洲、支那、樺太は勿論印度、南洋諸島、北米方面まで販路を擴げ、その製造工場も初めは富山に限られてゐたのが上市、東岩瀨、滑川、水橋、四方、小杉、中田等の各地にも及んで縣下の總產額千三百九十八萬九千圓、富山市だけで七百十八萬一千圓（昭和十一年）に上つてゐる。

傳說によれば賣藥の起原は遠く吉野朝後醍醐天皇の御代で、その頃京都の侍松井政信といふ者の母が礪波で重病にかゝり、百方手をつくしたけれども藥の效目がなく危篤に陷つた。政信は立山に籠つて母の全快を祈願し滿願の日に靈示により祕藥調合法をさづかつて下山したが間に會はないで母は死んでゐた。政信は深く悲しみせめて死骸にでもといつて靈藥を調合してその口に注ぐと、

不思議に起死回生の靈驗が現れ、母は甦つて次第に快癒した。これからこの靈藥を反魂丹と稱へ、その福音を汎く傳へるため、之を調製し諸國に行商したのが富山賣藥の起原だといふのである。

廣貫堂

富山驛から市内電車電又は自動車で廣貫堂前下車

市内梅澤町にあり、數多い富山の賣藥製造所の中でも第一に指を折る工場で、歴史も古く規模も大きく施設も完備してゐる、明治九年舊藩時代からの市内賣藥業者が合同して創立し、現在は株式組織で三百餘の職工が働いてゐる。又古來の傳統をまもる千八百餘の行商員は、父祖からの配置區域を繼承して各自擔當の得意先に藥を置き全國を歩いてゐる。

大法寺

富山驛から市内電車又は自動車で廣貫堂前下車

市内梅澤町にあり、日蓮宗の巨刹で、寛永年中日行上人の創立である、その頃の藩主前田正甫は深く日蓮宗に歸依してゐたのでこの寺にも諸堂を建てゝ、堂塔を完備させてゐたが、文久三年大火に遇うて全燒した。今の諸堂はその後の再建で、本堂には前田氏寄進の赤栴檀の釋迦立像が安置してある。境内廣く老樹が繁り、山門の傍には富山賣藥の元祖松井屋源右衛門の墓がある。

淨閑翁碑

富山驛から市内電車又は自動車で廣貫堂前下車

市内梅澤町の日蓮宗妙國寺の境内にある。

淨閑翁は備前岡山の醫者で姓を萬代といひ、今から約二百五十年前の天和年間に、富山藩で製藥を奬めてゐることを聞いて富山に來て、家傳の祕法反魂丹を獻上したところ、藩主前田正甫は大いに其の方劑に感じて、侍臣に製法を傳習させた。元祿三年正甫が江戸にゐたとき、ある國主が柳營で急病にかゝり重態に陷つたので、藩でつくつた反魂丹を服用させたところ立どころに効驗があつた。目のあたりに之を見た列座の諸侯は大に感動して靈藥のことを語り傳へたので、當時は各藩で國境を閉鎖してゐた時代であつたけれど、行商人は汎く全國を行商して歩くことになつた。淨閑は晩年は備前に歸りそこで病歿したが、富山の賣藥業者は相計つて分骨を妙國寺内

に葬つた。

尚その當時始めて藥を調製して賣出したのは松井屋源右衛門であり、諸國行商に手を染めたのは八重崎屋源六であつた。

寺内に淨閑翁木像と源六の木像を安置し、毎年五月五日盛んなお祭をして、その遺德を偲んで居り、この日は參詣者が多く大いに賑ふ。

於保多神社

富山驛から自動車立町下車

市内東柳町にあり、縣社で、菅原道眞と前田利次、正甫、利保を合祀してゐる。

元來前田氏の祖は菅原道眞に出てゐるのであつて、道眞の子高規から六世の孫知善が美作に下り、子孫榮え尾張に移つて美濃國前田氏から娶つて前田を姓とするやうになつたといはれる。それで往古から菅公を祀り、天滿宮を特に崇敬してゐた。この神社も慶長年間に前田利長が在城の時新川郡新庄にあつた淨禪寺に菅公の尊像を所藏してゐる事を知り、淨禪寺を城下の寺町に移し、その後寛文五年に獨立の社殿を新築してその尊像を本尊として天滿宮と稱し、明治六年二月前田利次を祀つてあつた國王社と合祀して於保多神社と改めたのである。

境内頗る廣く特に東の方一帶は廣潤で、遙かに立山を望み市民の遊園地になつてゐる。

菅公筆の三社託宣、天神縁起繪卷物、一條兼良筆菅公像などの社寶がある。

圓隆寺とさんさい踊

富山驛から市内電車により新富座前下車

市内梅澤町にあり、天台宗で寛文六年江戸上野寛永寺末となり、輪王寺宮法親王から正覺山の山號や寺號を賜つた。

この寺では古くから毎年七月十四、十五日の兩日祇園祭を行ふ。當日は境内に少女が群集してさんさい踊をする。「サイ、サンサイ、ヨンサーヨ、ナイ」の歌詞は情趣がある。

この唄は佐々氏に代つた前田氏の治世を謳歌したものであるといはれる。

さんさい歌

己らの兄まにたぐり買ふて貫ふて、三よで短かし二よで長し、とかく氣の毒このたぐりサーイ、サンサイ、ヨンサノヨヨナイ

今の姉まは杉の木育ち杉も杉かやいきすぎだ　サーイ、サンサイ、ヨンサノヨヨナイ

留守事せまいか留守事せまいか小豆五斗煮て團子せまいか　サーイ、サンサイ、ヨンサノヨヨナイ

新庄通れば茨と藤と藤が卷きつく茨がとめる茨放しやれ帶きれる

サーイ、サンサイ、ヨンサノヨヨナイ

白山神社

富山驛から市内電車廣貴堂前下車

鄉社で菊理姫命を祀る。藩祖前田氏が城下福門の神としてから、福門の神、また緣結びの神として一般からの信仰が頗る厚い。この社にはコレラ退治の山車「蓬萊山」があつて名物となつてゐる。

神通川舟橋阯

富山驛から市内電車により縣廳前下車
自動車では七軒町下車

富山驛から手傳町を過ぎ舊神通川廢川地を横斷する道路は、今は坦々たる鋪裝道路であるが、此邊は元神通川の本流だつた所で慶長元年始めて舟橋を架け、それが明治十五年に木橋に代るまで三百餘年間、二條の鐵鎖で繫いだ六十四艘の舟に、縱に五枚の板を併べて人馬を通し、富山名物と謳はれたものであつた。

その頃は河水が滔々と兩岸に迫つてゐたが、その後河身が西方に遷つて廢河となり、近代市街の幹線が通ずるやうになつた。

今舊河身の中央部邊に、左右二基の石造常夜燈がある。それは舟橋の當時に用ゐたもので、僅かに當時の俤を偲ぶ名殘となつてゐる。

日枝神社

富山驛から市内電車又は自動車西町下車

市の中央山王町にあり、大山咋神を祀る縣社で、市の產土神である。境内廣く社殿も大きい、始めは新川郡針

原村にあつたのを後に富山に遷して神保、佐々兩城主が厚く崇敬し、前田利長が富山に入城してから社地を寄付し、社殿を造營して現地に遷座した。

六月一日の例祭には山王祭といひ數多の興行物が集り、參詣者雜沓して頗る賑やかである。

光嚴寺

富山驛から市内電車或は自動車南田町
又は通坊前下車

市内五番町にある曹洞宗の巨刹で、藩主前田氏歷代の菩提所である、長祿二年天叟和尚の開基で當初は射水郡守山城外にあり七堂伽藍莊嚴を極めてゐたが、上杉謙信の兵火に遭うて衰へ、慶長年間富山に移つた。今の伽藍は貞享年間の建築で境内も廣く、老杉が繁り市内屈指の淨域である。境内に富山藩の碩學である富山縣の教育の基礎を築いた南部三代草壽、南山、國華の墓があり、寺寶に岸駒筆といふ開山御一代繪傳の他、經卷佛畫などがある。

境内に昭和年中に建てた三重護國塔がある。これは所謂昭和維新の社會時相に鑑み、正法顯彰、護國濟民の實を擧げるため發願建立したもので、塔内には本尊聖德太子像、三十三觀音像を安置し、更に上古から現代に亘る文武百般各層の英靈を合祀してその德風を末永く傳へ、日本精神を宗教的に象徵しようとする理想の下に建てられたものである。

南部三代の墓

光嚴寺境内本堂の東方に南部草壽、南山、景春三代の墓所がある。

南部草壽は字を子壽、號を古硯子、陸沈軒等といつた。山城の人であるが天和元年前田正甫に聘されて富山藩の儒者となり、藩教育に貢獻するところ多くその基礎を築いた。

學德共に勝れ故典に通じ、著書が多く、文祿元年十一月二日歿した。

南部南山は草壽の養子で字を思聘、本名を景衡といひ、南山はその號である。

安東省庵、木下順庵に師事して博覽强記、史學はその得意であつた。正德三年三月七日歿した。

南部景春は南山の長子で字を國華といひ、十三歲の幼

年の時父と共に東叡山に登つて五言古風二百首を賦して當時有名となり、長じても詩や書畫が得意で、享保二年四月二十四日歿し、景春に子が無く南部氏はその後絶家となつてゐる。

三氏の墓標は一箇所に並んであるが中央の「先儒陸沈先生墓」と刻したのが草壽の墓、向つて右の「南部平左衛門之墓」とあるのが南山の墓、左の「國華景春之墓」と刻したのが景春の墓である。

辭　世　　南部草壽

道に生れ道に遊びて終る日は
　道のひとつにかへるなりけり

長岡御廟

富山驛から越中鐵道により八ヶ山驛下車

富山藩主前田家十二代の墓所で、市外長岡村呉羽山の北端にあり、老松古杉欝蒼と繁り、幽邃閑雅の地である。

累代の廟所は何れも結構莊嚴で、廟門前には苔蒸した花崗岩の燈籠が六百餘基縱横に列び建ち、毎年八月八日の祭典には之等に悉く火が點されて時ならぬ美觀が見られる。

こゝに廟所が定められたのは延寶二年七月利　薨去の時で元は佛式で祭つてゐたが明治八年以來神道に歸し、明治十七年には石碑に刻んであつた諡號も削つて官位姓名に改刻した。

八ヶ山公園

富山驛から越中鐵道により八ヶ山驛下車

呉羽公園の東北にあたる小高い丘で、眺望のよい行樂地である。動物園、運動場、スキー場、溫浴場などの設備がある。この地は先住民族の遺蹟に因み百塚山又は觀音山とも呼ばれ、寛永年間富山藩祖の前田利次が十萬石で富山に封せられたとき、この地に築城を計畫したが經費の點で中止し、富山を居城とした。それで利次のことを百塚侍從といつたこともある。

北陸本線に沿うて（高岡とその附近）

高岡市

高岡驛所在地

古來有名な銅器の產地で、北陸本線と中越線との交叉點にあたり、北四粁に日本海岸屈指の要港伏木を控へ、市の中央を北に貫流する千保川は小矢部川に注いで舟を通じてゐる。

前田利長の築城前の高岡は人烟稀な原野で、關野又は關野ヶ原、志貴野等といはれてゐたやうである。慶長十四年加賀藩主前田利長がこゝに築城し、藩主自ら入城して地名を高岡と名づけ富山、守山、木舟の三城下から家臣四百三十戸餘、工商六百三十戸餘を移住させてから、荒涼としてゐた曠野は忽ち殷賑の市街となつた。利長は慶長十九年五月高岡城に逝き、その後間もなく廢城となつたが町奉行が置かれて金澤、小松と共に加賀藩の三城下に數へられ、前田利長以來歷代藩主が產業の保護奬勵に努めたのと、商智にたけた高岡商人の不撓不屈の精神と相俟つて、商工業共に榮え、又小矢部川の水運を利用して伏木港を根據とし、江戸大阪或は遠く北海の僻陬と往來して商覇を北日本に唱へた。

高岡銅鐵器の製造は、古く慶長十六年利長在城の時に礪波郡西部金屋村の鑄物師金森、喜多、般若等を招いて鑄物工場五箇所を建設させたのが創まりで、職工を優遇して大に斯業の發展を期したが、その後寶暦頃から鐵器の他唐金鑄物、佛具等の製作が盛んとなり、中でも銀象嵌の墨斗は有名であつた。明治以後は火鉢佛具を益々多く造るやうになり、本邦隨一の產地となつた。金屋町を本據として横田、内免、博勞町等市内各地に散在する小工場で製造する年產額は五百二十七萬圓に及んでゐる。

銅製品の主なものは火鉢、花瓶、置物、佛具、燈籠、銅像、銅碑、鐘、香爐等の内地向の他に、輸出向として花瓶、植木鉢、ランプ臺、ステッキ立、盛花器、灰皿、等があり、鐵器は鍋、釜、鐵瓶等を主とし中でも鐵瓶は最

近その形狀、品質に改良を施して製産額も增してゐる。

銅鐵器に次ぐ古い沿革のある丹甫塗といふ漆器もこゝの特産品でその獨得の味ひある錆繪と稱する模樣を特色として、高岡漆器の名聲を高くしてゐる、明和、安永の頃に既に辻丹楓のやうな名工が現れ、その後天保年間になると板屋小右衞門、石井勇介等の名匠が輩出して世上に廣く賞用されるやうになつた。その製品の主なものは內地向として菓子器、硯箱、手箱、書棚、煙草盆、火鉢、料紙箱、茶櫃、盆等で、輸出向としては寢セット、ビール盆、ペン立、シガレットケース等がある。この他普通の日用漆器で俗に赤物といはれる簞笥、長持、家具、針箱、等の類も古くから製作され、佛壇の如きは特に漆も彫刻も精巧で販路が廣い。漆器の年産額は七十萬圓である。

人口六萬。市を東西に貫く國道北陸街道に沿ふ旅籠町通町、御馬出町、守山町、木舟町、小馬出町、坂下一番町通り、末廣町、御旅屋町などは殷賑な商業街であり、千保川畔から西部一帶の横田町、金屋町、內免町方面は工業地區で銅鐵器、紡績、捺染などの諸工場が集つてゐる。相ノ木町は狹斜の巷である。

旅館　延對寺、梅松園、高岡ホテル、木津樓、大昌樓、高岡館、光陽館（三、四圓程度）

名物　銅器、鐵器、漆器、捺染、綿絲布、木製品、鹿ノ子餅、とこなつ（菓子）

富山縣の米

北陸地方は總體に水田が多く中でも越後は本邦第一の米産地であるが、富山縣も亦古くから越中米の產で知られてゐる。

黑部川、常願寺川、神通川、庄川などの河川網におほはれた富山平野は之等の諸川が比較的短い流程で日本海に注ぎ、流は急で河底は淺く河幅は廣いので、昔は度々氾濫したものである。然し河川改修工事が漸く發達するにつれて却つて灌漑通水の便がよくなるやうになり、延て水田が發達することになつたのであり、氾濫原ともいふべき沖積層の扇狀地で地味肥沃なため著名な產米地となつたのである。

富山縣の生產物中で生產價格が特に多いのは米と電氣であるが、米は電氣の三千二百萬圓を凌いで四千四百萬

圓餘の收穫を上げて本縣の最重要產物となつてゐる。之を縣下生產總額から見ると約二割に當り縣下農產額から見ると約九割五分に當り、その作付段別は八萬町歩、收獲高は百七十萬石である。

富山及び高岡兩市には米穀取引所の設置もあり、又過剩米が多く、鐵道による荷動きも活潑であるが、移出の最も多いのは伏木港を通して北海道、樺太へ搬出するもので年額約三萬圓に達してゐる。

捺　染

高岡の染木綿は裏地が主で、之は藩政時代からの重要物產であつたが、近年新モス友禪、富士絹、人絹などの捺染技術が研究されてこの方面にも高岡捺染の聲價を擧げてゐる。その製品の主なものは風呂敷、窓掛、テーブル掛、帶地、壁掛などである。

御車山と七夕祭

御車山は所謂鉾車で、俗に曳山といつてゐる。慶長年間に前田利長が市內七箇町に一臺宛與へたものが三百有餘年の間傳はり每年五月一日の高岡關野神社の大祭に市內を曳き廻すのであるが、遠近から夥しく人が集まつて雜沓し北陸三縣隨一の賑ひといはれてゐる。

七夕祭は七月六日から七日に亙り家々の軒端に數百の紅提灯や短册などを結び付けた高さ數間の笹竹を立て、更に意匠を凝した一間四方大の行燈を揭げ、織女星の祭をするもので、夜になつて遠くから之を望むと紅蓮の虹かと疑はれるといふ。七日の夜は數十人の勢子が音頭拍子勇ましく市中を練りあるき、千保川の橋上からこの笹竹を河中に投げ入れることになつて居り、橋上から河中に投入される飾竹は數百といふ多數で、之が深更まで續いて頗る壯觀である。

櫻馬場

高岡驛の直前から北へ一直線に高岡城阯に通ずる街路で、慶長年中前田利長が高岡在城のとき騎射場として設け、その兩側に櫻樹を植ゑたので櫻馬場と呼ぶやうになつた。幅一七米、長さ五〇〇米ほどあり、老樹三百餘種

に及び、花時には花のトンネルとなつて壯觀である。

高岡城址　高岡驛から二粁

櫻馬場を通つて行く。俗に古城と呼んでをり、明治八年から高岡公園となつてゐる。面積二、一〇〇アール、建物は廢毀されて無いが、青松が欝蒼とし、碧水をたゝへた深い濠が殘つて周圍をかこみ、西北方から二上山と富山灣とが望まれる。

慶長十四年前田利長が古名を關野といつたこの地の原頭に馬を停めて、居城の地を卜し、古詩の「鳳凰鳴于彼高岡」に因んで地名を高岡と改め、濠を深くし石壘を高くして堅固の城を築き、殿閣には豐臣秀吉から與へられた伏見遺館の良材を用ゐた。元和元年に廢城となり、藩政時代には高岡古御城といつて高岡奉行に管理されてゐた。前田利長が加越能三州中で最適の地として城池を營んだものだけに、その規模の大きさが今に見られる。

本丸を圍んで二重の深い濠があり、堅固な石垣は高々と連り、本丸阯には古松老杉が蓊鬱と繁茂し、そこに國幣中社射水神社が祀られてゐる。

射水神社　高岡驛から約二粁

高岡公園内高岡舊城の本丸阯に鎭坐する國幣中社で、祭神は二上神と稱し、もと市の西北の二上山にあつたのを明治八年にこゝに遷座したのである。

二上神は二上神ともいはれ、天牟良雲命の別名で延喜式には名神大社として載せられ、歷朝の崇敬厚かつた有名な神社である。神佛兩部が行はれてゐた當時には二上權現と稱へてゐた。

今の社殿は明治三十四年の再建で、老杉が高々と茂る本丸阯の中央に淸楚な神明造の社殿が建つて居り社頭の風趣は殊に神々しい。

四月二十三日に例祭があり、九月十、十一、十二日の三日間にわたつて秋季祭がある。秋季祭は二上山から御遷座の日を記念する祭典で、奉納神樂や、星取神事角力が催され、夜は公園内の中の島を中心に獻納燈大會があつて賑かである。

二上山萬葉集

ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ

ふたかみやまに月かたぶきぬ

二上のこのもかのもに網さして

あが待つ鷹を夢につげつも

瑞龍寺　高岡驛の西南一粁

市内下關にあり、高岡山と號する曹洞宗の巨刹で、前田利常が父の利長瑞龍の冥福を祈つてその菩提所として建立したものである。

これより先慶長十八年に利長は高岡城の側に國祖及び織田信長夫妻の廟を建て、一寺を創立して法圓寺といつてゐたが、利長の卒後その遺骸をこゝに葬り、諡號瑞龍院に因んで瑞龍寺と改めた。その後利常は當時の有名な工匠山上善右衞門に命じ、構造を支那臨安村の徑山萬壽寺に倣ひ、現在の地に七堂完備した伽藍を經營して移したのである。當時の建物は正保二年に起工し寛文三年に完成したが、山門、佛殿、大方丈、禮堂、庫裡、衆寮、影堂、浴室、東司、茶室、書院などの諸堂が完備し、堂閣は壯麗で堂塔の標本的配置は本邦有數のものであつた。

ところが後年になつて火を失したり、或は寺運が衰微する等のことがあつて、今に建立當初のまゝ遺つてゐるものは、東面して建つ佛殿を中心として前に山門、後に大方丈があり、大方丈の北側に庫裡、山門から大方丈に至る廻廊があるのみである。

佛殿（國寶）は萬治二年に落成し、五間五面、重層で、屋根は入母屋造鉛板葺で、組石壇の上に建つてゐる。

上層は三間三面で軒は二重扉棰で、尾棰を出して唐様三手先詰組を用ゐ、下層の軒は二重繁棰、出三斗を組み斗には繪樣彫刻のある實肘木をかき込んでゐる。柱は粽圓柱であるが、中空で更に心柱を容れてゐるのは珍しい。

柱間は前面中央三間棧唐戸で、兩脇は格子窓となり、左右兩側面は前から二間目が棧唐戸となつてゐる他は火燈窓板壁であり、後面は中間一間が棧唐戸でその他は板壁である。

内部は石敷床、入側周圍は廂の間となり化粧屋根裏で、中央三間三面を内陣とし、内陣の柱頭は三手先詰組を組んで、大虹梁、蝦虹梁を架け隨所に大瓶束、或は蟇股を用ゐて居り、天井は小組格天井となつてゐる。

内陣奥に高い須彌壇が設けられ明から持つてきたといふ釋迦三尊の木像を安置してゐる。

佛殿の構造樣式は普通の禪宗風五間重層の堂であるがその構架の制、細部の手法は江戸初期工巧の精を盡してゐる。

法堂は明暦年間のもので桁行十一間、梁間九間、單層屋根は入母屋造棧瓦葺で規模壯大である。前面に向拜があり、正面中の間にある欄間及び棧唐戸の花挾間、左右兩端の間にある竹の節の手法は頗る特異なものである。曹洞宗法堂の代表的遺構といふべくこの種建築の好標本だとされてゐる。

總門も明暦年間の建立で、屋根棧瓦葺の堂々たる藥醫門である、諸種の刳形や扇の四葉座、八双金物は頗る雄健の風を現してゐる。

法堂も總門も佛殿と同じく國寶となつてをり、多數の寺寶の中後陽成天皇の宸翰御消息一幅は有名でこれも亦國寶である。

二上山

高岡驛の西北四粁、伏木驛の西四粁

この山の名は萬葉集にも見られ、古くから月と紅葉の名所として有名である。

昔は山上に臨濟宗の大本山國泰寺があり、南麓に二上神社があつたが、國泰寺は天正年間に現在の地太田村に移り、二上神社は高岡公園内に移つて射水神社となつた。

高山ではないが平野に屹立してゐるので、山頂からは富山灣を俯瞰し、立山山脈一帶の高山を望んで眺望が頗るよい。

時鳥あかすもあるかなたまくしけ
二上山の夜半の一聲　西行

神もさぞ鏡と今宵まちわびて
二上山にのこる月かけ　充規

玉くしけ二上山の木の間より
出れば明くる夏の夜の月　源親房

新湊、氷見線に沿うて

新湊町

新湊驛及び中伏木驛所在地

小矢部川を隔てゝ伏木町と相對し、伏木港の東岸を占める地で、人口二萬二千。中伏木驛は船舶積卸の荷役を主とするものである。

町の西部には新庄川が南北に貫流し、町の東端に放生津潟一名越湖があり、庄川と湖との水を連ねる内川が町を東西に流れてゐる。港は古くからの漁港で、鰒、鰤などの産額が多く、鹽鰤と干鰯はこゝの特産である。

こゝはもと放生津といひ、八幡宮領で放生會を行つたのでこの名が起つたと傳へてゐる、放生津城は戰國時代名越有時の領有であつたところで、上杉氏との古戰場である。

放生津潟は周圍六粁、白砂青松の奈呉ノ浦海岸に續き風光がよい、湖中の鼈島といふ小島には辨天祠があり、七月三十日の例祭は潟祭といつて盛んな祭であり、滿船飾をした多數の船が徹宵湖上を往來して華かな情景を呈する。

名物　鼈甲鰕、蒲鉾

名月、奈呉ノ浦、日滿なかよし菓（以上菓子）

みなとかぜ寒く吹くらし奈呉の江に
妻なきかはし田鶴さはに鳴く　萬葉集

伏木港

伏木驛所在地

港は小矢部川の河口港で河口深く巨船の出入に便であり、能登半島に阨はれて日本海航海者の最も恐るゝ西の風浪を避け得られて出入容易であり、港内水深く靜穩なので四時荷役に困ることがない。又兩岸に臨港鐵道が通じて伏木方面には伏木驛、新湊町側には吉久、中伏木、新湊の省線四驛があつて船車連絡の便良く且又港の近接地に港内十五萬坪を有する東岩瀬の良港を補助港として有し、港に近く接して水面五十萬坪の水上飛行場と面積八萬坪の陸上飛行場とを有するなどこの港の特色である。

この港は小矢部川の河口を改修して河中を内港とした河港で、小矢部川は加賀國境の大門山の東麓に發源して北流し、東西礪波郡の平野を貫いて伏木港で日本海に注

いでをり、水量が豐富なのと流れの緩やかのとで古くから舟楫の便が開け、自然の良港としてまた高岡の外港といふ地位を占めて大いに利用されてゐた。明治八年三菱會社の汽船が初めて入港してから年を逐うて發展し船舶の出入が頻繁となつたが、年々庄川から流出する土砂で河口が埋塞されたので、明治三十三年庄川の河道を現在の如く分離する庄川改修工事をすると共に伏木港口の修築をなし、港口に防波堤を内港に岸壁を築造した。之が築港の始めでその工事が竣成したのは明治四十四年であつた。

一方棧橋、繫船壁に沿うて臨港鐵道を敷設し之を中越線に連絡させ、また上屋數棟を建設して荷役の便益を圖る等海陸連絡の設備も大正元年八月完成して昔の面目を一新して、出入貨物は年々一割餘の增加率を示して大正十年には七十萬噸を呑吐するやうになつた。

その後十二ヶ年繼續の第二期擴築工事が計畫され大正十五年以來之に著工し昭和十年に完成した。その總經費は五百萬圓であつた。

内港棧橋繫船岸壁には左岸に六千噸級一隻、四千噸級一隻、二千噸級二隻、千噸級三隻、右岸には六千噸級一隻、三千噸級四隻、千噸級七隻計十九隻の接岸荷役と六千噸級一隻、四千噸級二隻、三千噸級二隻、二千噸級二隻計七隻の沖荷役とが一時に出來るやうに施設されてゐる。

この港が小矢部川の河口港として自然の良港であり、早くから舟溜りとして利用された事は前に說いたが、元和年間には前田藩が河西七浦の一つとして商港に指定し明治二十二年には特別輸出港、同三十二年には開港場に指定されたのでこの港の發展を助けることになつた。

然し本港は從來輸入、移入の物資のうち伏木で消費される多少の工業原料の他大部分はこの港を仲繼するものであるのにその港勢範圍が極めて狹く、東には新潟港があつて關西方面への進出を阻み、西には敦賀港があつて關西方面への進出を阻んでゐるため、僅かに高山本線に依る中部日本及び東北方面の一部を商圈として保持してゐる狀態である。然しこの地方の不屈進取の氣に富む商人の努力で大量仲繼貨物である雜穀、魚肥の如きは遠く關東、關西、中國、四國、東北の一部に及んでゐる。

主なる移出對手港は北海道の小樽、函館、釧路、樺太の大泊、眞岡、朝鮮の淸津、仁川、鎭南浦、群山、元山、九州の八幡、若松、相ノ浦（長崎縣）門司などである。

近海の七尾、高岡、氷見、東岩瀨、新潟などへは藥製品、人造肥料、鑛石、鐵、米などを積出してゐる。

又主なる移入對手港は北海道の小樽、函館、釧路、留萌、室蘭、樺太の大泊、敷香、惠須取、白浦、朝鮮の興南、元山、淸津、鎭南浦、釜山、臺灣の高雄、九州の若松、相ノ浦、門司、八幡、四國の坂出などであり、本州の高岡、新潟、氷見、鮫（靑森縣）などからも石炭、セメント、木材、鑛物、藥製品、魚粕などを移入してゐる。

なほ上海と露領カムチヤツカとへ炭化石灰、鐵、藥製品を輸出し、關東州の大連、滿洲の營口、印度のビサカパダム、佛領印度支那のポートレドン、埃及のアスサブ、米國の桑港などから、石炭、木材、鑛石、鹽などを輸入する。

伏木は工業用物資の供給と製品の搬出とに極めて便利な地の利と設備とを有し、剩へ全國唯一といはれる低廉で豐富な電力にも惠まれ、なほ勞銀の安い職工が容易に使へるといふ色々の好條件を備へてゐる。尤も明治の末頃までは製瓦工業が唯一の特產で、機械工業などは全く興らなかつたが、明治四十年にはじめて北陸人造肥料會社が創立され、その後世界戰爭の影響を受けて各種化學工業が勃興する機運に際會してこゝにも數箇の工場が新設された。現在の大工場として港の左岸に王子製紙、伏木板紙、大日本人造肥料、北海曹達、電氣化學工業、レーヨン曹達などがあり、右岸には日本鋼管、樺太木材、全購聯肥料配合工場などがあつて、その工產總額は昭和九年に一千七百萬圓に達してゐた。

又瓦製造は明治十三年頃から拓け伏木の特產になつて居り、現在工場數十七、年產二百萬枚、この金額は十萬餘圓に及び、最近では五色瓦といつて特種の彩色をした瓦の製造に成功して益々販路を擴張してゐる。

勝興寺

伏木驛の西一粁

伏木町の古國府町にある。眞宗本願寺派の亘刹で、順德天皇の御子信念上人（彥成王）の開基であるといひ、順德天皇が佐渡におはしました承久三年に創立させ給うたもので、後に文明三年礪波郡蟹谷の庄土山に移つた。本願寺第八世蓮如の二男蓮乘が住職となつてから、北陸七箇國の法頭職となつたので、永正元年には北國の本山となり越中本山と稱へて、國中の寺院を配下にし山號を

雲龍山と號した。

現在の寺地に移つたのは、天正十二年に神保氏張が國府城を寄附してからで、當時氏張の建てさせた制札が今も寺に保存されてゐる。

前田氏が領主となつてから國中諸寺の觸頭となつて寺領二百石を寄せられ、慶安二年には前田利常の女が入興し、寶暦六年には藩主前田重教の弟が入寺して法暢と稱するなどのことがあり、藩主との緣が深かつた。法暢は明治六年還俗して本藩を嗣で名を治修と改めた。

今の本堂は安永年間の再建で頗る宏壯、大門、中門などゝ共に輪奐の美を極めてゐる。

一月九日から十六日までの大滿座といふ法要は、信者の集るもの萬を越すといはれ、四十貫の大蠟燭を献するのが例で、その他に色々の行事もあり賑やかである。

氣多神社　伏木驛から二粁

伏木町一宮にある縣社で大己貴命、奴奈加波姫命、菊理姫命、事代主命の四座を祀る。養老二年の創建と傳へる古社で越中國一ノ宮と稱せられてゐる。

境内には樹木が茂り閑雅で風趣に富み、背面の高地からは富山灣の全景を見下し、奈呉浦岩崎が指呼されるなど眺めがよい。

拜殿は近世の建築であるが、本殿は足利時代末期の遺構で、柿葺の三間社流造であり、最近國寶に指定された。

大伴家持

大伴家持は天平年中に越中の國守となつてこゝの國府に在任したのであるが、有名な歌人であるだけに越中在任中に多くの歌を詠んでをり、それが萬葉集に記載されて古代越中の風物や、地名が察知せられて面白い。

家持は大納言從二位大伴旅人の子で、元正天皇の養老二年に生れたと傳へられ、天平十八年六月越中守に任ぜられてゐるから、赴任當時は二十九歳の青年であつたらしい。その後孝謙天皇の天平勝寶三年七月まで六年餘越中に居たのである。

萬葉集一七「大伴家持天平十八年閏七月越中守に任ぜらる即ち七月任所に赴く時姑大伴坂郎女が贈れる」歌に

草枕旅ゆく君を幸くあれと齋瓮するつ我が床の上に今のごと戀しく君が思ほえば如何にかもせむするすべのなき

とあり、また萬葉集一九に「天平勝寶三年七月十七日少納言に遷任せらる、即ち別の悲を詠みて久米朝臣廣縄の館に贈る、又既に六載の期に滿ち遷替の運に遭ひ—(中略)—八月五日京師に入らんとす此に因りて四日に國厨の饌を介内藏忌寸縄麿の館に設けて餞す時に大伴家持が詠める歌一首」と前書して

ひなさかる越に五年住み住みて
立ち別れまく惜しきよひかも

といふのがある。

尚家持が在任中に詠んだ歌で萬葉集に集載されてゐるものゝ中數首を摘記すれば

江より沂る船人の唱を遙に聞く歌一首

朝床に聞けは遙けし射水河
朝漕きしつゝ唱ふ船人

天平十八年秋九月二十五日

かゝらむとかねて知りせば越の海の
有磯の浪も見せましものを

馬並ていざ打ち行かな澁谷の
清き磯みに寄する浪みに

澁谷の崎の有磯に寄する浪
いやしく〳〵に古思ほゆ

古代の政治組織は氏族制であつたので、職制上から大伴、物部、久米などの諸氏が軍事に關係して皇室に仕へてゐたので、尚武の氣風はこれ等の氏族の間に特に重んじられて、一旦緩急あれば勇猛敢爲、進むことを知つて退くことを知らなかつた。

大伴家持は次の歌を詠んで、その一族を勵まし、一身を皇室に奉じて、國難に殉ぜようとした。

海行かば　水漬く屍　山行かば　草蒸す屍大皇の　邊にこそ死なめ　かへりみはせじ　とことだて　ますらをの　清きその名を　いにしへよ　今の現在に　流さ

へる　祖の子等ぞ

この家持の歌に我が民族固有の精神がよく表はされてゐる。

家持はその後各地に國守を歴任し、延暦元年六月陸奥按察使兼鎮守將軍となり、同四年八月六十八歳で歿したといふ。

島尾遊園

島尾驛から東北半粁の海濱にある

青松、はまなす、合歡の木などが茂り、白砂緩やかに起伏する二萬平方米餘の遊園場で、鐵道省の直營である。

中央に三階造の温浴場があり、階下の浴槽では湯に浸つたまゝ水平線上に浮ぶ白帆の影が眺められ、階上の大廣間、喫煙室、露臺からは潮風をまともにうけて有磯の海の佳景が目に入る。なほ園内にある松林の間には家族連に向くやうに造られた貸席があり、また旅館、宴會場などもある。貸席と浴場は毎年六月一日から九月十五日まで營業してゐる。

雨晴海岸

雨晴驛附近

富山灣は有磯海ともいひ、海浜ひの女良、氷見、雨晴放生津、濱黒崎、生地などは海濱風景が勝れてゐる。その中でも雨晴は文治三年源九郎義經が奥州に落ちる途中安宅關を越え礪波郡五位庄からこゝに來て、濱邊にさしかゝると俄雨が來たので、こゝの岩窟に雨宿りしたといふ傳説があり、それに由來して濱の名が生れてゐる。

雨晴の岩は三箇の巨巖の上に大きい平面の岩を戴き、丁度小屋のやうで數人がゆつくりと入れる。又この濱は夏は絶好の海水浴場で避暑を兼ねて遊ぶものが多い。

旅館　楠亭、佐山亭、雨霽館

氷見町

氷見驛所在地

十二町潟（布勢湖）の海に注ぐところ、富山灣に面した漁港である。

富山灣の奥にある有磯の海は古くから漁業地として聞え、その漁獲物は悉く氷見港で陸上げされて京阪神其他へ送られ氷見鰤、氷見鰯、氷見鮪の名は廣く知られてゐる。

大正十二年から五箇年繼續の防波堤及び護岸の工事、昭和七、八年の船溜場工事等を經て港灣施設も整ひ入港漁船の數は愈々多く、北國有數の漁港となつてゐる。從つて町の生産物は水産物が主で、これに次ぐものは縫針、藁製品、酒類、木製品、麵類などである。

こゝの鰤の大敷網、鰯の甎網、鮪の大謀網などは全國的に知られるもので水産總額の九割は之等が占めてゐる殊に鰯の漁獲は我國でも有數であり、又近年その加工法が進歩し主に櫻干鰯となつて遠く北海道や朝鮮までも移出されてゐる。

この櫻干は土地で鰯に加工する方法が頗る幼稚なので效果的の處理方を案出するため當町の久世氏等が全國を視察し、長崎で味淋干が行はれてゐるのを見て歸り、この方法を改良工夫したもので、忽ちに全町に擴がり、春の加工期には全町の大半は之に從事してゐるといつてもよく、市中到る處に之を乾してゐる盛況で年産五十萬圓を超えてゐる。なほ櫻干の他に重要な加工水産品に鹽鰤がある。これは昔交通の便が開けないとき鰤漁が多くその貯藏の必要上考へられたもので、生鰤より味がよいといはれてゐる。

古くから氷見針として名のある縫針は、約六百年前に長崎からその製法を傳へ、はじめは專ら手工業であつたが近年機械工業となり、生産總額二百萬圓を超えた時もあつたが、今では支那南洋に向けてゐた輸出向製品を中止して内地向縫針のみを製造し年産八萬圓餘である。またこゝの糸鰡飩は氷見鰡飩といはれて聲價高く、年産二萬圓に及んでゐる。

十二町潟

十二町潟は氷見町の南から西南にかけて彎入し、古來多くの歌に詠まれた明媚な潟湖で萬葉集には大伴家持の「遊覽布勢水海賦」といふのがある。布勢の湖といふのは十二町潟のことで、氷見潟といふ別稱もある。潟の北岸で萬尾川といふ部分の水面に、約九一〇米に亘つて珍しい水草鬼蓮があり、珍種として天然記念物に指定されてゐる。鬼蓮は睡蓮科に屬し、葉は圓形で直徑一米から二米もあり、花は小さく藍紫色である。一年生植物で地下莖なく、秋に結實した種子が水底に沈んで翌年發芽するのである。

朝日山公園　氷見驛の西二粁

氷見町の西にあたる朝日山の上にあつて、富山灣を見下し、立山連峯を遠望して眺めがよく、園の東北にある上日寺の境内には公孫樹の老木があり、天然記念物に指定されてゐる、その幹圍は目通一一米高さは二〇米に及ぶ大木で、地上約一米の部分には數十箇の乳房を生じ毎年七、八石の實が採れる。四月十七、十八日の兩日には上日寺の觀音祭が催され、古くからゴンゴン祭といつて、櫻の花の下を練る稚兒行列や梵鐘の打くらべで名高い。

この祭の由來は享和年間氷見庄一圓に大旱魃があり、庄内百箇村の農民がこゝの觀音堂に集つて大般若經を讀誦し、梵鐘を亂打して雨乞の祈禱をしたが遂々その梵鐘を打ち貫いてしまつた。そこで梵鐘を鑄直して終日終夜撞き續けて祈禱してゐると一週間目に慈雨が沛然と降つて來た。そこで翌年の四月十七、八日にその報恩の祭事を行うたのが年中行事となつたのである。

祭の當日は飴を賣る店が澤山出る、參詣者は皆之を買つて歸るがこれは飴を雨に通じたもので、觀音祭を執り行ふ起因が雨乞ひであることから起つたものと思はれる

氷見の祇園祭

毎年七月十四、十五日の兩日、町内の八阪日宮の兩社で行はれ、曳山武者行列その他の催しがあり。夜は徹宵提灯曳山を引廻るので雜沓する。

この祭は貞享年間に打續く惡疫流行で人心惶々としてゐたので、疫病神といはれる祇園神を祀るため祇園牛頭天王に祈つて朝日山上日寺で惡疫除けの祈禱を行つたところ功驗があつたといふ。これが祇園祭の起原である。

朝日貝塚　氷見驛から西北一粁半

氷見町朝日の誓度寺境内にあり、貝塚は庫裡の南畑地で、富山灣有磯の海に臨んだ低い丘陵の中腹を占めてゐる。

蛤や赤貝などの貝殼が多く、嘗つて發掘された遺物には石鏃、石斧、凹石、石錘、石匙、石錐などの石器類や土器破片、骨器、角器などがある。

貝塚の他に住居址が二箇所發掘されてゐるが、共に自然石で圍んだ爐址がある。

これ等の遺址はすべて指定の史蹟となつてゐる。

唐島　氷見町の沖合約一粁

富山灣に浮ぶ小島であり、島の周圍は約六〇〇米にすぎないが奇岩巨石が重なり、樹が繁つて島遊びが面白い。島には撫子が密生してその花時には丁度白雪で被はれたやうに見えるので、古くから雪島ともいはれてゐる。

島には辨財天と、觀世音の二つの祠があり、五月三日の例祭には參詣の小舟が島の周圍にむらがつて賑やかである。

大境洞窟住居址　氷見驛の東北二粁

富山灣の海岸宇波村大境の絶壁の下部にある自然の洞窟で、大正七年に洞窟の入口にある村社白山神社の社殿を改修するとき、窟の下底から種々の遺物が發見され、調査された結果先史時代の住居址だといふことが確められて史家の注意を惹いてゐる。

洞窟は西南に面して開かれてをり、入口の幅一七米、高さ六米あり、奥行は三五米で、内部に進むに從つて幅も高さも小さくなつてゐる。

大正七年に發見された遺物は、多數の彌生式土器、同破片、石棒、石庖丁、角製銛、鏃、弓筈、貝輪破片、骨、獸骨などで、今何れも東京帝國大學理學部に所藏されてゐる。この洞窟は上古の住居の址で指定の史蹟となゐる。

中越線に沿うて

出町　出町驛所在地

廣々とした礪波平野の中央にある物資集散地で、また市場町として知られてゐる。この町へ入ると近在の農人が自作の野菜籠を前に「買はんせ〳〵」と人を呼んでゐるのが眼を惹く。

町の西端を中越線が走り、縣道は福光、高岡に連り、縣道や村道は各々附近の町村と連絡がよく交通の要衝にも當つてゐる。

この町も今から三百年前は小さな市場町に過ぎなかつたが、慶長十三年に庄川の水害で、市場全部が流されその後四十餘年間荒廢地となつてゐたが、慶安二年にやうやく復興し、この地の次郎兵衛といふ者が、再び市場の復興を計畫し、長さ三百間、幅八十間の地を領主から借り受け、市場を開いた。これがだん〳〵伸展して市街を作り、藩政時代には郡奉行を置くほど盛況を呈したものであつた。今人口約六千。

特産物に出町織物として名が高い麻織物がある。

東四杆にある栴檀野は一名般若野といひ、壽永年間に平盛俊が今井兼平と戰つて敗走したところであり、その後天文年間には長尾爲景が神保左京と戰つて戰死し、更に永祿年間その子謙信が行脚僧に變裝して敵狀を探り左京を亡した古戰場である。今に長尾塚といふ古い塚が田圃の中にある。

旅館　水月樓（三圓程度）

福野町　福野驛所在地

中越線と加越鐵道との交叉する福野驛の所在地福野町は礪波平野の中央にあり人口五千、商工業の盛んな縣下有數の町で、町附近に老樹が繁茂してゐるが、それは享保年中藩侯から伐採を禁止された御止林の名殘を止めてゐるのである。

この町も慶長以前は極く淋しい一寒村に過ぎなかつたが、加賀藩で土地の開墾や地領の竿入れをなし、五代綱紀のとき土地の有志が町制を布く請願をなし、初めて市場町となり、奉行の別府新助等の指導宜しきを得て次第に發展して來た。高岡以南地方の綿織物の中心產地で、

この地方から出る木綿に福野縞の名がある。この綿織物は初めは普通家庭で八講布を織るに過ぎなかつたが藩主の命により幕用布地を製したのが機會となり次第に地方的產業として伸びて來た。その後越後縮の製法を研究し、近江の能登川彥留から職工を入れたりして普及に力め現在、種類は夜具縞、上布、白木綿、金巾などがあり、年產額三百餘萬圓に上つてゐる。

この地の夜鷹祭は又にはか祭ともいはれ、古く慶安五年に伊勢神宮から神明社の神體を勸請した時、倶利伽羅峠にさしかゝると黃昏となつたので、町民擧つて行燈を携へて迎へた故事があり、それがその後町の年中行事となつたものである。

祭の當夜は高御座、神輿、花鳥、人物、城郭、舟車などの型に作つた三十餘臺の大行燈を曳いて練り廻り、毎年意匠を新たにするのが一層人氣を呼び夜鷹節の太鼓と拍子木の囃子とで賑やかである。

夜　鷹　節

五條の橋から牛若辨慶ヨ蹴合ひ跳合ひ、サヽ辨慶負けた、サヽドツコイサノサ、ヨイヤサ、チヨイヤサ

瀨田の唐橋唐銅擬寶珠ヨ水に影さす、サヽ膳所の城

囃子　前と同じ

高瀨神社　加越鐵道高瀨村驛の南三〇〇米

高瀨神を祀る國幣小社で、延喜式内の古社であり越中の國一ノ宮である。

神祇志料によると「按神名帳頭註に高瀨神は氣多同神也と云ひ、射水郡氣多神と固より同神なるを以て、彼も此も互に高瀨神とも氣多神とも云へし故にや神社啓蒙には「礪波郡氣多神一名高瀨神」と云ひ、一宮巡詣記、三方圖會、越中國舊事記には射水郡氣多神社の事を高瀨大明神或は氣多神と云ふ、即一宮也とみえて、甚だ混らはしければ、孰れよしとも決め難けれど、本社は寶龜の時より神階をも授けさせ給へる名神にして、貴き社と聞ゆるに、氣多神は位階も坐さず劣り給へるが如くなるを以て、姑く本書に從て一宮とせり」とあり、上古は氣多神社と稱へられたこともあり、朝廷の崇敬厚く、歷代の天皇は勅使を下して綿穀を奉納されたり位階を授けられたりした。

神社附近の地名に若宮、勸學田、神子屋敷、鎌倉屋敷、

大宮司田、神社畑などゝいふのが殘つてをり、中世までは宏大な規模であつたことが偲ばれる。

戰國時代になつて社頭は荒れるに委かされたが、前田氏が領主になつてから漸次復興し、老樹の繁つた中に天明三年再建の拜殿と天保七年に再建した幣殿及び本殿が建つてゐる。

九月十三日の例祭に行はれる奉納踊は、弘化二年から引き續いて催されてゐるもので近鄕から參詣する者が多い。

井波町

加越鐵道井波驛所在地

八乙女山の麓にあり、昔から五箇山への交通の衝に當つて物資の集散の多い山間の都會で蠶卵紙、絹、綿織物などを產し、殊に井波玉紬は古くから名があり、堅緻な特質があるので知られてゐる。その他に井波彫刻の名が知られてゐる。

明德元年八月、本願寺五代の綽如上人は北陸七箇國勸進の勅許を得てこの地に來たが、當時は上人の勸進帳に「爰に圖らずも一勝地を得たり卽ち越中國都波郡山斐鄕內この所を井波と稱し山深ふして俗緣ひそかなり里遠くして人こと稀なり」とあるやうに、人里を離れた山間の僻地であつた。上人はこの地の杉谷の山麓に瑞泉寺を建てた。その後寺が隆盛となるとともに山村も門前町として榮えて來たのである。

戰國の世になつてから瑞泉寺はいよ〳〵盛んになつたがそこへ蓮如上人が北國に下向して來たので門徒は靡然として集まり、所謂一向一揆の起つたときは寺がその根城となり、寺の周圍には壘を築き郭を構へて兵馬を養ひ礪波郡の大半を所領とする樣になつた。文祿元龜の頃には武田信玄と氣脈を通じて上杉謙信とも戰つた。その頃は坊主大名十八名が加、越、能に亘る七十餘寺に號令して、井波を越中の府中と稱してゐた。

その後天正九年佐々成政のために攻められ寺を始め、全町家三千餘が全部燒かれてから町民も離散し全く衰へてゐたが、前田利家が越中を領してから瑞泉寺も舊に復し、町も次第に昔の繁華を取戻して來て今日に及んでゐる。

井波彫刻

井波彫刻は數百年間門外不出の技巧で、その多くは室內裝飾の欄間に用ゐられ、井波が生んだ獨特の藝術である。その元祖は能登牛首から來た與八郎といふもので、その子孫の第四世與八郎が伽藍建築を志して元祿年中に京都に出て彫刻の奧義を究め、京都の寺院建築にも幾多の作品を遺してこの地に歸つたが、その後累代その技を傳へて今に至り、その門から出た十七の彫刻師とその門人が社寺の裝飾彫刻に携はり、製品の年產額は四萬圓を超えて町の主要產業となつてゐる。

瑞泉寺

加越鐵道井波驛から南一粁半

杉谷山と號し井波別院と稱して眞宗大谷派五十餘の別院の內の一つである。この寺の創立が井波町の起源であることは前に說いた。天中年間後小松天皇の朝に明から國書が來たが當時京洛の名僧智識も解することが出來ず青蓮院門跡の奏請により本願寺時藝(第五世綽如上人)に讀ませることになり、北國に下向して杉谷草庵にゐた綽如上人を迎へることになつた。

上人は直に上洛一將軍義滿の前で異國の牒狀を解義し、且つ法義御聽聞の勅諚を受けて聖德太子傳を講じたが、帝の御感殊の外で、太子二歲の木像と元加茂の寶物金岡大納言の描いた太子繪傳八幅を賜ひ、尙越中井波に一宇建立の淨財として北陸七箇國の勸進を勅許された綽如は再び越中に來て近國奉加の助力を得て成就したのが當寺である。

後に蓮如上人が北國に下つて一向一揆が勃發した時には、この寺がその本據となり城郭を構へ防備を堅固にして加越能三箇國に號令したことは前述した。

今の本堂は明治十二年火災後の再建である。太子堂は大正十五年に竣工したもので、後小松天皇より下賜された太子二歲の像を安置してゐる。

この他寶曆年間に建てた大門、昭和七年に完成した鐘樓などの大建築があり、これ等の建築と彫刻とは井波美術の粹を集めたものとして誇つてゐる。

七月二十二日から一週間行ふ太子傳會は瑞泉寺は勿論井波町の重要な年中行事で、遠近から信者が多數集つて

頗る盛大である。

多くの寶物の中で綽如上人勸進狀一卷は重要な寺寶となつてゐるが、これは紙本墨書で、明德元年八月の奥書があり、國寶に指定されてゐる。

廣大な境内に前記の諸大建築の他書院、茶所、鼓樓、庫裡等の堂宇が建ち並び、後園一帶は木石がよく配置されて風趣があり、また寺域の東隣の舊井波城郭趾には綽如の遺跡臼浪水といふのがある。こゝは上人が上洛の途上乘馬が蹄で土を掘つて清水が湧き出したといふ由緒の所で、上人の勸進帳に「この地に靈水あり故に瑞泉寺と稱す」とあるので知られるやうに寺名の起源となつた清泉である。

後人この遺跡を慕ひ、草庵を結んで阿彌陀如來を安置した。庭内は老樹が繁つて幽邊なところである。

世にふりしすゝきがもとの泉かな　樗良

湯谷温泉

加越鐵道青島町驛から東南四粁

牛岳の麓、庄川の右岸にある、湯は河中に噴出する温泉を引いて河原に浴場を開いたもので、庄川の奔流と重疊たる山々の深巒、これに添へるに東洋一といふ庄川のダムがあり、雄大な環境をなしてゐる。天文年中上杉謙信が加賀へ攻め入つたとき、敵の戰傷兵が、再び戰場へ出るのが餘りに早いので、怪しんで密かに調べて見ると、敵の傷兵は湯谷の温泉に浴してゐることが知れ、その療養價値に驚いたといふ傳說がのこつてゐる。

鹽化土類含有食鹽泉で、婦人病、創傷、貧血症、胃腸病等に効く、

附近には蓮如上人腰掛岩、大佛岩、布瀧などの奇勝があり庄川の上流一二粁の間には一大湖水ができたりして遊覽の設備があり浴客に興をそへてゐる。

旅館　湯谷温泉

名物　鮎、茸

大牧温泉

加越鐵道終點青島町驛から一二粁、途中小牧堰堤の乘船場まで自動車があり、そこから庄川峽を溯る汽船便がある、また庄川電力會社の電車の便もある

小牧堰堤によつて湛へられた湖に臨んだ明るい温泉場で、昔は河邊に石を積み穴を掘つてその底に湧く温泉に入るといつた原始的な山の湯であり、然もこゝへ十數粁の險路を辿つて辛うじて行く不便な所であつたが、庄川電力の工事完成と共に近代風の瀟洒な大牧温泉旅館が建てられ面目を一新した。

この湯は天文年中に本願寺の綽如上人が谷間に飛來する山鳩の跡を探つて發見したものと傳へ、療養に適してゐる。

泉質は石膏含有鹽食鹽泉で、温度五四度、胃腸病、リウマチス、婦人病、神經病に効き、療養浴客の他に庄川峽の探勝を兼ねた浴客が多い。

附近には吊橋、藤橋、籠渡しなどの奇勝がある、こゝから上流二粁の祖山には加賀騷動で知られた大槻傳藏終焉の地祖山温泉があり、泉質は大牧と同じである。なほ湯谷、大牧、祖山を通じ庄川上流の各村落に唄はれる麥屋節は平家の殘黨が都の榮華を偲ぶ心から生れたものとして哀調を含んでゐる。

旅館　大牧温泉旅館(二圓程度)

小牧堰堤

小牧堰堤は牛嶽山麓に高さ約八〇米、長さ三〇〇米の大絶壁を築いて庄川の水を湛へたもので、湛水は上流一六一〇米に亘つてゐる。

貯水量三千七百四十三萬六千立方米季節的にも時間的にも自由に使用水量を調節し得る設備となつて居り、小牧發電所は堰堤から長さ一二〇〇米の隧道水管で導いた水力で七萬二千キロワットの發電をしてゐる。

祖山堰堤

小牧堰堤から汽船があり、更に大牧温泉で乘換へて十分

この堰堤は小牧堰堤と共に東洋一といはれる大規模なもので、濃飛の國境烏帽子岳に源を發してゐる庄川が、越中五箇山の山莊を貫流して祖山地先で俄かに轉回曲流し、兩岸に大岩の絶壁が對峙する所に七五米の高い堰堤から轟轟たる飛瀑を落して豪壯な偉觀が見られる。

堰堤の上流は人工湖をなして輕快な發動汽船を浮べて上流約八粁餘を遊覽航行することができ、あたりの山の姿が湖水の面に映るのが勝れた眺めであり、又兩岸の樹々が紅葉する時は著しく壯觀である。

祖山の上流梨谷川が庄川本流に合流する邊は相美峽の名があり庄川本流には大鵬島橋、梨谷川には梨谷川橋が

架けられ景趣勝れてゐるが梨谷川橋南詰に近く大岩盤上に芝生の生えてゐる千疊岩があり、その西の上松尾部落には靈岩天柱石がある。

天柱石は英閃安山岩の斜に柱狀をなして屹立するもので、高さ三五米、周圍七〇米に餘るといひ、その形は大魚が飛びあがつて半身を浮かしたやうに見える。

村民はこの天柱石を靈石として崇敬し、明治時代までは春の土用から秋の土用までは近づかないことにして居り、若し之を破つて靈石に觸れると忽ち天地震撼して大暴風雨を起すといひ傳へて神聖視してゐたものである。

五箇山

五箇山は庄川の上流である赤尾谷、上梨谷、下梨谷、大谷、利賀谷の總稱で今では平村、上平村、利賀村となり、峯巒重疊の間に點々と部落をなし、昔から源平爭亂の後敗亡した平家一族の逃避した地だと傳へてゐる。

山間であるから田畑が少なく米穀に乏しいが、養蠶、製紙などが行はれ、一家同族が同居する大家族制のものが多く、淳朴な風俗も殘つてゐる。

舊幕時代には加賀藩の謫所となり、加賀騷動の發頭人である大槻傳藏も平村祖山に流され、そこの獄舍で怏悒の日を送り終に自害した。その他事に坐してこの山中に晩年を養うた志士も少なくなかつた。

中越線の城端驛から南へ、乘合自動車で二時間行けば人喰谷の山徑を迂曲して五箇山の中樞部落下梨に着く。また加越鐵道青島町驛から乘合自動車或は庄川電氣軌道電車によつて二十分で小牧堰堤に至り、こゝから連絡船で庄川峽の絕景を賞しながら約四粁を溯航した祖山堰堤で一旦乘換へ、祖山から下梨までは八粁同じく船で三十分かゝる。

庄川水流が電力發源に利用せられ大牧、祖山などに大堰堤が築かれるに伴うて、大牧溫泉も面目を一新し堰堤による人工湖の作りなす數多の勝景も出現し、交通の便も開かれるなどして、永く世俗を距てゝゐたこの地も觀光に視察に訪ふ者が漸く數を加へ風俗を現代化して來たが、獨特の歌詞と優雅とを誇る古謠麥屋節はその保存會も下梨にあつて古のまゝ今に傳はつてゐる。下梨の南二粁、庄川の支流田向、湯谷川の上流に野趣多い湯谷溫泉がある。泉量豐富で消化器病と皮膚病に效く。

五箇山の古俗に就ては越中地志に次のやうな記事がある。

五箇山雄神川の兩邊數十箇村あり、かゝる嶮岨の山奥なれば世の人と交はる事なく、人物皆質素にして神代の民もかくやありけんと思ひやらる、男女とも冬の寒さにも單衣物を著し、曾て綿袍の製作なし、婦人は白き絹の最長を顧卷にして帶し同じく白き絹を結び、下白き手帕を肩に打かけ佳節祝ひ日又は他國の初々しき客あるにも必らずかくの如きかたちに出たち對面をなす、是を此里の婦女の禮服とせり、さながら其樣能狂言の女によく似分たり、始めて見るもの絕倒して笑ふ。

麥屋節

麥屋節といふのは五箇山の各部落に傳はる古い俚謠で平家踊ともいひ、笛、太鼓鉦金で囃し歌にあはせて踊る。

壽永の昔比ひなき榮華權勢を一朝に失つた平家の一族が安住の地を求めてこの人跡稀な五箇山中に遁れ、麥を蒔き薪を伐りつゝ華やかだつた往時を追懷し、在りし日の歡樂を追うて自づと唄ひ出され、それが生活の慰安とも糧ともなつたもので、それが俚謠として殘されたものだといひ、古武士的風格の中にいひ知れぬ哀調を含んでゐる。

麥屋節

麥や菜種は二年で刈れる
麻が刈られようか半土用に
こりのおやぢは酉の年生れ
はがい重ねておめでたう
こなたさしきの床の間のゑびす
鯛をかゝへてにこにこと

福光町

福光驛所在地

礪波平野の西南部に位し、遠く醫王山を控へ、東方大門山の中腹に源を發する小矢部川の清流は町の東端を貫いて吉江村と境してゐる。地勢は平坦で傾斜が少く、多に雪は多いが地味肥沃で農業に適してゐる。人口約五千

町の西に古城阯があり、壽永年間、石黑太郎光弘及び福滿五郎、同く彦二郎等のゐた所であつたが、文明十三年瑞泉寺僧徒のために攻略された。今は栖霞園といひ眺

望がよい。古來製絲業が盛んで高岡に次ぐ紡績業地で主な物産は農産物を除いて生絲、絹織物、麻織物、木製玩具などである。

旅館　清明樓、常盤樓（二、三圓程度）

川合田鑛泉

福光驛から二粁自動車がある、別に城端町からも自動車の便がある

大岩不動尊のある桑瀧山を前にし、四季の眺めすぐれた療養向の湯治場である、附近一帶の山野には鶫、鴨などが多く狩獵に適してゐる。

アルカリ性の食鹽泉で浴用加熱し、胃腸病、皮膚病、子宮病などに效く。

旅館　川合田旅館（二圓程度）

城端町

城端驛所在地

山田川上流一帶の丘陵地を占め、麥屋節で有名な越中五箇村に入る門戸に當り、南は平村を經て岐阜縣白川村に通じ越中南部での商工業の一中心地となつてゐる。

特産として薄絹と城端塗があり、薄絹は城端絹といつてその起源が古い。その創祖は南朝の遺臣畑六郎左衛門時能の後裔搗部であるが、次第に盛んとなり明治大正の頃に組合が出來共同乾燥場を設くるなどのことがあつて長足の進歩をなし、その後各絹織産地が人絹機業に轉向した際にもこゝだけは本絹製品を固守したので、壁地系統の婦人着尺地、帶地などは斷然他の産地を壓倒して全國的に有名となつた。

又城端塗は黑漆に金銀粉を用ゐず、白漆を巧妙に使ひ、それに色漆で花鳥草木を描いた雅味に富んだものである、文明年中に眞宗の僧祐玄といふのが蓮如に從つて越中に來たが城端に止まり、その孫の治五右門といふのが創始したと傳へて、治五右衛門塗の別名がある。

旅館　吾妻樓、日野屋（二、三圓）

名物　平々人形

立野ケ原スキー場

城端驛の西南二粁

茫々たる立野ケ原の丘陵地にありこゝは陸軍演習場の高地で袴腰山の麓に當つてゐる。スロープは頗る雄大で起伏が多く十二月下旬から三月上旬まで一米内外の積雪

があり雪質は大體軟雪であるが初心者の練習に特に適してゐる。

旅館は立野ケ原鑛泉旅館收容約四十人、宿泊料一圓五十錢。

城端ラヂウム鑛泉

城端驛から西南半粁

行樂向の鑛泉場で旅館の設備も相當に整つて數百人を收容でき、客室なども優雅に富み、庭園と共に宏大なものである。

附近には水月公園、城南橋、五箇山などがあり、麥屋節も聞かれる。

泉質は炭酸食鹽泉で加熱浴用に供し慢性消化器病、呼吸器病、脚氣などによい。

旅館　城端ラヂウム鑛泉旅館（二、三圓）

林道鑛泉

城端驛の南四粁三、四粁の間貸切自動車がある

後に馬蹄形の山を負ひ、碼波平野を一眸に收め、遠く伏木港を望む高地にある。昔から盛んに炭酸瓦斯が發生し、古來鳥が窒死するので鳥地獄といはれるところで、湯元に來て耳を地につければ炭酸瓦斯が噴出する轟々とした響が聞え、もしこゝに長く立つて居れば、酒に醉つたやうになるので酒池鑛泉とも呼ばれてゐる。天然炭酸水は飲用によい。浴場のできたのは明治二十一年頃で、初め松田覺右衛門といふ人が開き、その後幾變遷かして今日に至つたもので、湯は新湯と古湯とに分れ、溫用は加熱し痔、胃腸、黃疸に効くといはれる療養向の溫泉場である。

旅館　（古湯）酒池旅館（二圓程度）
（新湯）佐賀屋（二圓程度）

北陸本線に沿うて（石動とその附近）

福岡町　福岡縣所在地

高岡市と石動町との中間小矢部川の右岸に立つ都邑で「妾しや福岡菅笠育ち、色の白いのは親譲り」の俚謠にもある樣に菅笠の產地で、若い娘達や年とつた婦人の手先から編み出す手內職であるが、全國生產高の約六割强の六十萬圓はこの土地から主要物產として出るといふ。人口は約二千の小都邑であるが、商工業は華かな活氣を呈し、その他に富山縣下の大地主も多いといふことである。

石動町　石動縣所在地

石動町は加越國境に近く、西礪波第一の都會である。物資の集散が盛んで、漆器、竹簾、薄氷菓子などの名產がある。

町の西北は能登山脈を負ひ、東南は越中米の產地として知られた礪波平野を控へ、街の形は帶のやうに長い、人口約八千。源平盛衰記に「一手は木曾三萬騎にては小矢部川を打渡し、埴生庄に陣を取り、勢のかさを見せんとて」とある小矢部川は町の東部を貫流して高岡、伏木に至る舟運の便をなし、南福野方面へは加越鐵道が通じてゐる。

木曾義仲が火牛の計をもつて平家を破つた倶利伽羅峠は直ぐ近くで、源平の古戰場として多くの古蹟が點々とのこつてゐる。

義仲が戰勝を祈つたといふ願文が今もある埴生の護國八幡宮は西南二粁で、尙その南二粁足らずに石動、埴生、倶利伽羅をつなぐ舊北陸道があり、その南沿ひの蓮沼村關野谷內には義仲の愛妾巴と葵の墳墓といふ巴塚、葵塚などもある。

巴は信濃守中原兼遠の女で力强く、信濃横田川原の戰には敵七騎を討ち取り、倶利伽羅の戰には一隊の將となつた、義仲戰死後和田義盛の妻となり、朝比奈義秀を生んだ。後越中に來て薙髮し九十一歲で歿したといふ。葵も巴と共に部將となり倶利伽羅の戰に討死したと傳へてゐる。

町の北部にある石動城阯は天正年間前田利家の築造したもので、佐々成政の進擊に備へたといはれ今も濠壘の阯が遺つたゐる。

埴生村石坂には越前の愛發、越後の名立と共に越の三關といはれる礪波關阯があり、附近に關畠、關野內などの地名が遺つてゐる。關を設けたのは和銅六年のことでこの地の蓮沼の農關五郎右衛門は關吏の後であつたと傳へてゐる。

旅館　多致屋、上基別館（二、三圓）

明けわたる戶波の關のまさしくは
　かつ別れゆくせなをとどめよ　　定　嗣

やきたちを礪波の關にあすよりは
　守部やりそへ君をとどめむ　　大伴家持

いづくにか我宿はせんやきたちの
　礪波の關に越えぞかねぬる　　衣笠大納言

洩る月にあくるや關の礪波山　　宗　祇

護國八幡宮　石動縣から西南二粁、自動車がある

埴生村大字埴生にある縣社で、養老年中に豐前の宇佐神宮の分靈を勸請して創立したものであると傳へ、壽永二年に木曾義仲が倶利伽羅山で平維盛と戰つた時、この社に願文を奉獻して戰捷を祈つたところである。

社號の護國といふのは、後陽成天皇の慶長十三年の頃地方の凶作が續いたので、藩主前田利長はこの神社に祈誓をこめて靈驗があり、それで護國八幡と稱へ奉つてからである。

前田氏は累代厚く崇敬し、現在の社殿も前田利常が經營したもので、本殿は寛永十年、幣殿と拜殿とは正保四年の再建である。

社殿は小高い丘山にあつて規模頗る壯大な大建築で本殿、幣殿、釣殿、拜殿とも何れも國寶に指定されてゐる。

廣い境內には老樹が繁つて社域の風致がよい。源義仲の戰勝祈願書、義仲奉納の上刺矢根、上矢鏑、道祖幣、豐臣秀吉の小牧山戰爭の陣備圖、秀吉所用の唐冠形の兜などをはじめ、その他に文書、武具類の社寶が多い。これらは所定の料金を拂へば容易に觀覽することができる。

毎年九月十五日の大祭には氏子の中で少壯の者數十人が甲冑を著、武器を帶びて陣備へをし、吶喊或は凱旋に擬へた儀式がある。

木曾義仲が當社に祈願して御神助を得たことは有名である。當時義仲は埴生に陣を取つて部下を指揮してゐたが北方の森の木の間に神社のあるのを見つけ、それが八幡大菩薩を祀る埴生八幡であることを知つて大いに喜び、大夫坊覺明を呼び當國八幡宮の神前に於て合戰するは味方の戰捷疑ひなし、よつてその祈願のため且つ後代のため願文を捧げたし、「汝宜しきに計へよ」といへば、覺明は直ちに馬から下り義仲の馬前に跪き、矢立を取り出し考へるほどのこともなくすら〳〵と立ちどころに書きあげた。義仲はこの願文に十三の表矢を添へて社壇に奉つたところ、八幡菩薩は義仲の赤誠を受納せられてか忽ち白鳩三羽飛び來つて白旗の上を飛び廻つた。義仲はこれを見て馬から下り兜を脱き頭を地に着け、部下の將兵諸共に禮拜したといふ。

用兵に巧みな義仲は優勢な平軍が倶利伽羅山を越えて越中平野に出てきては地形の同じ所での遭遇戰となり味方の不利なるを知り、その夜のうちに部署を分けて進擊の手配をした。義仲は火牛の奇策により平軍を追ひつめたので平軍一同逃げ途を失ひ周章狼狽してゐるとき、不思議にも白裝束の武人三十騎ばかり南の谷へ向ひ「落せ殿原あやまちすな〳〵」と呼ばり、深い方の谷へ誘ひかけたので、平軍はこれを見て五百騎續いてその谷へ逃げた。後陣の大勢これを見て逃げ易い途があればこそ先に逃げた者どもが引きかへさないのだと我れ先にと人馬馳せ重なつて一萬八千餘騎の平軍が十餘丈の倶利伽羅谷を埋めてしまつた。義仲はこれを見て正しく埴生八幡の加護によるものとして再拜したといふ。

八幡への願文を書いた覺明はもと勸學院の文章博士で藏人道廣といひ、佛道に入つて最乘坊信救と號し、南都にゐたが、以仁王御擧兵のとき、三井寺から南都に狀を遣したとき、その返事を信救に書かせたところ文中に「大政大臣入道淨海は平家の糟糠武家の塵芥云々」とあつたので、後で清盛はこの書を見て大いに怒り、如何にもして信救を殺せといつて内々探してゐるといふので、信救は漆を沸して身に浴び、癩人のやうに姿を變じて東海道を下り三河國で義仲の叔父十郎行家に合ひ、事情を聞いた行家が大いに同情して義仲に臣屬させたものである。

義仲の願文

歸命頂禮八幡大菩薩者、日域朝廷本主、爲累世明君

之纛祖也、爲護寶祚、爲利蒼生、顯三身全容、排三所權扉、午鼓頃年以往、有平相國者、管領四海、惱亂萬民、是既佛法之怨、王法之敵也、倩按彼暴惡不能顧思慮、義仲苟生弓馬家、纔繼箕裘之廛、任運於天道、投身於國家、試欲起義兵、欲退凶徒、雖合鬪戰兩家之陣、士卒未得一致之、霎間恐區々心所、今一陣揚旗戰場而忽拜三所之和光社壇、機感純熟明也、凶徒誅戮無疑矣、歡喜覆淚、渴仰染肝、就中曾祖父前陸奥守義家朝臣、歸附身於宗廟之氏族、自號名於八幡太良以降爲其門葉者、無不歸敬、義仲爲其後胤、傾首年久矣、今發此太功、喻如以嬰兒蠡測亘海、怒蟷螂斧向龍車、雖然爲國爲君起之、全爲身爲家而不起之、志之至神感有之、憑哉、喜哉、伏願冥顯加威、靈神合力、決勝事於一時退寃於四方、然則丹祈叶冥慮玄鑒、可成加護、先令見一瑞相敬白

壽永二年五月十一日　　源　義仲　花押

須川鑛泉　石動驛から北三粁自動車がある

後に稻葉山を負ひ、子撫川の流を前にしてをり、無色透明の食鹽泉を加熱して浴用に用ゐてゐる。療養向の素朴な溫泉地で、神經系統病、皮膚病、胃腸病、婦人病などに効能がある。附近の鼓ノ瀧は毎年九月頃になると、瀑の音が鼓のやうに鳴るのでその名があり、その他に觀音瀧をはじめ數々の瀧がある。うぐひ、鰻、鶫など地方色の濃い味覺を食膳にのせて入湯者を喜ばせる。

旅館　鑛泉旅館（二圓程度）

安居寺　加越鐵道柴田屋驛の南二粁、別に省線福野驛から三粁自動車がある

西礪波郡西野尻村安居寺にあり、眞言宗の古刹で、養老二年印度の僧善無畏三藏が今の本尊觀音菩薩を携へてこゝに來て草庵を結び、安居供養したのが寺の草創だと傳へてゐる。

壽永二年木曾義仲が平維盛を迎へ擊つた礪波山合戰の時兵火に遭ひ、灰燼に歸してからは全く衰微してゐたが前田利家が越中を領してからこの寺を祈願所とし堂宇の建立、寺領の寄進などに努め、現今の仁王門觀音堂も慶長十一年前田氏の再建したものである。本尊觀音像は平安時代初期の作で國寶になつてゐる。